

茨城県近代美術館 研究紀要 14

2021年度

目 次

書簡で辿る中西利雄の滞欧生活 山口和子

はじめに	1
I フランス留学まで	1
II 1928年5月～11月	2
III 旅にあけくれる1年：1928年末～1929年	6
IV 1930年の絵画制作 I (1月から8月)	19
V 1930年の絵画制作 II (9月から12月)	24
VI 1930年パリでの暮らし	28
VII 帰国の年=1931年	36
おわりに	45
カラー図版	49
モノクロ図版	57
中西利雄滞欧書簡リスト	65
中西利雄滞欧年譜	72
関連地図	78

書簡で迎える中西利雄の滞欧生活

山口 和子

はじめに

中西利雄は滞欧中、家族に宛てて数多くの手紙や絵はがきを送っている。ご遺族のもとにのこされているそれらを、筆者が初めて調査させていただいたのは、1997年から98年に、当館および小田急美術館で開催した「没後50年 水彩画の革新者 中西利雄展」を準備している時であった。その数は、手紙が120通(封筒のみ、手紙のみというものを含む)、絵はがきが約240枚(その中には、複数のはがきに文章を綴り、手紙のようにまとめて封書で送ったものもある)に及ぶもの(「中西利雄滞欧書簡リスト」本書pp.65-71を参照されたい)で、中西の筆まめぶりが窺える(なお、本書で紹介する中西の書簡には、このリストと照合するための番号を次のように付している。家族宛絵はがき:P-1~P-238、家族宛手紙:L-1~L-120、野口健司宛絵はがき:PN-1~PN-7)。日記でも書くように、日々の出来事や悩みを、ほぼ毎日書き送っている時期もあり(届いた手紙に返信するという形ではなく)、いずれにしてもこれらの書簡は、ひとりの若き留学生の様々な思いはもちろん、当時の外国生活の様子などをつぶさに伝えるものともなっている。と同時に、約240枚の絵はがきは、100年ほど前の諸外国における風景や風俗等の記録としても貴重であることは、言うまでもない。

このリストからも明らかなように、中西の書簡は、1929年までは絵はがきが多く、1930年からは手紙が中心となる。これは、中西が1929年まではもっぱら旅に明け暮れており、1930年以降はパリのアトリエで過ごすことが多くなったことと関係している。しかし1928年の手紙も一部が伝わっているので、もしかすると1928~29年の手紙は、何かの事情で失われてしまったのかもしれない。

また、東京・中野の中西家では、息子からの書簡の到着日を封筒等に記載していることが多く(前掲本書「書簡リスト」)、その時々郵便事情で多少の差違はあるものの、パリからの書簡は概ね17~18日で、中野まで到着していることがわかる。一時、到着まで1ヶ月以上かかる場合があり、中西も疑問に思うのだが、それらの書簡には、「Via Siberia(シベリア経由)」と書き入れるのを忘れたことに気づき(1930年4月23日付母和歌宛手紙:L-15)、以後は順調に届くようになる。

中西利雄の滞欧生活については、中西の著書『水繪 技法と随想』(綜合美術研究所、1943年(1955年に美術出版社から『水繪の技法』として改題・再版))所収の「水繪と私—巴里留學とフランスの水繪」に詳しいものの、滞欧期の手紙や絵はがきの調査を通じて、さらに多くのことが明らかになった。と同時に、手紙や絵はがきの日付や消印等を時系列に辿る中で、同書で記されている年月の記述には、事実と多少齟齬が生じているものがあることにも

気づいた。上述の著書は、中西後年のものであり、年月日の多少のずれは、ある意味当然ともいえる。

筆者は、前述した中西利雄展(1997-98年)の図録制作に際し、書簡等の調査を通じて新たに判明した事実を、年譜や作品解説等に反映するとともに、同図録所収の拙稿(「中西利雄の滞欧時代—画家中西利雄の誕生まで」)にまとめた。しかしながら、ご遺族のもとにのこされている絵はがきや手紙は、既述のようにかなりの数にのぼり、展覧会図録の限られた紙面では紹介できなかったことも多く、いつか形をかえて詳述したいと考えていた。さらにその後筆者が担当した水彩画の展覧会(「近代日本の水彩画—その歴史と展開—」茨城県近代美術館、2006年、「水絵への情熱—中西利雄と蒼原会の画家たち」茨城県つくば美術館、2012年)等の準備を通じて、中西利雄のご遺族のみならず、中西の友人たちのご遺族のもとにのこされていた資料も調査する機会を得た。

本稿では、筆者がこれまでに調査した中西利雄の書簡(手紙・絵はがき)を紹介しながら、中西の滞欧生活について述べていく。ただし、本稿での書簡の紹介のしかたは、章立てに則し、筆者の視点で各書簡から一部を抜粋して論じていくものであることを、まず記しておく。そのため、書簡によっては複数箇所が抜粋され、それぞれが本稿の異なる箇所で紹介されている場合もある。本来であれば、註釈を付けて手紙の全文をありのまま掲載したいところではあるが、何分、中西が家族に宛てた遠慮のない手紙には、現時点ではまだ、公開を控えた方がよいと思われる記述も多い。いずれにしても、いわゆる書簡集のような形での刊行には、もう少し時が必要であろう。

I フランス留学まで

中西の留学までの動向について詳述するのは本稿の目的から外れる。しかしながら、彼の水彩画に対する思いや、その後の人間関係を考察していく上で、留学に至るまでの経緯を知るとは欠かせないため、概観しておきたい。

中西が水彩画と出会い、その魅力にとりつかれたのは小学生の時である。「水繪具——それは私にとって何と言ふ魅力に富んだ材料であつたらうか。純白なエナメルのパレットの上に貂毛の水繪筆で水繪具を溶かす楽しさは私にとって限りなく魅惑的なものであつた」(前掲『水繪 技法と随想』p.296)。初めて水彩絵具に触れた時の忘れられない思い出を、中西は後年、このように述べている。やがて中学時代、図画教師の真野紀太郎(日本水彩画会創立会員のひとり)を通じて日本水彩画会仮研究所に通い本格的に水彩画に取り組み始め、1921年には《河岸》が第8回日本水彩画会展に初入選した。

1922年、中西は東京美術学校西洋画科に入学する。同級生には、荻須高德、山口長男、小磯良平、猪熊弦一郎、岡田謙三、高野三三男、小堀四郎、牛島憲之、永田一脩らがおり、まさに多士済々であった。才能豊かな同級生たちに恵まれる一方、美

術学校の授業で水彩画が教えられることはなく、愛着のある水彩画にこだわる中西は、課題を水彩画で提出して、油彩画で描くよう注意されることもしばしばであったという(前掲『水繪 技法と随想』pp.296-297)。

学校では水彩画が認められなくやしさもあってか、入学の同年、中西は日本水彩画会仮研究所の仲間であった小山良修、富田通雄とともに水彩画の研究グループ「東京三脚会」を作り、同志を募る。同会の写生例会や展覧会の開催といった活動を通じ、中西は友人たちと水彩画の研鑽を重ねていった。1924年3月には、第11回日本水彩画会展に《橋の在る風景》(図C-1)等4点が入選し、同会会員にも推される。その一方、水彩の用材としての制約にも気づき始めた中西は、美校3年からは藤島武二のもとで学び、油彩画にも積極的に取り組んだ。こうした様々な研究の成果か、1924年10月(美校3年時)、第5回帝展に《盛夏麗日風景》(図C-2)が初入選する。帝展への入選は、同期生では永田一脩(1922年第4回帝展入選)に次ぐ快挙であった。さらに中西は1925年、第12回光風会展で光風賞を受賞するなど、美校在学中から水彩画家として、頭角を現していく。また、中西たちは1924年11月に「東京三脚会」を「蒼原会」とあらため、これまでの活動に加え人体デッサンの勉強会を定期的に行い、さらには地方会員制度(後の地方支部)を設けるなど、水彩画の研究グループとして会の活動の幅も拡げていった。

ところで、中西を含め逸材揃いの美校西洋画科同期生たちは、卒業の1年前である1926年2月、「上社会」を結成する。メンバーは44名、ここには中退者や留学生も含まれていた(註1)。ちなみにこの時、岡田謙三と高野三三男はすでに美校を中退し、渡仏している。1927年3月に彼らは美校を卒業すると、半年後の同年9月に第1回上社会展を開催、美校卒業後研究科に在籍していた中西も、同展に出品した。しかしこの展覧会の直後、荻須高德と山口長男が渡仏、こうした友人たちの動向から、中西が渡仏を志すのは当然のことといえるだろう。1928年5月、小磯良平にやや遅れ、中西は日本郵船の「白山丸」でフランスへと旅立つ。美校同窓の藤岡一も同船していた(前掲『水繪 技法と随想』p.299)(註2)。そして中西の後にも、上社会メンバーの渡仏は続く。上社会のメンバーたちがパリにいることは、中西のみならずお互いに心強かったに違いない。一方で中西は、日本にいる蒼原会のメンバーたちを、いろいろと気にかけることにもなるのだ。

II 1928年5月～11月

1) 神戸からマルセイユへ

中西は5月21日に中野区桃園の家を出て、東京駅で蒼原会の仲間たちから見送りを受けて出発、22日に京都、23日に奈良に寄り、その夜は京都の新京極で父たちとビリヤードを楽し

み、5月24日、神戸港から白山丸で出港した(図M-33)。

白山丸は、1923年に竣工した日本郵船の欧州航路向け貨客船で、横浜～ロンドン航路(スエズ運河経由)に就航、この間を約50日で結んでいた。全長158.5m、総トン数10,380トン、ヨーロッパ各国の客船に比べると小型であったものの、豪華な内装や設備が施されていたという。

中西の部屋は二等四号室、四人部屋で、医学博士の野村、広島高等工業学校(現在の広島大学工学部の母体)教授の中江大部(2年間、コレージュ・ド・フランスで学ぶために渡仏。1944年に同校が広島工業専門学校となって以後、第2代校長を務めた)、そして画家の鈴木良三が同室であった(註3)。

5月25日、門司に入港すると、中西は門司から早速、両親宛に絵はがきで、汽車で宮崎八幡宮に詣でたこと、食事のテーブル席が決まり、自分の右が劇の研究に行く生嶋、左が木村毅(小説家、文学評論家)になったことを知らせている(1928年5月25日消印両親宛絵はがき:P-1)。木村は、中西の家族宛の絵はがきに俳句を寄せる(図M-1①②)(1928年5月31日付父理吉宛絵はがき:P-4)など、出港してほどなく、船での親しい交流が始まったようだ。やがてこの白山丸の仲間たちは、「白山会」を作り、滞仏中定期的に集まる機会を持つこととなる。船上での生活について中西は、「船の中の生活はやることが多くて急しい位、退屈なぞありません。午前七時起床、八時朝飯、午前中は本を讀んだり、デッキゴルフやったりします。午後は運動(甲板でキャッチボール)を盛んにやります。六時入浴、夜は本かランプです」(前掲:P-4)と記し、また、このほかビリヤードをしたり、食事もなかなか御馳走が出る(1928年5月28日付母和歌宛絵はがき:P-2)等も書き送っており、楽しい航海の様子が窺える。

寄港地では船から降りて、その土地を観光することが出来た。中西も初めて触れる海外の情景に感動しながら、数多くの絵はがきを送っている。

5月28日上海入港

(1928年5月31日付弟幸三郎宛絵はがき:P-3)

廿八日に上海を見物しました。実に立派な建築が多い近代都市です。眞物の支那料理も味りました。

6月1日香港入港

(1928年6月1日付父理吉宛絵はがき:P-5)

吉岡の案内で島巡りもやり、ピークへも登りました。素晴らしくよい道路二十七里を立派な自動車で一息に飛ばして実にゆかいでした。(絵はがきの夜景をさして)之れが有名な世界三大夜景の一、香港のそれです。

6月7日シンガポール入港

(1928年6月7日付両親宛絵はがき:P-7)

七日、シンガポール着、自動車で博物館 貯水池、マホメツ

トの寺院、植物園等見物。日本人町の會席料理、新喜楽で日本料理を食べました。珍奇なことの續発にたまげてゐます。又猛烈な暑さにも驚きました。これから續いて各地から出しますこんなハガキ、番号をつけてとっておいて下さい。最もよいを送りますから。

6月8日頃ペナン入港

(1928年6月8日頃の絵はがき 封書で複数送付：P-12)

こんな立派な並木道がどこまでも續いてゐます。日本出発以来、日本のやうな道路はどこへ行ってもありません。この上を、自動車で飛すんですから、一寸愉快です。

6月13日コロombo入港

(1928年6月13日付絵はがき 封書で送付：P-13)

六月十三日、コロomboにつきました。ペナンから一千三百里、日本の九州位の島、セイロンの首府です。

6月21日アデン入港

(6月22日付絵はがき 封書で複数送付)

(P-14) 昨六月二十一日、アラビヤの一角、アデンに船がついて、時間があつたので見物しました。寫眞の如く青い樹木なぞほとんどなく、赤黒い岩山を背景に出来た廢墟の如き町です。雨が三年に一度だそうで、大変な所です。日本の有難味を感じました。(図M-2①②)

(P-16) 之は水賣り、こんなのが道をブラブラしてゐます。オアシスも見ました。とてもとても、日本で想像もつかない珍らしいことの續出に膽を潰してゐます。

ポートサイド(エジプト)出港後地中海にて

(1928年6月28日付絵はがき 封書で送付)

(P-19) 之のスィンクス(ママ)見ました。駱駝に乗ってピラミットとスィンクスの間を一寸歩かせるそして寫眞に撮る——これを皆やるようです。僕も寫眞をとりました。

(P-20：弟幸三郎宛)五千年の文化の跡を尋ねエジプトの偉大さを目のあたり、見、感深し。

6月30日ナポリ入港

(1928年6月30日付父理吉宛絵はがき：P-21)

ナポリにつきました。南欧の美しい町です。友人と三人で博物館を見に上陸しましたが、両替する時、金を少ししか買はず失敗しました。ミュージアムは廣過ぎて、とても半分も見られませんが、ティアノ*の名画を見て、歸りに中食をすませ、町を歩き廻って、三時、船へ戻りました。午後六時出帆、明後日(二日)マルセイユへつきます。

*ティツィアーノ

7月2日マルセイユ到着

(1928年7月2日付父理吉宛絵はがき：P-22)

長い航海も終つて、無事、本日、(二日)マルセイユに上陸致しました。船がつくと直ぐ、日本よりの便り十一通入手致し実に嬉しく一通一通たのしみに開封しました。(一中略) 只今、こんな立派なホテルに泊まっております。明日、巴里に向ひます。(図C-31①②)

(1928年7月3日付母和歌宛絵はがき：P-23)

昨日はマルセイユ見物、巖窟王で有名なディフの島も見ました。マルセイユ、さすが欧州の港、立派な町です。

5月21日に中野の家を出てから42日、39日間の航海の後、中西は無事マルセイユへ到着した。到着後、中西は日本からの手紙11通に喜んでゐる。当時すでに、マルセイユの日本郵船白山丸気付で手紙を送ることが出来、また一方日本郵船は、船が主要な寄港地へ到着すると、日本の留守宅へ乗客の無事をはがきで知らせていたようだ(図M-3)。

マルセイユでの中西は、アレクサンドル・デュマの『モンテ・クリスト伯』にも登場するシャトー・ディフなどを観光した後、HÔTEL LOUVRE & PAIX(Le Grand Hôtel du Louvre et de la Paix)に宿泊、「こんな立派なホテルに泊まっております」と、ややしゃいだ絵はがきを出している(図C-31①②、P-22)。このホテルは1863年に高級ホテルとして建てられ、第2次大戦中はドイツ海軍によって使用されるなどしたが、現在は市の行政事務所と店舗等が入ったマルセイユの歴史的な建造物として知られている。この高級ホテルに1泊後、翌3日、マルセイユ発9時40分の急行で、中西はパリへ向かった(1928年7月3日付母和歌宛絵はがき：P-23)。

2) パリからクラマールへ

7月3日夜、パリのリヨン駅に到着すると、山口長男と荻須高德が中西を出迎えた。中西は、当時小磯良平も滞在していた、パリ14区のトンブ=イソワール通り138番地、オテル・ビュファロー(Hôtel Buffalo, 138 rue de la Tombe-Issoire)に身を落ち着ける(註4)。パリ14区は市の南中央部にあたり、エコール・ド・パリの画家たちの拠点であるモンパルナスは、14区の北部(それに接する5区6区の一部を含む)で、このホテルの場所は、モンスーリ公園などに近い、14区の中でも南の方になる。中西が渡仏してきた1928年当時、パリには852人の在留邦人がおり、そのうちいわゆる芸術家の数は、179人であったという(註5)。このパリ14区には、とりわけ多くの日本人芸術家たちが暮らしており、荻須高德や高野三三男らが住んでいたダゲール通り11番地もこの14区にある。藤田嗣治も、この当時はモンスーリ公園の近くに住んでいた。

中西は、7月5日には、一人で地下鉄に乗ってあちこちまわり、エトワールの凱旋門へも登っている(1928年7月5日付弟幸

三郎宛絵はがき：P-24)。16日にはルーヴル美術館へ行き、そこで求めたアングルの絵はがきで、「今日、ルーヴルの美術館見ました。アラユル名画で埋っておって五日や六日ではとても半分も見られないでしょう。」と、父理吉に感想を伝えている(1928年7月16日消印父理吉宛絵はがき：P-25)。またこのホテル滞在中、中西は、近くのモンスーリ公園へ毎朝散歩に行き、雀にパンをやったり、手紙を書いたりすることが日課になった(1928年7月23日頃の母和歌宛絵はがき：P-27)。さらに蒼原会の友人野口健司(註6)へは、「毎日、スケッチ帖もって歩いてゐます。郊外ビヤンクール、ムードンの岡、クラマールの森等、描く所が多過ぎて困る位です。ルーヴルのカモンドのコレクションとルクサンブルグの近代絵画は実に美事です。分けてセザンヌは日本で見たととは大分違い素晴らしい出来です。」(1928年7~8月頃の野口健司宛絵はがき：PN-2(註7))と書き送っており、日が経つにつれてパリのみならず、パリの近郊まで足をのばし、絵を描きはじめた様子もうかがえる。一方、音楽好きの中西は、このオテル・ビュファローで暮らしはじめてほどなく、安ホテルには不釣り合いな「脚のついた立派な蓄音器」を買って来てモーツァルトのレコードをかけたため、宿のマダムが驚いてたちまち中西を尊敬してしまったというエピソードを、小磯良平は後に記している。小磯によれば、その曲はモーツァルトのK378(ヴァイオリンソナタ第34番変ロ長調)で、朝、突然に小磯の部屋にもきこえてきたという(註8)。

「畫集の中で何度か感激した過去の傑作が無数と言つてもよい程蒐集されて」(前掲「水彩技法と随想」p.300)いるルーヴル美術館、「市中に何十となくある畫商の壁面や飾り窓」に「惜気もなく陳べられて」(同前掲)いる現代画家の作品、絵画のみならず音楽についても「レコードだけで知つて居た名手の演奏を直接耳で聴くことが實に屢々可能」(同前掲)な環境という、「強い刺戟の中で最初の一月を茫然なすこともなく過した」(同前掲)後、中西は「静かな生活と新鮮な空気を求めて」(同前掲)パリ郊外のクラマールへ居を移すこととなる。クラマールは、佐伯祐三や小島善太郎、川口軌外等の日本人画家たちが住んだことでも知られるが、この頃、川口はクラマールで暮らしており、他に日本人画家たちも多く住んでいた。白山丸に同船して来た鈴木良三も、はじめパリに住んだ後、クラマールにアトリエを見つけ、移っている。静かな環境でありながらすぐパリへ出られ、日本人もいるこの場所を、中西は、暮らしやすいと考えたに違いない。8月9日、中西は住む所を決め、9月からこの地に移ることにする。

1928年8月9日付父理吉宛絵はがき：P-29(図M-4)

今日、クラマールへ行って画室を見て、大変気に入りましたので、家主に會つて定めてきました。1ヵ年四千フラン、傾斜地の梨の木に取まかれた、未だ誰れも入らない出来た許りの画室、澄んだ空気、青空、赤い屋根、画室の窓から巴里市が遠く望まれ、エッフェル塔がチョビツとたつておるのがよ

く見へます。実に素晴らしい環境、僕の理想の健康地、断然少し位不便は忍んで九月からクラマールに移ります。

その約1週間後、8月17日には、「画室の鍵、もらつて来ました。明日あたり掃除でもして、家具をマガザンで買入れようと思つてゐます。住所名一寸、前のは違つてゐました。」と、正しい住所「41 rue de Fontenay à Clamart(クラマール、フォントネー通り41番地)」を知らせている。(1928年8月17日消印父理吉宛絵はがき：P-30)

しかし、9月3日付の父理吉宛絵はがき(P-31)に記された住所は、「10 allée de Meudon, Clamart(ムードン小路10番地)」に変わっている。8月17日の段階では鍵をもらっただけでまだ引っ越ししておらず、そこからわずか2週間あまりで再度引っ越しをするとは考えにくいものの、何らかの事情で、当初のフォントネー通り41番地から、ムードン小路10番地に移ることになったのであろう。ちなみにこれら2つの場所は、直線距離にして1キロまでは離れていない。

10月12日中西家着の絵はがき(P-32, 図M-5)には、写真に「コノ裏二五階造りのアパートがあります。その二階五号」の書き込みがあり、中西のクラマールの住まい周辺の様子をよく伝えている。当時、パリから出した手紙は、17~18日で中野の中西家まで届いていたようなので、この絵はがきは9月25日頃出されたと思われる。絵はがきの写真の場所は、クラマールの森沿いに続く美しい並木道、La Rue de Meudon(ムードン通り)で、中西のアパートがあるAllée de Meudon(ムードン小路)は、この通りから入る小径のひとつである。おそらく毎日のように通つたであろうこの美しい並木道を中西は作品に描いており、数点が知られている(たとえば図C-4, C-5)。

また中西はこの頃の生活の様子を、『みづゑ』に寄稿している。

只今クラマールのアパートに住つております。二階の五番丁度日本の八疊位の室と小さな臺所がついておるものです。瓦斯があるので大変便利で夜、休む前湯を沸して身體をふくことを必ずやつております。食事は最初十日間程自炊してゐましたが皿洗ひがいかにも面倒なので近頃は近所の素人家で賄をしてもらつてゐます。中食と晩食で十五フラン(一フラン八錢六厘位)、勿論、田舎料理のことゝておいしくはありませんが、しかし結構。時々巴里に出て結構な料理を味つて元氣をつけます、クラマールにおるとお小遣がいりません。近頃や、Nostalgieの氣味です。皆多少づゝやられてゐるやうです。(一中略一)こつちの生活は鍵の生活です、只今僕こと、大小取交ぜ六個の鍵を腰にブラ下げております。(以下略)／クラマールにて／九月廿二日(中西利雄「フランス通信」『みづゑ』286、1928年12月、p.453)

こうして中西のクラマールでの生活が始まったが、この寄稿文を書いた時から1月あまりたった10月30日、家族に宛てた

手紙で中西は、次のように述べている。

1928年10月30日付手紙：L-1

それから、近日、近所の家庭に移ります。老人二人きりの静かな家でその二階の小さい室を借りることにしました。何處か旅行するにしてもアパートですと不用心ですし、ホテルと同じで自分の家と云ふ感じがなく、落付きませんので。度々変更して無駄な金もつかひましたが止むを得ません。

『みづゑ』の寄稿文「フランス通信」にあるように、大小取り混ぜた6つの鍵の生活は、中西にとってなかなか馴染めないものであったろう。加えて、パリに到着して4ヶ月近くたち、「近頃や、Nostalgieの氣味です」と記しているように、ホームシックにも陥る。

日本で考へて居いた繪畫と、此處で見出した偉大な繪畫との間の、その餘りにも甚しい隔絶に茫然として、一つの混亂に陥らざるを得なかつた私は可成長い間徒らな懷疑と焦燥に苦しめられ、その上只一人のアパート住ひは郷愁の堪へがたい淋しさへ加つて、秋雨の降り續く數日を部屋に引きこもつて鬱々と過すやうな日が続いたりした。(前掲『水繪 技法と随想』pp.300-301)

当時の様子を、後年中西はこのように綴っているが、そんな彼が、留学先での一人暮らしの孤独や、食事の心配などから逃れるため、一般家庭に下宿することを選ぶのは、自然な成り行きともいえよう(註9)。

ところで、10月30日付けの手紙にある「老人二人きりの静かな家」とは、4 rue Duffaut(デュフォー通り4番地)のベルジェ家である。デュフォー通りは、La Rue de Meudon(ムードン通り)から入る道の一つで、ベルジェ家は、中西のアパート(10 allée de Meudon)から200メートルほどという近距離であった。『みづゑ』の寄稿文で中西が述べている「近頃は近所の素人家で賄をしてもらつてゐます」というのが、おそらくこのベルジェ家で、毎日のように通ううちに、結局、ここへ移ることになつたのではないかと思われる。中西は翌1929年末(もしくは1930年初)に、パリのエルネスト・クレソン通り18番地のアトリエへ移るのだが、そこに至るまでの1年以上にわたりこのベルジェ家に下宿し、パリに移ってからベルジェ家との交際は続いてゆく。ちなみに中野の中西家では、息子と文通するために、この住所を印刷した封筒を作成している(図M-6)。海外に手紙を出すにあたり、歐文による住所等の記載を間違えないようにという配慮であろう。

また中西は後年、この転居の理由について、次のようなことも記しており、中西の好みを知る上で興味深い。

私がRue Dufort(ママ)の四番地に一年以上も居つたのは、ベ

ルヂエ婆さんの室代が廉かつたからでも、日光がよく入るからでもなく、その室の壁紙が落ついた美しい色をしてゐて氣に入つたからだ。その前に居つたアパートマンの壁紙はその毒々しい赤と黒の花模様で日夜私を脅して一ヶ月あまりで私を追出してしまつた。(中西利雄「壁紙を怖れる」『水繪散策Ⅲ』『みづゑ』345、1933年11月、p.315)

中西がホームシックから恢復していくにあたり、このベルジェ家の人々との触れあいに加え、パリおよびその近郊に住んでいた日本人の仲間たちとの交流も大きかつたであろうことは、言うまでもない。東京美術学校の仲間たちはもちろん、中西が渡仏にあたり乗船した白山丸の仲間たちによる「白山会」の定期的な集まりも、中西の心を癒やすのに一役買ったようだ。11月6日～8日、白山会の十一月例会で、鈴木良三、中江大部、生嶋らとともに、モレ=シュル=ロワンに遊び、中西はその様子をパテベビーで撮影する等して、楽しい時を過ごした(1928年11月6日付父理吉宛絵はがき：P-34)。

このパテベビーとは、フランスのパテ社から1922年に発売された9.5mmフィルムによる、カメラ・映写機のシステムで、8mmフィルムが登場するまで個人向カメラの主流をなした。小磯良平によれば、中西がパリで蓄音器の次に買ったのが、このパテベビーであるという(註10)。中西は滞欧中、このパテベビーでしばしば撮影し、やがて撮影したフィルムの上映会なども行うことになる。またこの11月6日付の絵はがきには撮影したフィルムが「よく出来たら送ります」と書かれているのだが、弟幸三郎もフィルムを撮影する趣味を持っており、中西は日本の家族と、それぞれが撮影したフィルムを送り合い、互いに楽しんでいただようだ(その様子は1930年2月24日付父理吉宛手紙：L-4(本書pp.30-31)からもうかがえる)。

11月8日には、モレ=シュル=ロワンからの第2信を、父と弟宛に送っている。

1928年11月8日付父理吉・弟幸三郎宛絵はがき：P-35(図M-7①②)

モレーは実に画材の豊富なよい所です。巴里から一時間半程ですが全く田舎で、こゝに、六日、七日と二泊して寫生したりボートに興がったりしました。昨七日の午后から、フォンテンブローの森を横ぎって、バルビゾンの村にミレーの画室を訪ねました。昨夜は夜食後、ストーブを圍んで、皆なで日本の民謡等合唱しました。旅情シミジミわいて皆、日本のこと想ひ出したやうです。左の端のオテル ド ロアンが僕の泊まったホテル、前の川に浮んでおる湯舟で湯に入ってよい氣持ちになったのです。今日は午后から巴里にかへりましょう。

この1ヶ月後、ヨーロッパでの最初の冬、中西はかねてから希望していたイタリア旅行に出かける。

Ⅲ 旅にあけくれる1年 ：1928年末～1929年

1) イタリア旅行

第一に私の考へたことは折角欧州まで勉強に来た以上、此處で見ることの出来る繪畫の傑作をなるべく多く且シッカリ見て置こうと云ふことであつた。そして氣持の落付かない前にガサガサとお土産の滞歐作品などを描きなぐることは斷然癪めやうとも思った。(前掲「水繪 技法と隨想」p.301)

こうした思いのもと、この後の1年間(1929年11月まで)、中西は旅にあけくれることになる。その最初といえるこのイタリア旅行には、小磯良平と、小磯の神戸二中(兵庫県立第二神戸中学校)の先輩で画家、また朝日新聞社の社員でもあつた古家新(1928年～1929年滞欧)が同行した(註11)。旅行に際し中西は、ガイドブックで細かく下調べをしたようで、のこされている手帖等(図M-34, M-35)も、それを物語っている。小磯は次のように述べている。「中西君とはよく旅行をいっしょにした。イタリアの旅、スペインの旅、ロンドンへの旅。彼はブルーギットをしらべる事が大變得意であつた。ホテルやレストランの事情にくわしく、下しらべしてあやまりなくやる事に興味があるらしく私は唯ついてゆくだけであつた」(註12)。3人は、12月10日の夜パリを發ち、スイス経由でイタリアに入る。以下、中西が出した絵はがきをもとに、この旅行の様子を辿っていこう。

1928年12月11日付父理吉宛絵はがき：P-38(註13)

昨夜、巴里發、スキス経由、伊太利の旅に出ました。アルプスを境に、美しい太陽の下に、伊太利の平原は廣々と展開してゐました。(一中略)今日と明日はミラノ泊り、レオナルドの最后晚餐を見てベニスに行きます。先々元氣、言葉は一三三すら分らない三人連、よく出かけたものです。伊太利ミラノ、メトロポールホテル

1928年12月13日消印父理吉宛絵はがき：P-39(図C-32①②)

今日、午前ミラノをたつてパドバに来ました。汽車の中でお辨當を求めましたが一寸面白いものでした。紙袋の中に、パン、ハム、マカロニ(小皿に入れておる温かい)、鳥の肉、チーズ、お菓子、果物とブドー酒一合、それにホークとナフキンと楊子が添へてありました。パトバ午後一時三十分着、アルベルゴ、スタンシヨネ*に投宿、一寸ミラノより貧弱な宿、直ぐ歩いてサンマリアデルアレナ寺にジョットの素敵な壁画**を見ました。明日は水の都ベニスに向ひます。

*アルベルゴ・スタツィオーネ(Stazione)か? **スクロヴェーニ礼拝堂に描かれたジョットのフレスコ画。この礼拝堂は、古代ローマの競技

場(アリーナ)跡に隣接していることからアリーナ礼拝堂ともいわれる。スクロヴェーニ礼拝堂の正式名称は、アリーナの慈愛の聖母マリア聖堂(Santa Maria della Carità all'Arena)。

1928年12月14日付父理吉宛絵はがき：P-40(図C-33①②)
ベニスに来ました。停車場の前は直ぐ川で、其處からゴンドラに乗って海に近いアルベルゴ、ホンタナと云ふホテルに泊りました。ミラノでよいホテルに泊つたのでここは遠慮して学生的な家にしました。(一中略)川沿ひにこんな美しい、面白い家が立並び、世界中の人が集つております。こゝで一週間位、画を描いたり、お寺を見たりします。三人共よく気の合つた、実に愉快的な旅です。

1928年12月15日付弟幸三郎宛絵はがき：P-41

ベニスの第二日目、午前中デュカルの壯麗なる宮殿*にベニス派の代表的作品を見る。午後はサンマヂョレーの寺**へ、(一中略)毎日毎日寺を見て歩くので、なかなか疲れますがしかし元氣です。

*パラツォ・ドゥカーレ **サンタ・マリア・マッジョーレ教会

1928年12月21日消印野口健司宛絵はがき：PN-3

只今水都ベニス。之の名物、スカラロッコ*のティントレットの大壁画、チチアノの傑作、(一中略)明日は美しい花のフローレンスへ。

*スクオーラ・グランデ・ディ・サン・ロッコ(サン・ロッコ大同信組合)

この野口健司宛の絵はがきには12月21日の消印があり、「明日は美しい花のフローレンスへ」とあることから、中西は12月22日にヴェネツィアを發ち、フィレンツェに行ったことが分かる。しかし、この旅でフィレンツェから出した絵はがきは、のこっていない。中西が出さなかつたのか、出した絵はがきがなくなつたのかは不明である。ただ、次に訪れたアッシジから出した12月29日付母和歌宛の絵はがき(P-44)は、フィレンツェのアルノ川沿いの風景のもので(図M-8①②)、宿泊したホテルが写っており、「コゝが我々の泊つたパンシヨン、クロシニ(Pensione Crocini ペンシヨネ・クロツツィーニ)」の記載もある。そして、中西がフィレンツェの寒さにやられ、風邪をひいたことが書かれているので、体調を崩したために、フィレンツェから便りを出せなかつたのかもしれない。

12月25日には、フィレンツェを發つてアッシジに入る。

1928年12月28日付弟幸三郎宛絵はがき：P-42

二十五日、フローレンスをたつて、聖フランシスの故郷、アツシに來ました。こんな、やうな山の中腹に美しい静かなアツシの町は横つてゐます。朝夕の景色等、一寸と日本の高山のやうな感じがします。

同日付で父理吉にもほぼ同内容の絵はがき (P-43, 図C-34①②) を出している。そして12月29日、一行は首都ローマに入った。

1928年12月29日付母和歌宛絵はがき：P-45

十二月廿九日、午後四時アツシヽをたつてローマに来ました。さすが伊太利の首都だけあってなかなか立派です。ホテルアレキサンドル*と云ふ近代的の宿に泊って疲れもなほりました。万事好都合にはこんでおり、元気ですから御安心下さい。*創業1910年のホテル・アレクサンドラであろう。1月10日付絵はがき (P-53) では「アレキサンドラ」と記されている。

1928年12月30日付母和歌宛絵はがき：P-46(図C-35①②)
昨夜はフラスカチとか云ふお酒などのんで休みましたので今日(三十日)は元気恢復、午前、国民美術館*とバルケロ**と云ふミュージーを見ました。巴里のやうな美しい公園もあり、並木道もあって、なかなか近代都市です。午後は三人で目的もなく、町を散歩しました。まだ日本料理店を発見出来ません。明日は大使館へ行って尋ねて見ましようと思ひます。
*Museo Nazionale Romano(ローマ国立博物館)のことであろう。
**ボルゲーゼ美術館のことかもしれないが、不詳。

1929年元日付父理吉宛絵はがき：P-48(図C-36①②)

ローマで迎へた昭和四年正月元旦は相悪、朝から雨でした。八時半、三人でパンを食べて例の通り美術館へ出かけましたが、西洋でもさすが正月とて何處もお休み、雨に降られて一寸怨観、そこでタキシーを日本料理、日本館に飛ばしました。と又、之は意外、スッカリ本式に先ずおとそが出る、テーブルの上を見ると、黒塗の膳に寿のはく、黒豆、昆布巻、おなます、エビの口取、甘蔗、之やで おぞうにを祝つて大いに満足しました。しかし會計で三人で廿円*は一寸高いですが、しかし無理ありません。
*当時の1円を現在の2,000円前後と換算すると約40,000円。この換算については、本書p.8を参照されたい。

1929年1月2日付父理吉宛絵はがき：P-49

正月二日、ローマを去つてナポリに来ました。昨年六月廿八日*白山丸でナポリによつた時から半年振二度目のナポリ入りです。ホテル、ベルトリニと云ふ第一流のホテルに泊つてゐます。山の中腹にあって窓から見たナポリ湾の景色は素敵です。
*実際のナポリ入港は6月30日である。

1929年1月4日付父理吉宛絵はがき：P-50(図C-37①②)

一月四日、日本人専門の案内人アントニオ*をたのんでポンペイの廢墟を見物しました。ナポリから自動車で一時間許り、雨の中をアントニオの案内で可成くわしく見て廻りました。

劇場、パン屋、お寺、富豪の家等。よく掘り出したものです。終つて同ぢ自動車を飛してアマルフィに来ました。二三日、ここで静養します。
*この時代に日本人専門の案内人がいることは興味深い。

1929年1月5日付父理吉宛絵はがき：P-51

一月五日、今日は幸ひ晴れました。朝日が船室のやうなホテルの私達の室にさし込んでゐました。之れが私達の泊つておるルナ、ホテル*です。岬の端にある一寸風変りなホテルで英国人がたくさん避寒に来てゐます。なかなか御馳走がでます。(一中略)先月パリーをたつてモウ二十六日にもなりますが、元気でおりますから御安心下さい。
*現在も四つ星ホテルとして営業を続けるホテル・ルナ・コンヴェント。12世紀に修道院として創られた建物を改築した歴史あるホテル。

1929年1月10日消印父理吉宛絵はがき：P-53

一月四日から七日までアマルフィにて寫生等致し八日、ナポリ経由、ローマに戻りました。今日*は午前、寫眞の右手に見えるヴァチカン宮殿内のシスチン、チャペルにミケランジェロの壁画を見、午後は今まで見た伊太利の画の中で特に頭に残つておる傑作の寫眞を求めため、アリナリ寫眞店に過しました。宿は前と同じアレキサンドラ、ホテルです。
*前後関係からおそらく1月9日。

こうして中西は、アマルフィに1月4日から7日まで滞し、寫生等を行ったが、この時の寫生体験は、中西にとって忘れられないものとなったようだ。

一九二九年の一月六日、伊太利の南の海岸アマルフィで一枚の水彩を描きました。此の時の気持を忘れることが出来ません。此の數年来、アノ時程、その空氣と描く氣持がピッタリ一致したことはありませんでした。それを今一度やつて見たいのです。(1930年7月14日付母和歌宛手紙：L-38)

1年半後にこのように綴るといふことは、中西の心に相当印象深く残る出来事だったのは間違いない。この体験を経た中西は、手紙で述べているようにもう一度イタリアを訪れることを切望するようになる。

この1月6日に描いた作品というのは現在のところ不明だが、アマルフィ滞在中に描いた作品3点が明らかになっている。1点は裏面に「『AMALFIにて』伊太利 一九二九年一月五日、伊太利、アマルヒにて」と書かれている作品(当館蔵)(図C-6)、2点目が、画面に「1929.1.7」の年記がある作品(図C-7)、3点目が《風景》(田辺市立美術館蔵)で「1929.1.8」の年記がある。1月8日は、アマルフィを發つてローマに戻つた日なので、發つ前に描いたか、後から仕上げつて年記を入れたものと思われる。アマルフィで描いた作品は、ヨーロッパに来てちょうど半

年後のものになるが、それ以前に日本で展覧会に出品した作品(図C-1～C-3)とは、作風が大分変化してきた様子が見える。

1929年1月10日付弟幸三郎宛絵はがき：P-54

明日、ローマをたつてフランスへかへります。今日は寫眞のローマの廢墟*を訪れました。パテーベビーは全部で十六巻撮りましたが**、画の方で疲れて、フィルムの方は好結果を期する訳にはゆきません。

*Palazzo dei Cesari **イタリア旅行中、中西がパテーベビーで撮影したヴェネツィア、ローマ、アマルフィ等の映像が、のこされている。

2) 南フランス滞在

1ヶ月にわたるイタリア旅行を終えた後、中西たちはパリへは戻らず、引き続き今度は南仏でもう1ヶ月を過ごす。最初に滞在したカーニュ＝シュル＝メールは、ルノワールが晩年暮らした所でもあり、多くの日本人画家たちにとって、謂わば「訪れるべき場所のひとつ」となっていた。

1929年1月12日付父理吉宛絵はがき：P-55(図C-38①②)

十一日、午後九時四十五分、ローマ発、翌十二日午前七時ゼエノバにて乗換、十一時五十五分、ヴァンチミュ*の伊佛国境通過、二時近く南佛の避寒地ニース着、こゝで一ヶ月伊太利を持ち廻ったトーマスクックのトラベルチケットを渡して下車、中食、ニースからタキシーを飛ばして三時、目的のカーニュシュルメールに着、ホテルコロニーに投宿しました。一日三十五フランと云ふ安價、当分(一ヶ月近く)居る予程、これで一ヶ月余にわたる伊太利の旅も無事、元気で終ることが出来ました。

*ヴァンティミーリア(仏語名ヴァンティミーユ)

さてここで、はがきに書かれている「一日三十五フランと云ふ安價」とは、現在の日本円に換算するといくらぐらいになるのか、少し考えてみたい。

中西は、書簡の中で、しばしばフランを日本円に換算して、家族に分かりやすく説明している。例えば、フォントネー＝オーローズのホテルの安い部屋が「七日間六十^{フラン}法、一日八フラン五十(……)日本貨にして七十銭位」(1930年6月11日付母和歌宛手紙：L-29)、コティ(Coty)の石鹸が「一個七フラン、(五十六銭)」(1930年7月16日付母和歌宛手紙：L-39)、トリエールの宿(レストラン・パスカル)が「一日、三食付 30フラン(2円40銭)」(1930年9月5日付母和歌宛手紙：L-54)、「一円が十二フラン四十八」(1930年11月26日付母和歌宛手紙：L-71)……といった具合である。そして帰国が近くなった1931年7月には、滞仏3年間の円・フランの両替レートについて、次のように書いている。

1931年7月7日付母和歌宛手紙：L-110

幸ひ、日本金と佛貨の換算率は日本の方が断然百パーセントよく、千円が一万二千五百五十フランになりました。一昨年の八月頃(田中内閣没落前後)に比べると実に、千円につき約百五十円よくなっております。来た年は一円が十一フラン八十、一九二九年八月一円が十フラン九十、只今が一円が十二フラン五十五で、その上騰した百五十円でゴッホの画集を求めました——と マア勝手な屈屈*もつきます。

*1,350フランもするゴッホのカタロ・グレゾネを購入したことを、前年からの両替レートの差額で購入できたと言ひ訳をしているのだが、この購入のエピソードについては後述する。

これらのことから、レートの多少の違いはあれ、中西の滞仏時代、1フラン＝約8銭、1円＝約12.5フランで考えるのが分かりやすいだろう。さてそれでは、この当時の1円は、現在の貨幣価値に換算するといくらになるのか、であるが、これについては何の値段を基準に考えるかで、価格に差が出てくるので、換算はそう簡単ではない。ここでは、価格の変化が分かりやすく書かれている、週刊朝日編『値段史年表 明治・大正・昭和』(朝日新聞社、1988年)記載の価格を一つの指標として米価と大卒初任給を例に考えたい。まず米価(白米)10キロあたりの小売価格を比較してみると、1930年では2円30銭、1987年では3,780円(前掲書p.161)とある。1987年の価格は、現在我々が小売店で目にする価格とさほど変わらないような気もするが、総務省統計局による小売物価統計調査によると、2021年12月現在の米5キロ1袋あたりの平均価格が2,007円とのことなので(2021年における毎月の価格自体も最高価格と最低価格で132円ほど差があるのだが)、2倍となる10キロは4,014円ということになる。これに基づき、2021年12月現在で換算すると、1円は約1,745円(ちなみに前掲『値段史年表』の1987年当時の価格だと単純計算で1,643円、消費者物価指数85(現在100)を加味すると1,932円)となる。

一方、大卒初任給で考えてみると、銀行員の場合で1927～1940年が70円、1987年が146,000円(前掲書p.51)、公務員の場合(戦前の高等官、戦後の上級職)で1926～1937年が75円、1986年が121,600円(前掲書p.67)とある。厚生労働省の令和元年賃金構造基本統計調査結果によると、大卒初任給の平均は210,200円なので、銀行員の初任給で見ると1930年当時の1円は現在約3,002円(前掲『値段史年表』の1987年当時の初任給だと単純計算で約2,085円、消費者物価指数84.4(現在100)を加味すると約2,470円)、公務員で見ると1930年当時の1円は現在約2,802円(前掲『値段史年表』の1986年当時の初任給だと単純計算で約1,621円、消費者物価指数84.3(現在100)を加味すると約1,922円)ということになる。

このように、米価を基準にする場合と、大卒初任給を基準にする場合とで、1930年当時の1円がいくらになるか、かなりの差が出てしまうのだが、上記を総合して鑑み、ざっくりと1930年当時の1円＝現在の2,000円前後と考えると、以後、書簡を読み進めていく上で計算しやすく、分かりやすいのではないと思われる。

したがって、1月12日付絵はがき(P-55)の「一日三十五フランと云ふ安價」については、5,600円ぐらい(1フラン=8銭、1円を2,000円と換算)であること、イタリア旅行中、1月1日にローマで食べた日本料理、3人で20円は約4万円であること、また、中西が最初に住むことにしたクラマールの画室の家賃、1年4,000フランは約64万円であることがわかる。

いずれにしても中西たちは、このカーニュの安宿に10日間滞在することとなる。

1929年1月13日付母和歌宛絵はがき：P-56

伊太利の旅を終わって二日目、自動車でニースへ行ってみました。シーズンのこととて、巴里が引越して来たかと思はれるやうな賑やかさ、世界中の金持が集ってゐます。一点の雲もない青空と外套もいらぬ暖かさが冬中続くのですから人の集るのも理りです。カーニュには日本人の画描きもたくさんおります。

1929年1月18日付父理吉宛絵はがき：P-57

今日(十八日)、クラマールから日本よりの便り十七通、回送、到着、拝見しました。久し振りで日本の便りを手にして嬉しく讀みました。(一中略)今、カーニュで毎日画を描いておりますから御安心下さい。

1929年1月21日付父理吉宛絵はがき：P-58

明二十二日、ヴァンス Vence と云ふ所へ移ります。カーニュから約十キロ、山上の町、寫眞の町の近くで素敵な景色、健康地、ここで当地勉強します。(一中略)水繪少々出来ました。至極元気です。

ところで、『水繪 技法と随想』の草稿(既に註2,註4,註9で触れている)には、「Kと地中海岸のカーニュで別れ、Fと二人で山の中のヴァンスへ上った」という記述があるので、小磯良平(K)と別れ、ヴァンスへは中西と古家新(F)の二人で行ったようだ。

今日、ヴァンスというと、いわゆる「ヴァンス」と、ヴァンス旧市街から南へ数キロ離れたところにある「サン=ポール=ド=ヴァンス」の2つが連想されるが、これら2つはどちらも、旧市街が城壁に囲まれ、山(丘)の上に位置し、観光地として人気がある。町としてはヴァンスの方が大きく、現在こちらは、旧市街から少し離れたところにあるマティスのロザリオ礼拝堂が有名だ。一方、サン=ポール=ド=ヴァンスはいわゆる“鷲の巣村”のひとつであり、シャガールが晩年暮らし、その墓があることでも知られている。ところでサン=ポール=ド=ヴァンスが正式な地名になったのは、実は2011年のことで、もとはサン=ポールという名であった。ただフランスにはサン=ポールの名を持つ町や村が数多くあり、それらとの混同を避けるため、非公式に「サン=ポール=ド=ヴァンス」と呼ばれていたものが、正式名称になったという経緯がある。中西たちが滞在し

たヴァンスは、もともとのヴァンスの方であるが、ヴァンスとサン=ポールとは距離も近く、中西たちもサン=ポールを訪れたことであろう。中西が撮影したパテベビーのフィルムには、城壁に囲まれたサン=ポールの眺めや、それをスケッチする場面などが写っているものも、のこされている。

1929年1月25日付父理吉宛絵はがき：P-59(図C-39①②)

二十二日ヴァンスに来て今日は四日目です。カーニュより画になる所も多いです。宿には英佛の女の人がほとんどで、なかなか賑やか、なかなか愛嬌もふりまきます。今日は珍らしく雪が降りました。午後から寫生に出ましたが日本ほど寒くありません。(一中略)一月廿五日、ヴァンス、ホテル、レゾナ

ここで述べられている、ヴァンスの雪景色を描いた作品が何点か知られている。同行していた古家新と一緒に、同じ場所を描いた《雪景色(ヴァンス)》(図C-8)、(古家新の作品は《残雪の丘(南フランス)》、神戸市立小磯記念美術館蔵、図C-9)、他に《ヴァンスの雪》(郡山市立美術館蔵)、さらに《雪の風景》(当館蔵)(図C-10)等がある。《雪の風景》は、ヴァンス旧市街の外から、サン=ポール=ド=ヴァンスを眺め、描いたものである。

1929年2月3日付父理吉宛絵はがき：P-60

今日(二月三日)日曜日なので汽車で一時間程のGrasseへ散歩に行き大変気に入った風景なので終りの十日をこのグラスで過ごすことに定めホテルも室をきめて来ました。(一中略)いよいよカーナバルが始ってグラスでも假装にマスクの人で賑ってゐました。

1929年2月7日付母和歌宛絵はがき：P-61

今日ヴァンスよりグラスに移りました。ホテルBelle Vue、一寸大きな小綺麗な宿です。午後ニースのカーナバル「花合戦」を見に行くつもりでしたが、乗合におくれて駄目、その代り、カンヌCannesへ行きました。ニースと同じ世界の避寒地です。パリーが引越したやうな賑やかさ。明日から十六日までグラスで掉尾の奮闘をします。大作をやる心組でヴァンスから大きな紙を用意して来ました。

1929年2月9日付母和歌宛絵はがき：P-62(図M-9)

グラスの一日、午前七時半目が覚めます。八時、女中が朝飯を室へ持って来ます。九時から仕事を始めます。水彩、本日は半切のデッサン、十一時半まで十二時中食、階下の食堂、イギリスやフランスの毛唐人二十人程と一緒に。午後一時から仕事、今日は自動車でカンヌへ寫生に、四ツ切一枚、午後七時夜食、終って十時まで古家君と二人でトランプ、それから日本への便り、十一時ねむります。画の方すこし目鼻がつきかゝつてゐます、今が大切な時です。

1929年2月15日付父理吉宛絵はがき：P-64

いよいよ巴里へかへる日も近づきました。明十六日はニースへ花合戦を見に行き、十七日、午前十一時の汽車でパリへかへることに決めました。度々恐れ入りますがながい旅で、日本の薬も残り少なくなりましたので送っていただきたく思ひます。宝丹、タカヂアスターゼ、ダイモール、風邪薬等、

この2月15日付の絵はがきは、カンヌの港の絵はがきで、写真面には「グラスから、こゝへ毎日、写生にかよってゐます。乗り合いで三十分」の書き込みがある(図M-10)。

グラスからカンヌまでは約20キロだが、乗り合い自動車で30分というのは、現在とほぼ変わらない。また、宝丹(明治期から現在でも販売されている胃腸薬)、タカヂアスターゼ(消化薬、現在は名称が少し変更されている)、ダイモール(下痢、食あたりの薬)といったいわゆる当時の常備薬を家族に送付依頼している点も興味深い。なお、ニースの花合戦の様子を中西がパテベビーで撮影したフィルムものこされている。

この1ヶ月余にわたる南仏滞在は、教会や美術館等を巡って名作を見て歩いたイタリア旅行と異なり、カーニュ=シュル=メールに10日、ヴァンスに16日、グラスに11日と、じっくり腰を落ち着け、近隣のニースやカンヌも訪れて、制作に励むものとなった。既述のヴァンスの雪景色のほか、《カーニュ(南仏にて)》(図C-11)等が、この南仏滞在の成果である。上述の2月9日付母宛の絵はがきでは「画の方すこし目鼻がつきかゝつてゐます、今が大切な時です」と、模索しながら方向性を見いだそうとしている様子もうかがえる。しかしこのまま順調には進まず、中西は、試行錯誤を繰り返しながら、悶々と悩む日々を過ごすことになるのだが、それはもう少し後のことになる。

1929年2月18日付父理吉宛絵はがき：P-65

グラスよりカンヌに出て、そこを午後四時発の列車で十八日午前十一時パリ=ガールドリオン*着、日本飯で元気をつけ、無事、クラマルの家にかへりました。元気で長い旅を終ったことをお知らせ致します。

*パリのリヨン駅

3) 展覧会への出品、 そしてスペインとイギリスへ

こうして二ヶ月を超えるイタリア～南仏の旅を終えた中西は、4月、渡仏して初めて展覧会に出品する。その展覧会とは、薩摩治郎八の援助を受け、4月8日から20日までパリのルネサンス画廊で開かれた仏蘭西日本美術家協会の第1回パリ展である。同協会の会長を藤田嗣治がつとめ、創立委員の一人である高野三三男(註14)が、中西とは東京美術学校で同窓だったこと等から、中西も誘われて参加したものと思われる。のこされて

いる中西の書簡には、この展覧会について触れているものはないが、同展の出品目録に「NAKANISHI, 4 rue Duffaut, Clamart (Seine). 63 Peinture」(註15)の記載があり、ここで記載されている住所は、既述したクラマルにおける中西の下宿の住所と一致する。なお出品作《Peinture(絵画)》がどのような作品かは不明である。またこの仏蘭西日本美術家協会の展覧会は、同年6月にブリュッセルで、同年10月には第2回パリ展が開催されたが、中西が参加したのは、この第1回パリ展のみである。

この後、中西はふたたび小磯良平とともに、4月にはスペインへ、5月にはイギリスへ旅行する。後に自ら記すように「この年(昭和四年)は先ずよい繪をしつかり見て置こうといふ意圖のもとに席の暖まる暇もなく實によく旅に出た」(前掲「水繪技法と隨想」p.304)のである。

スペイン旅行は、現地での滞在が4月19日から23日(4月17日夜にパリを発ち同24日に帰途についた)と一週間に満たないもので、この旅行には小磯良平のほか、小磯の神戸二中の同級生で詩人の竹中郁も同行した。このスペイン旅行で中西が撮影したパテベビーのフィルムに、二人も写っている。またスペイン旅行での絵はがきは4通がのこっている。

1929年4月19日付弟幸三郎宛絵はがき：P-68

四月十七日午後十時パリをたつてスペインにきました。今日(十九日)午前七時マドリッド着、公使館の世話になってホテルマゼスチックに落ちつきしました。三十時間の汽車の旅には少々弱りましたが元気です。明後日の日曜には闘牛を見ることにきめました。又、なにか珍しい便りしましょう。エスコリアル、トレドにも行く予定です。

中西は、上記と同じ4月19日付けで、ほぼ同じ内容の絵はがきを妹婿の中西甚兵衛宛にも出している(P-67)が、こちらには、「汽車のなかでは英佛語共全然通ぜず」困ったこと、「マドリッドには公使館員共、日本人は七人、一寸立派な町です。」との記述もある。

いずれにしてもこの当時、パリからマドリッドまで車で30時間もかかったこと、また公使館が、一般日本人旅行者の宿泊先の世話等も行ったことの記述は興味深い。

1929年4月21日付父理吉宛絵はがき：P-69

四月二十一日(日曜)スペイン名物の闘牛を見物致しました。七千人程入る円形の闘戯場を午後五時十五分から開始、入場式の華やかさ、殺された六頭の大牛、熱狂する群衆は六巻のパテベビーに撮影しました。(一中略一)ピカドールが馬上から牛を刺した所、全くの血と砂の乱舞…… 明日はエスコリヤ*へ

*エル・エスコリアルのこと

1929年4月23日付父理吉宛絵はがき：P-70

四月二十三日、晴、今日はトレドに行きました。川にとりまかれた一寸景色のよい所で此橋はアルカンタラ橋、之れを渡って町に入るのです。大画家グレコの家を訪ふたり、彼の傑作を見たり、一日を過しました。愉快な一日でした。明日はパリへ戻ります。

これらスペイン旅行の際の絵はがき4通のうち、3通が闘牛の絵はがきで、残る1通がトレドのものである。このスペインへの旅は、主としてベラスケス、エル・グレコ、ゴヤを見るためのもの(前掲『水繪 技法と随想』p.304)であり、当然プラド美術館等も訪れたのであろうが、はがきでの言及はない。「六巻のパターペーパーに撮影」したという闘牛は、中西にとっても衝撃的な体験だったに違いない。そのフィルムは現在ものこっている。

スペインから戻った中西は、ほどなくイギリスへと旅立つことになるのだが、その間、クラマルに住んでいた川口軌外が帰国するのを見送っている。以下は中西と川口との交流を示す資料でもあるので、紹介しておきたい。

1929年5月4日付父理吉宛絵はがき：P-71

五月四日(土曜)、午後十二時 今、川口さん御一家をガールドノール*へ送って歸った所です。日本人十人程に見送られて、一寸そこへ行くやうな気軽さで出発されました。紀州**へ寄られるさうですから、東京着は少しおくれましょう。母上のご事申しておきました故、御訪ね下さい。

*パリの北駅 **川口軌外は和歌山県出身。

続く5月のイギリスへの旅は、ナショナル・ギャラリーの大コレクション、テート・ギャラリーのイギリス絵画、ヴィクトリア&アルバート美術館のイギリス水彩画のコレクション、大英博物館、そしてちょうど5月に開催されるロイヤル・アカデミーの公募展における水彩画の入選作等を見ることが目的であったという。(前掲『水繪 技法と随想』pp.304-305)

1929年5月24日付父理吉宛絵はがき：P-72(図C-40①②)

小磯君と二人でロンドンに来ました。カレー、ドーバー間の海峡も浪もなく湖のやうな静けさ、ドーバーに上陸すればもう英語の国、税関も無事にすんで午後七時半、ロンドン、ヴィクトリア駅着、常盤へ投宿しました。夕飯に卯ノ花が出たり、一寸、よい気分です。今、散歩してかへった所、明日から美術館巡りを始めます。

1929年5月25日付母和歌宛絵はがき：P-73

ロンドンの二日目、寝坊して十時すぎ家を出る。ガイドブックを求めて先ず国民美術館*を見ました。ロンドンの町は道

幅せまく小奇麗で親しみやすく、二階の赤い乗合が通る、青い芝地、古い建物、いかにも英国風、気に入りました。美術館に疲れてホテルにかへると、日本茶にキンツバが出たりして、僕を喜ばせました。

*ナショナル・ギャラリー

中西は同25日付で、弟幸三郎にも絵はがきを出している(P-74)。内容は24日付父宛、25日付母宛のものと重複しているが、ロンドンまでは「パリからExpressで約七時間」であること、カレー～ドーバー間は「快速の舟で一時間」であると、具体的にかかった時間が述べられている。この当時、英語名：ゴールデン・アロー(Golden Arrow)、仏語名：フレッシュ・ドール(Flèche d'Or)(「黄金の矢」という意味)という、カレー～ドーバー間の連絡船とあわせてパリとロンドンを結ぶ列車が走っていた。列車は、フランスではパリ～カレー間、イギリスではドーバー～ロンドン間を走り、乗客は、連絡船とあわせて2度の乗り換えで目的地へ行くことができた。中西のいうExpressとはこのことである。

またここで登場した日本のホテル「常盤」は、当時、ロンドンのデンマーク・ストリート22番地にあり、同8番地には経営を同じくするレストラン「常盤」もあった(註16)。この頃のデンマーク・ストリートには、日本の商店や会社等も建ち並び、ここは1930年代には「リトル・トーキョー」とも言われていたという。ちなみにこの「常盤」の支店はパリにもあり、中西は後に、パリの「常盤」にもしばしば通うこととなる。

1929年5月26日付弟幸三郎宛絵はがき：P-75

今日はブリチシュミュージアム見ました。話以上に立派な大博物館で日本の部には又兵衛のもの、土佐派の作等立派なものがありました。特にエジプトとギリシャローマが素敵です。ハイパークも見ました。地下鉄でロンドンブリッジ、タワーブリッジも巡りました

同5月26日付母和歌宛の絵はがき(P-76)は弟宛と同内容であるが、「宿にかへって一風呂浴び室で夕飯、お吸物、おさしみ、そうめん等、日本とかわりありません。」の記述もある。

1929年5月28日付母和歌宛絵はがき：P-77

五月廿八日、白山会*の多田さんの御案内で今日はキューガーデンと郊外、テムズ川の上流、ハンプトンコートを見物しました。キューガーデンは小石川植物園の二十倍以上もある大植物園、世界中のアラユル植物を集め、西本願寺勅使門の $\frac{4}{5}$ の模型等あり、ハンプトンコートには宮殿と英国式大庭園、パリから来た我々も、美しさに唯驚いてしまひました。

*ロンドンでも白山会の繋がりが分かる。

1929年5月29日付母和歌宛絵はがき：P-78

今度のロンドン行は、日本旅館に泊ったので色々な日本の御馳走を食べて飛んだ所で日本気分を味わいました。秀逸はお寿し、木の芽でんがく、キンツバ等。来月は二人で独逸とスキスを廻って来る予定です*。又面白い通信致しましょう。

*実際は出かけなかった。

1929年5月29日付父理吉宛絵はがき：P-79

今日は午前中、ソツハー、スクエアー*のニューマンに行つて永らくの希望だったニューマン水彩繪具を求めました。午後、ワーレス、コレクション**を見、タキシーでタワーブリッジに馳付け、少々パターにとりました。(一中略)明日は午前九時の汽車でパリーへかへります。

*ソーホー・スクエアー **ウォレス・コレクション

ここで触れられているニューマンに寄つたことについて、中西は後に次のように記している。4年後の文章なので日にちの齟齬はあるものの、ニューマンの繪具を手にした喜びが伝わってくる。

いよいよ今日は海峡を越へてパリーに戻るといふ日の朝*、とうとう私はソホ廣場二十四番地の重い扉を押した。間口二間許りの、それこそ近代文化の世界から實際に置去られた苦むす小さな店だった。(一中略)ともすれば口から飛出しさうになる我が貧弱なるフランス語を押へ押へ、猶一層プーアなる英語の力を借りて、欲しい繪具を注文した。そして私の多年の宿望は遂に達せられたのだ。私の眼の前に一打つ、ギツシリつまつた水繪具の箱が積み上げられた。コバルト・ブリュー！ この箱の中にはあの美しい青色が、しかもニューマンのそれが十二本入つて居るのだと思ふと嬉しさがこみ上げてくる。(中西利雄「ソホ廣場廿四番地」『水繪散策Ⅳ』『みづゑ』346、1933年12月、p.351)

*絵はがきの記述は帰る前日となっているので、はがきの記述が正しいと思われる。

さて美術館巡りが目的のこの旅について、中西は後年、ナショナル・ギャラリーのピエロ・デラ・フランチェスカの2点の作品やフェルメールの「最美の小品」2点に感動したこと、興味深かったものとしてテート・ギャラリーのターナー及び19世紀のラファエル前派等の水彩画、ヴィクトリア&アルバート美術館の18~19世紀イギリス水彩画をあげている。一方、ロイヤル・アカデミーの公募展における水彩画は、当初からあまり期待はしていなかったが失望したと述べている。(前掲「水繪 技法と随想」pp.305-306)

なお、ここで中西が述べているピエロ・デラ・フランチェスカの2点は、『キリストの洗礼』(1437年以降)と『キリストの降誕』(1470-75年)、フェルメールの2点は『ヴァージナルの前に座る若い女性』(1670-72年頃)と『ヴァージナルの前に立つ若い

女性』(1670-72年頃)である。また、ヴィクトリア&アルバート美術館の18~19世紀イギリス水彩画を見たのは、この時ではなく、2度目のロンドン旅行(1931年9月)の時ではないかと思われる。ロンドン再訪の際、この美術館の1800年から近代までの水彩画の年代順陳列は大いに得るところがあったと、母に書き送っていることから(1931年9月12日付母和歌宛絵はがき：P-224)、最初の訪問では、この展示を見ていない可能性が大きい。

4) ノルマンディーとブルターニュへ

5月30日にパリに戻った中西は、7月になると、ノルマンディー地方へ小旅行に出かける。これまでの旅行には、小磯良平ら友人が一緒だったが、このノルマンディーへの旅行は、本当の一人旅となった。

1929年7月6日付父理吉宛絵はがき：P-80

外国での初めてのホントウの一人旅、今日(七月六日)パリーを発つてアール*に来ました。パリーから三時間、有名なフランスの港、出船入り船の賑しさ、只今、ヴンルーヂュ**にとりとして夕飯を終つた所、(一中略)明日はHonfleur***へ汽船で行き四五日おります。七月十四日は例のフランス革命のお祭りですからパリーへかへります。約一週間の小旅行。*ル・アール **vin rouge(ヴァン・ルーージュ=赤ワイン)のことであろう。***オンフルールは、セヌ河の河口をはさみ、ル・アールの対岸にあたる。ここでは、明日汽船で行き四五日いると書いてあるが、翌7日付弟宛の絵はがき(P-81)はル・アールから出しており、7日にオンフルールを訪れていないか、ル・アールから日帰りで訪れたのであろう。いずれにしても7月10日には、オンフルールを訪れている(P-84)。

1929年7月8日付父理吉宛絵はがき：P-82(図M-11①②)

八日、アールを発つて、小さい汽船で約一時間、ツルピユ*へ来ました。こゝは冬のニースに比するやうな名高い避暑地で、お隣のドービルと共に、パリーやロンドンの金持連の集る所、案内書で二流のホテルを選んで行つたのですが、一寸高價なので我々画描きには向きません。そのゼイタクなこと派手なこと、(一中略)明日は気に入った構圖を見つけたので、初めましょう。

*トゥルーヴィル

1929年7月8日付父理吉宛絵はがき：P-83

馬車、ヨット、競馬、テニス、シネマにカゼノと至れりつくせり、まさに貧ボー人入るべからずの楽天地、恐しく華美な所です。一寸描けさうな所があるので三四日おりました。

1929年7月10日付父理吉宛絵はがき：P-84(図M-12①②)

時は千九百二十九年、七月の十日午后の二時、早取寫眞師がそれをパチッやってみました。今日は午後からオンフルー

の町を見に行き一枚描きました。明日はパリーへ引き上げ引き上げ。でも此の小旅行はなかなか面白い御座居ました。

6日間ほどの小旅行で、ノルマンディー地方のル・アーヴル、トゥルーヴィル、オンフルールをまわった中西。避暑地として名高いトゥルーヴィルでは、その華やかさに圧倒されたようだが、ここで「気に入った構圖を見つけた」「一寸描けさうな所がある」とも記している。この年の11月、サロン・ドートンヌに入選することとなる2点のうち1点は、このトゥルーヴィルの船を主題にした作品(図C-14)(これについては、後で詳述する)であり、この旅行で得られた成果が、「でも此の小旅行はなかなか面白い御座居ました。」という言葉になったのであろう。

8月になると、中西は、ブルターニュ地方を回った。今回もノルマンディーの旅に続き、一人でまわったようだ(註17)。

1929年8月2日付父理吉宛絵はがき：P-86(図C-41①②)
ブルターニュの旅に出ました。八月二日、午後一時十分、モンパルナス駅発のラツピードで(特急のこと)、で今夜はSt.Brieuc*泊り、ブルターニュの一寸した町、ホテルドフランス、此の町での第一流なかなか立派です。
*サン=ブリユー

1929年8月3日付父理吉宛絵はがき：P-87
八月三日、晴、朝、十時半、サン、ブリオー*を発って片田舎の又片田舎のトレギエにきました。(一中略)まことに小さな町、ホテルは百年以上の古建築を直したと云ふ凄いの、しかし一日三食付三十二フランは、やすいもの、近藤さん御夫婦がおられます。では又、三日、夜十時、Hotel Central
*サン=ブリユー

中西の書簡で近藤夫妻の名が登場するのは、この時が初めてであるが、夫妻の名は以後の中西の書簡でしばしば目にする。この人物は近藤七郎(1888-1936)といい、福島出身で1906年に北大の前身である札幌農学校に入学、1908年同校(この年東北帝国大学農科大学と名称変更)に設立された美術部「黒百合会」に所属して絵を描いた。卒業後は銀行などに勤めるが、職を辞して画家となり、1927年に渡仏、滞仏中は、サロン・ドートンヌ等に出品している。1931年に帰国後、東京で制作活動を続け、二科展に出品したり個展を開催する等した(註18)。

中西がこれ以前から近藤夫妻と知り合いだったのか、この時初めて出会ったのかは不明であるが、中西は滞欧中、近藤夫妻と親しく交際を重ねていくこととなる。

1929年8月6日付父理吉宛絵はがき：P-88
今日は、同ぢ宿のフランス人のドクターに誘はれて、その人の自動車へ近藤さん一家と僕、その醫師の家族と同勢八人も

乗って、トレギエから三里半程のパンポール*へドライブしました。

*Paimpol パンポール。ちなみに黒田清輝等が訪れたことで知られるブレハ島(ブレア島)は、パンポール沖にある。

1929年8月9日付父理吉宛絵はがき：P-89

八月九日、トレギエを発って、近藤さん御一家はパリーへ、僕は又一人になって、この、ブレストにきました。トレギエの古ホテルから、ブレストのコンチネンタルホテルに移って、美しい室にスツカリ元気恢復 此處はフランスの西の端、パリーから急行で十一時間、可成遠くへ来たものです。ここで二三日、それから小さな汽船でドゥアルヌ*へ行きます。お金のあふだけ、ブルターニュを歩き廻って見ましょう。

*Douarnenez ドゥアルヌネ

1929年8月11日付父理吉・妹婿甚兵衛宛絵はがき：P-90

八月十一日(日曜)、午後から小さな電車で約一時間半、コンケ*の漁村にきました。ブルターニュのホントウの端の小さな村、それでもホテルと一寸、別荘風な建物などあります。日本人がこんな所へ来たのは、まあ、アマリ多くはないでしょう。(一中略)五時八分のでブレストへ歸ります。明日は汽船でフラ**、モルガ***、そしてゾウオルヌ****へ行く予程。
*Le Conquet ル・コンケ **Le Fret ル・フレ ***Morgat
****ドゥアルヌネ

1929年8月12日付父理吉宛絵はがき：P-91

八月十二日(月)、午前九時半、ブレスト発汽船でル、フレへ、フレから乗合自動車でモルガへ、モルガはなかなか美しい砂浜でも大分来てゐます。ホテルドプラーヂュで中食、午後、乗合で知り合った英国の美しい娘さん達と砂浜の上でドゥアルヌ行の舟の出るまで話などして二三時間過しました。僕の拙たな英佛混合語で。午後四時半モルガ発。六時ドゥアルヌ着、満員のホテルにやっと一室さがして入りました。画になりさうなよい所です。

1929年8月12日付弟幸三郎宛絵はがき：P-92

旅から旅を一人で續ける時、シミジミ「自分は日本人だゾ」といふ自覚を感じます。そして愛する故国日本がより民族的に、より世界的に輝かしく、立派になることを心から希望します。まだまだ日本はヨーロッパの国々からは低く見られてゐます。事実、そう見られてもしかたのない点もあります。

1929年8月17日付父理吉宛絵はがき：P-93

Douarnenez 第二信、英、佛、獨、米、ハンガリー、日本(これは僕)と各国の画描きが、浜で画架を並べて描いてゐます。ハンガリーやドイツの画家と友人になりました。ドイツの人から、ベルリン、その他の様子をきゝました。近くド

イツを訪問するつもりなので*。それらの人々は日本の様子を知りたがります。日本の宗教、芝居、富士山、切腹、柔術等の話が出ました。(一中略)明日はこゝをたつて、そろそろパリへかへりましょうか。

*中西は滞欧中、ドイツへは行かなかった。

このはがきのとおりパリへ帰ったとすると、それは18日ということになる。8月2日から18日に至るこのブルターニュへの旅では、中西がブルターニュ地方の本当に小さな町や村を廻っているのが興味深い。同じ一人旅でも、7月のノルマンディー旅行は、港湾都市や避暑地など、いわゆる名の知られた街を訪れたものであったが、このブルターニュへの旅は、中西自身が記しているように、あまり日本人が訪れないような所を中心に回っている。中西がなぜこのような場所を選んだのかは不明だが、例えば友人の小磯良平や古家新、竹中郁は、前年の1928年7月、西村秀雄とともにブルターニュ地方のペリール=アン=メールを旅行しており(註19)、これが、ひとつの契機になっているとも考えられる。この当時、ブルターニュ半島の南に位置する小島、ペリールを旅行する日本人など殆どいなかったと思われ、中西も、小磯たちとはまた別の、日本人があまり訪れない場所=フランス最西端の地の中でも小さな町や村を、回ってみようと思ったのかもしれない。

また、既述のように、7月のノルマンディー旅行でひとつの成果を得た中西には、再度海沿いの町や村を旅することで、再びながしかの成果を作品にしたいという強い思いもあったと思われる。というのは、7月にノルマンディーの旅から戻ってまもなく、中西は、6月28日付の小山良修からの手紙をしたはずで(中西のもとへはおそらく、7月17、18日頃に着いたと思われる)、その手紙には次のような一文があった。「君の時々通信、其たびに會の連中によんでゐるが、みんなたゞ唯うらやましがつてゐる、そして、大いにはげみになるよ まだ期日ははっきりしないが、丸善の蒼原展へ 是非君の滞欧作を入れたいからどうか、四五点送ってくれ給へ」。これを読んだ中西は、日本の仲間への励みとなるような作品を送りたいと、考えたに違いない。そして実際、ブルターニュ旅行から戻って一週間ほどたった8月26日には、作品を日本へ送っているのだ。

1929年8月26日消印父理吉宛絵はがき：P-94(図M-13)
来る九月二十一日、——二十六日、丸善で開かれる蒼原会展の為、水彩三点本日発送、開會前に到着は一寸難しいですが、若し開期中にで(ママ)着きましたら、直ぐ小山君(小石川区関口駒井町三)へ電報で知せて、一日でも二日でも陳列出来るやう取計して下さい。そうしないと、丸善に対して小山君の面目が丸潰れになるさうですから。作品は勿論私として甚だ不満足ですが、行きがかり上止むを得ません。到着の節電報のことお願いします。小山君へ、(額端(ママ)はなるべく黒に願いたい)、

こうして中西が送った3点の作品は、第4回蒼原会水彩画展(日本橋丸善：9月21日～26日)に出品され、評判となった(小山良修『蒼原会略史』『蒼原』1、1935年10月、p.65)。また中西や小山の師として会の活動を支えた小山周次はこの時の中西の作品について次のように記している。「中西利雄君、滞佛の効果は三點の畫面に現はれた、一體にどちらかといへば地味な方故大した藝當はない、地道な勉強をしている點を買つてやらねばなるまい。土臺が出来てるだけに見てゐて危氣がない。」(註20)。なお、残念ながら、この時の蒼原会展の目録等は現在見つからず、中西が送った3点の作品がどのようなものであったかは分からない。いずれにしても、これが中西の滞欧作の、日本における初披露であった。

5) ゴッホを訪ねて オーヴェール=シュール=オワーズ、オランダ、次いでベルギーへ

日本に水彩画を送ったこの日(8月26日)、中西はまた、野口健司に次のような絵はがきを送っている。

1929年8月26日付野口健司宛絵はがき：PN-4(図M-14)
外国生活も一ヶ年たつて大分なれ、落ちつきました。之から仕事始めます。昨日、オーベルシュールオアーズにゴグの墓を訪ね、又、醫師ガッシュ氏に會見してゴグの作品見せてもらいました。蒼原会展、成功を祈ります。

この文面から中西が、8月25日に、ゴッホ終焉の地であるオーヴェール=シュール=オワーズを訪ねたことが分かる。この訪問については、既出『水繪 技法と随想』所収の「ゴッホの水繪に就いて」の中にも言及がある。そこでは、ステファン・ポラチュックの『焰と色』を訳したゴッホ研究家のS氏や画家のK氏と、昭和4年の初秋に同地を訪ね、ゴッホ兄弟の墓やガッシュ家を訪ねたこと、ガッシュ家でゴッホが寺院を描いた30号程の素晴らしい作品を見せてもらったこと(前掲書pp.323-324)が述べられているので、訪問したおよその時期と、S氏とは記されている翻訳書から式場隆三郎であることは以前から分かっていた。近年、尾本圭子氏の研究で明らかにされたガッシュ家に伝わる3冊におよぶ日本人芳名録(註21)の3冊目(表紙に『出頭没頭』と書かれている1929年3月3日から1939年4月24日までの記載)に、1929年8月25日の日付のもと近藤七郎、式場隆三郎、中西利雄の署名があることが分かり(註22)、訪問した明確な日程に加え、「画家のK氏」が、本稿既出の近藤七郎であることも判明した。そして上記の野口健司宛の絵はがきも、訪問日を裏付けるものとなっている。

3冊の芳名録に記された日本人の名(複数回署名した者も含む)は、のべ280名ほどにのぼり(註23)、大正から昭和初期に滞欧していた画家たちにとって、この地を訪れることは、ある意味で必須事項になっていたようだ。なお、野口宛てのはがきに見られ

る「醫師ガッシュ氏に會見して」という記述は、中西の勘違いによるものであろう。ゴッホの作品にも描かれ、その最後を看取った医者 of ポール＝フェルディナン・ガシェ (1828－1909) は、すでにこの世になく、この時中西が面会したのは、息子のポール・ルイ・ガシェ (1873－1962) である。尾本氏によると、息子には特に職業はなかったようで、強いていえば「画家」で、サロン・デザンデパンダンなどに出品していたという(註24)。

このオーヴェール訪問直後、中西はゴッホ展を観るためにオランダのハーグへと旅立つ。下記8月31日付父宛のはがきに「突然でしたが」とあるように、ハーグでのゴッホ展の情報を、このオーヴェール訪問によって得たのかも知れない。この当時、ハーグに拠点を置くクレラー＝ミュラー家が営む会社の建物では、ゴッホを含む同夫妻のコレクションが公開されていたが、1929年の7月～10月には、コレクションによるゴッホ展が開催され、油彩98点、水彩24点、素描135点が展示されたのだった(註25)。また、この展覧会の芳名録には21名の日本人の署名があり、その中に1929年9月1日付の中西の署名も含まれ(芳名録p.100)(註26)、下記9月1日付のはがきの記述と一致する。

1929年8月31日付父理吉宛絵はがき：P-95(図M-15①②)
突然でしたが、ゴッホの二百何十点かの画の展覧会を見るために今日、オランダに参りました。今、こんなモダンな立派なホテル*に泊まっております。オランダと云ふ国のモダンなのに一寸驚きました。町も乗物も人も。(一中略) オランダを見てベルギーに一寸寄り、九月七日にはパリへかへります。オランダの物價は恐ろしく高價です。

*絵はがきは宿泊したHotel Terminus(ホテル・テルミヌス)のもの

1929年9月1日付父理吉宛絵はがき：P-96(図C-42①②)
素晴らしく御馳走の朝食をすませて、電車でマダムコーレル*のコレクションを見に行きました。午後はミュージーロワイヤル**にレンブランの傑作を見、午後五時頃はカメラ持って電車で二十分程の海辺へ遊びに行きました。なんと云ふ平和な美しい国でしょう。貧富の差が少ないのか皆美しい家に住んで生活をたのしんでゐる様。

*ヘレーネ・クレラー＝ミュラー(Helene Kröller-Müller)。中西はKröllerをコーレルと記している。 **マウリッツハイス王立美術館

1929年9月2日付父理吉宛絵はがき：P-97
九月二日晴、午前中、再度コーレル、コレクションを訪れてゴッホの画に別れを惜みました。(一中略) 十二時二十七分の電車でヘーグ*発(一中略) 一時半、アムステルダム着、ダムホテルは満員、ホテルフリーストは僕の気にいらず、親切なホテルフリーストの主人の紹介でこんな立派なモダンなホテル**に泊まりました。

*ハーグ **絵はがきはHotel Het Gouden Hoofd(ホテル・ハウデン・ホーフト)のもの

1929年9月2日付母和歌宛絵はがき：P-98

アムステルダムの第一印象はまことによいものでした。人も優しく、ホテル美しく、全く外国における気がしません。日本へかへることを忘れてしまいさうです。獨逸語*を知らなくとも僅かな英佛語でこんなに楽しく旅が出来るのは全く現代に生れた者の幸せです。かるく中食をすませ、直ぐ歩いて国民美術館**を訪れレンブランの數々の傑作に接しました。立派な美術館に之の見事な画

*実際はオランダ語である **アムステルダム国立美術館

1929年9月3日付父理吉宛絵はがき：P-100

九月三日、よい天気、午前九時半、中央ステーションの裏から出る汽船にのって、マルケン島とヴォーレンダム*の廻遊に出かけました。(一中略) マルケン島は戸數百戸許りの小島ですがその服装の美しいので有名です。家は木造でオモチヤのやうな色。ヴォーレンダムも面白いコスチュームでオランダ見物の人の皆訪ふ所です。

*Volendam フォーレンダム

1929年9月4日付母和歌宛絵はがき：P-101

今(四日午後三時三十分)、オランダ、アムステルダム駅をベルギーに向けて発とうとしてゐる列車の中におります。今日、午前八時起床、九時ホテルを出て荷物を駅に一時預けにし、再び引返して、ナショナルミュージアムを見、中食后今一つ現代画の美術館*を見て、今駅へ来たところです。

*アムステルダム市立美術館

このように中西にとってオランダの旅は楽しく、その印象は頗るよいものであったが、ベルギーでは、次のようなひどい目に遭ってしまう。

1929年9月4日付父理吉宛絵はがき：P-102

ベルギーはアントワープにこそ着きにけり。(四日午後八時) まではよかったですのですが町はずれの小駅で降され、電車に乗換までして案内書でさがしておいたホテルへ行けば閉店してあらず、荷物提さげてホテルさがしやうやく飛込めば之れは又ドエライ家(一中略) ドアを開けるとかびくさゝがプーンと来る始末。オランダがあまり美しくかったので、いよいよきたなさが目につきます。

1929年9月5日付母和歌宛絵はがき：P-103

昨夜はひどい目にあいました。アントワープのHotel、室へ入った時、此ベットは居さうだといやな予感がしたのですが果せるかな、電気を消して横になるやいなや凶猛極りなき南京虫一大隊の襲撃にあい、終夜悪戦苦闘、ついに一睡もせず今日はフラフラする頭をおさへて此のガン*へ逃げて来ました。

*ヘントのフランス語名 英語・ドイツ語名はгент

1929年9月6日付父理吉宛絵はがき：P-104

ガンのホテル、デリッセは相当立派な宿で立派な洋服ダンス等あり、南京虫も出現せず今日(九月六日)は午前十時まで安眠しました。(一中略)正午四分の急行でガン市発、一時、ブリューヂュ着、荷物を一時預けし駅前のホテルをひやかした所 室も気に入り、價も相当なので泊ることにしました。名はHotel du Singe D'or、明日は巴里へかへらねばなりません。

オランダ、ベルギーへの旅の目的には、レンブラントやファン・エイクを見るということもあった(前掲「水繪 技法と随想」p.306)。ベルギーからの絵はがきは嫌な経験を中心に綴られており、作品を見たこと等は触れられていないものの、一泊したヘントで、ファン・エイク兄弟によるシント・バーフ大聖堂の《ヘントの祭壇画》(1432年)を見たことは間違いないだろう。

6) マルセイユへの旅

10月23日、中西は日本郵船榛名丸で11月3日にマルセイユへ到着する東京美術学校西洋画科の同窓生、荻野暎彦を出迎えるため、同科一年後輩の鈴木重成とともに、マルセイユへの旅に出る。中西にとって気の置けない友との二人旅は楽しかったようで、この旅の途中、中西が母和歌宛に出した1929年10月25日付の絵はがき(P-110)には、「お初におめにかゝります。私は利雄君の悪友鈴木と申します(一中略) 愉快的旅をつゞけつゝ 重成」との添え書きも見られる(図M-17②)。鈴木は帰国後、美校西洋画科1928(昭和3)年の卒業生により作られた「三春会」(1934年創設)に出品したりしたが、その後カンボジアへわたり、現地の美術学校(後の王立美術大学)で教鞭をとったという(註27)。

鈴木重成は、中西の書簡にはもう2度ほど登場するが、1930年2月24日付父理吉宛手紙には、何らかの事情で日本からの送金が途絶えた鈴木に、中西が1500フラン用立てしたことが書かれている。中西の書簡には、二人の鈴木(鈴木良三、鈴木重成)の記述が見られるものの、年上の鈴木良三を「鈴木さん」、後輩の鈴木重成を「鈴木君」と書き分けているので、どちらのことかは明確に判る。

1929年10月23日付母和歌宛絵はがき：P-106(図M-16①②)
拾月二十三日、美校の鈴木君と二人、ガールドリヨン*を十二時十五分発、マルセイユへの旅に出ました。午後七時、クレルモン**着、グランドホテルドラポストに投宿、お風呂付きの室に納って大いに満足しております。

*パリのリヨン駅 **クレルモン=フェラン

1929年10月24日付母和歌宛絵はがき：P-107

午前中、名高いクレルモンのノートルダムに参詣、塔に登つ

て寫眞等、撮りました。午後、少々豪勢をきめて、自動車でピュイズドーム*へ登りました。五千尺近い山の上まで立派な自動車道がついてゐるのです。此自動車道の通行税一人五フラン五十、ホテルから頂上まで一時間弱、便利な世の中になりました。

*ピュイ・ド・ドーム、クレルモン=フェランの市街地から西へ9キロほどにある、標高1464mの火山

1929年10月25日付父理吉宛絵はがき：P-108

二十五日、クレルモンを發つて、サンジェルマン*乗換、午後一時、ヴッシー**着、Vichyの名は鑛泉水として知られてゐます。夏のシーズンは各人で賑はふさうです。中食后、二人で散歩しました。町の中方々に鑛泉がわいてゐます。(一中略)我々も鑛泉を一杯のみました。有馬温泉の元湯を呑んだやうに。

*サン=ジェルマン=デ=フォセ駅 **ヴィシー

1929年10月25日付母和歌宛絵はがき：P-110(図M-17①②)

Vichy 午後六時四十二分發サンゼールマンホッセ*乗換、ミラノ行急行に乗る。食堂のディナーも相当美味。僕はビールにトロリとなって、送っていただいた中央公論の藤村の「夜明け前」を読みふける。午後十時半、リヨン着、タクシーでホテルロワイヤル**へ、二階四十五番の王様の室のやうなお風呂付きのシャムブル***に、二人共満足此の上なし。

*サン=ジェルマン=デ=フォセ駅 **リヨンのベルクール広場に面するオテル・ル・ロワイヤル・リヨンは5つ星高級ホテルとして現在も営業中。
***仏語で部屋

1929年10月26日付母和歌宛絵はがき：P-111

九時起床、ミュージー*を見ました。シャバンヌの壁画、マネー、クルベー、の名作、正午ミュージーを出たら雨になりました。一寸したレストランで中食、静物用の切**等求めて、午後は又、二時間をミュージーに過ごす。よい一日でした。(一中略)明二十七日、十時二十五分リヨン発、アビニオン見学、マルセイユへ向います。

*リヨン美術館。フランスでも有数の規模の大きな美術館のひとつ。大階段を囲む壁にピエール・ピュヴィス・ド・シャヴァンヌが描いた壁画がある。 **リヨンは絹織物の産地として知られており、静物画用の布を購入したと思われる。

1929年10月27日付父理吉宛絵はがき：P-112

五日の旅終へて、一ヶ年半振り、僕が初めてフランスの土を踏んだなつかしいマルセイユへ来ました。一寸変りました所も目につきます。寫生しつつハルナの到着を待ちます。ホテルメヂテランネー*、高くて室が悪いので一寸閉口してゐます。明日、グランドホテルに移りましょう。

*オテル・メヂテラネ(Méditerranée)か？

1929年10月30日付父理吉宛絵はがき：P-113

マルセイユはさすが世界の港、各国人を集めてゐます。画材も豊富、毎日ホテルの室から写生してゐます。日本飯「フヂ」で生きのよい鰹のお刺身に大いに元気をつけました。今日は午後から Aix* 見物、一寸いゝ所でした。魚がウマイので二人共大喜び、ハルナ入港の日も近づきました。

* Aix-en-Provence エクサン＝プロヴァンス

1929年11月2日付母和歌宛絵はがき：P-115

二十七日、八日と旧港前のオテルメゼランネ。こゝが高價で不愉快なので、二十九日、同ぢく旧港前のオテルノーチックに移りました。昨一日は電車でエスタック、(セザンヌの描いた所)に行きました。そして今日は十一月二日。ハルナ入港も明日になったので、再度、ホテルを変へて、グランドオテル*へ。リヨンのロワイヤルにも劣らぬ素敵な室、お風呂付、こゝでいよいよ明日、荻野君をむかへます。今日は午後からゴージュのよく描いたアルゝへ。

* Le Grand Hôtel du Louvre et de la Paix 中西が1928年7月2日のマルセイユ到着時に泊まったホテル

なお、このアルル訪問時に、ゴッホが描いたことで知られる跳ね橋の前で撮影した写真(図M-36)がのこされている。

1929年11月3日付母和歌宛絵はがき：P-116(図M-18①②)

十一月三日午前七時、ハルナ丸、無事入港、元気な荻野君の顔を見た時は嬉しく安心しました。美校先輩の田口様*もご一緒(一中略)明日パリへ。

*田口省吾(1897-1943)、評論家 田口掏汀の息子。省吾の息子は作家の高井有一。なおこの絵はがきには、荻野暎彦の添え書きがある。

荻野を無事迎えた中西。これ以来、中西は荻野と行動をとものにすることが多くなり、荻野は以後の中西の書簡に最も多く登場する人物となる。また、上記10月30日付父宛絵はがき(P-113)に、毎日ホテルの窓から写生している旨が書かれているが、その時描いた作品のひとつが当館所蔵の《マルセイユ風景》(現場制作)(図C-12)である。この作品の裏面には「一九二九、十、マルセイユ」と書かれており、それを裏付けている。マルセイユ滞在中、中西はホテルを変えているが、「オテルメゼランネ」も「オテルノーチック」も旧港前のホテルであると記しており、窓からはここで描かれているような景色が見えたはずである。なお当館は、この現場制作をもとに、ひとまわり大きなサイズで制作した《波止場(マルセイユ)》(図C-13)も所蔵している。

7) サロン・ドートンヌへの入選

これまで見て来たように、クラマールへ移ってからの1年、中西はもっぱら旅をして過ごしたが、旅に出ない時は、クラマールからムードンにかけての美しい森やムードンにあるログンのアトリエ付近を写生したり、養老院の老人や村娘をモデルにしたので人物を描いたりした。また、油彩で制作をする方が多く、水彩は遠出する時に持ち出す程度であったという(前掲「水繪技法と随想」p.304)。

この中西の制作態度は、「水繪具といふものに固執することから自己を解放し」、「一畫學生として勉強をやりなほそう」(前掲書p.303)と考えたことによるものである。学生時代から水彩画を描くことにし周囲から様々言われ続けてきた中西は、滞欧生活を通じ優れた巨匠たちの水彩画に触れることで、「最も優れた畫家に依つてのみ、最もよき水繪が描かれて」おり、優れた作品であれば「それが油繪であらうが水繪であらうが、そんな事は決して問題にされない」という認識をあらたにする。そして水彩画を追究するにしても「水繪具といふ材料に一から十まで執着する必要は全くない」と覺るとともに、「總ゆる適當な材料で自由に、おほらかに繪畫の勉強を始めようと決意」(以上前掲書pp.301-302)したのである。

また中西は、制作に行き詰まるとパリへ出て、ルーヴル美術館や画廊を回ったり、モンパルナスの研究所へ通ってクロッキーを行ったりしたという(前掲書pp.306-307)。

中西の著書や書簡の中に、彼が通ったというモンパルナスの研究所の名前は出てこない。しかし、研究所での様子について「午後二時開始、二時——三時着衣ポーズ、三時——四時裸體一ポーズ、四時——五時裸體二ポーズ、五時——七時の二時間は五分づゝ裸體クロッキー二十ポーズである。」(前掲書p.307)と記しており、モデルが5分毎にポーズや場所をかえる“Croquis à cinq minutes”という授業があることから、アカデミー・ド・ラ・グランド・ショミエールであろうと思われる。このアカデミーは、オープンなシステムで、好きな期間だけ、たとえ数時間だけでも入学でき、モデルのスケッチを行い、教師のアドバイスを受けることも受けなくても自由であったという。友人の小磯良平をはじめ、多くの日本人留学生たちも通っていた。

旅にあけくれ、またクラマールではこのように過ごす中、1929年11月、第22回サロン・ドートンヌ(グラン・パレ、パリ：11月3日-12月22日)に、《Trouville, bateaux(トゥルーヴィール、船)》(図C-14)と《Meudon, la Maison blanche et le Chemin(ムードン、白い家と道)》(現在は《ムードンの丘》というタイトルで知られている)(図C-15)の2点が入選した(註28)。中西はサロン・ドートンヌについて「繪は頗る玉石混淆で日本の展覽會よりレベルが高いとは云へないやうに思つた。水繪の出品は矢張り少なく二千點近い出品画に對して三四十點よりなかつたと思ふ。(一中略)水繪は無名作家が多く、感心させられ

るやうな水繪の出品はあまり無かつた」(前掲書pp.307-308)と、後年冷静な分析をしているが、この当時の中西にとって、サロンへの入選は嬉しいものだったに違いない。ただ残念なことに、この入選について中西が記した書簡はのこっていない。翌年の2度目の入選の際には、家族に手紙等を送っているのに、中西の筆まめぶりを考えても、初めてのサロン・ドートンヌ入選で、家族へ何も通知しないことは考えられず、何らかの事情でこの前後の書簡がなくなってしまうと考えるのが自然であろう。また、中西入選の報に接した竹中郁が、「祝、サロン・ドートンヌ入選(一中略)サロン入選祝賀会の要あり、おごるべし」と書き送ったはがき(図C-43)がのこっており、ここには、「ホテルピュファローの竹中君からこんなはがき来ました。オゴルかな 利」と中西の添え書きもある。つまりこのはがきは、家族のもとへ封筒に入れられて送られたはずで、このはがきの存在も、中西が家族に宛てなんらかの手紙を送ったことを裏付けている。なお、竹中のはがきには、10月17日の消印(17・X)があるが、展覧会の会期は11月3日からなので、開幕2週間前にはすでに入選の知らせが届いていたことになる。したがって、10月23日にマルセイユへの旅に出発した時には、中西はサロン・ドートンヌに入選したことを知っていたわけだ。

サロン・ドートンヌに入選した2点の作品中、《Trouville, bateaux(トゥルーヴィル、船)》は、既述のようにこの年7月のノルマンディー旅行の成果である。この作品は、最初に中西作品を体系的に研究した匠秀夫当館初代館長の研究で「現存しない」(註29)とされていたが、その後、中西利雄長男、中西利一郎氏の調査で、前出図版(図C-14)の作品であることが判明した。その図柄は、中西が1930年1月8日、引っ越したばかりのパリのアトリエ(これについては後述する)の様子を描いたイラスト(図C-47①)の中に、「サロンに出シタ水繪」の表記とともに作品の一部がラフに描かれているもの(図C-47②)と一致する。そしてこの作品は、《港と教会》というタイトルで、1979年や1984年の回顧展(註30)に出品されていたものであった。この作品右下には「1929.7」の年記もあり、それは中西がトゥルーヴィルに滞在していた期間とも一致する。

8) エルネスト・クレッソン通りのアトリエへ

1929年12月、中西はクラマールの下宿から、パリ14区、エルネスト・クレッソン通り18番地(18 rue Ernest Cresson)のアトリエに移ることが決まる。ここに住んでいた小磯良平が帰国することになり、中西がその後を引き継いだのである。このエルネスト・クレッソン通り18番地は、外国人画家向けアパート形式の貸アトリエで、中西が小磯から引き継いだ部屋は、正宗得三郎、大久保作次郎、伊原宇三郎、小磯良平と、代々日本人画家によって受け継がれ、中西の後は森芳雄に引き継がれる

ことになる。中西が借りた頃の家賃は、3ヶ月で1,030フランであったようだ(註31)。また後日中西は、自分が画室を出たあとの家賃について、現在四千フラン(一年)を、五千四百フランに値上げすると知らされたことを書いているので(1931年8月9日付母和歌宛手紙:L-115)、中西がこのアトリエを借りている期間、家賃の値上げはなかったようだ。

ちなみにこの建物にはほかに、梅原龍三郎、児島虎次郎、坂本繁二郎、林俊衛、小山敬三、岡本太郎等、多くの日本人画家が住んだ。

このアトリエについて、中西は後に次のような文章を記している。

アトリエは、代々日本人畫家によって、即ち正宗、大久保、伊原、小磯の諸氏により受つがれた由緒ある畫室、階段こそ九十何段もあつて毎日相當私をなやましたが、その他の點では申分なかつた。そして壁は伊原氏自ら塗る所のグリの水性ペンキによつて、アトリエの空氣とピツタリ合つて、始めて其のアトリエを見に行つた時、私を無性に喜ばせた。そして私も其の灰色に合せて水性ペンキを壁の傷んだ部分に塗る勞働を三日間やつたが、御蔭で私はそれから壁紙に悩まされる心配もなく日本に歸る日まで、そのアトリエで勉強することが出来た。(中西利雄「壁紙を怖れる」『水繪散策Ⅲ』「みづゑ」345、1933年11月、pp.315-316)

しかし実は、小磯からのアトリエ引き継ぎは、必ずしもスムーズではなく、中西はちょっとしたトラブルに遭ってしまう。

1929年12月11日付父理吉宛絵はがき:P-117

拾二月拾一日、宮田君* 小堀君** 小磯君と僕 四人揃つて差配の所へ行きました。そしてその悪差配にかゝつて、僕のアトリエへ入る望みも消えかゝりました。その悪差配日く、貴方達の後はモウ当方で定めてしまったから駄目だと、勿論、フランス語のうまい宮田君 小堀君が百万抗辯つとめたのですが。(一中略)僕が一ヶ年半も待ったアトリエも駄目となつたら、又新たにさがす元氣もありません。いづれ、門番と差配が金にしようとの悪計です。

*医学博士で画家の宮田重雄(1900-1971)であろう。当時宮田は、パリのパスツール研究所で血清研究のかたわら絵を描いていた。 **東京美術学校西洋画科同窓の小堀二郎(1902-1998)であろう。

1929年12月17日付父理吉宛絵はがき:P-118

幸ひウマク解決がつかしました故御安心願います。昨日、小磯君と、秋間と云ふフランス語の名人を連れて交渉に出かけましたら、案の條、お金が欲しいので、二人*に二百フランづゝやつて、手続きをすませました。その節、小磯君が半分、負擔して、大變同君にはお気の毒してしまひました。(一中略)此の月二十日からアトリエは僕のものになります。

*12月11日付父宛絵はがき(P-117)で触れられていた差配と門番(コンシェルジュ)

こうしてなんとか、12月20日、小磯からアトリエを引き継ぐことが出来た中西は、野口健司に移転先の住所を記した年賀状を送っている。

1929年12月31日消印野口健司宛絵はがき：PN-6

賀正、パリも今年は大変凌ぎよいです。来る一月四日より、テアトルピガールでセザンヌの作品八十点の会があります。有難い都です。冬のセーヌは実に美しい。左記アトリエへ移りました。18 rue Ernest Cresson Paris (14^e)

中西がこのアトリエに実際に引っ越した日は(借用する権利を有したのは1929年12月20日であるものの)、実は正確には分からない。前掲『水繪 技法と随想』には、「三年目の一月に私は住み馴れたクラマルの素人下宿を引き拂ってパリの畫室へ移った」(p.308)とあるのだが、上述の12月31日消印の野口宛はがきには「移りました」と書かれているので、12月中には引越したようにも思える。しかし、このはがきは年賀状(=すなわち1月の状態を想定して書いたもの)であり、消印は、クラマルの消印なのだ。また既出「水繪散策Ⅲ」の「其の灰色に合せて水性ペンキを壁の傷んだ部分に塗る労働を三日間やつた」という3日間も考慮に入れなければならないだろう。アトリエのイラスト(L-2, 図C-47①)には、1930年1月8日の日付があるので、この日までに中西が引っ越しを完了したことは間違いない。また、窓から見えるエッフェル塔をはじめ、既述の蓄音器やサロン・ドートヌ出品作、オランダで買った人形、今描いている絵や画材なども描かれていて、なかなか楽しい。と同時に、ここで始まる新たな生活に対する中西の期待も感じられる。

さて、パリのアトリエに移って以降、中西の家族への書簡は大きく変化する。絵はがきは減り、圧倒的に手紙が多くなる(『中西利雄滞欧書簡リスト』本書pp.65-71)。手紙はほとんどが母宛で、近況報告のみならず、日本から送ってほしいもののリクエストや送金依頼、そして中西の悩み等、日々の思いが赤裸々に綴られているのだ。繰り返しになるが、日を置かず書き続けた手紙は、ある意味で中西の日記とも考えることが出来る。このように1930年からの書簡には、1通の手紙に様々な内容が述べられているので、以後は、「絵画制作に関すること」「交友関係」「食生活」といったテーマごとに、各書簡から該当箇所を抜粋する形で紹介していくが、まずは絵画制作に関するものから見ていきたい。

IV 1930年の絵画制作 I (1月から8月)

1) アトリエからディエップへ

1930年の書簡は、年賀状として送られた絵はがき(P-120, 図C-44)、そして1930年1月8日の日付がかかれたアトリエのイラスト(L-2, 図C-47①)(このイラストは手紙に添えて同封されたと思われるが、その手紙は現在のこっていない)に始まる。そしてしばらく日があいて、2月18日付父理吉宛手紙(L-3)の、「今年の冬はトウトウパリーで冬を(ママ)過ごしてしまひました。しかし矢張りパリーの冬は悪い季候です」へと続く(この間1ヶ月以上あるが、書簡が失われてしまったのかも知れない)。絵画制作に関する記述は、3月7日付母和歌宛の手紙が最初になる。

1930年3月7日付母和歌宛手紙：L-5

やっと、少しずつながら、画の方も芽を吹き出したこととて今一、二年は是に止って勉強したいと考へます。で大体の所、来年(一九三一年)の冬(十一月頃か)パリーを發って、歸国の途につきたい考へです。

この冬をパリのアトリエに籠もって制作を続けた中西は、自分なりに多少の進展を見たようで、3月7日にはこのように記した。しかし十日後の3月17日付の手紙(L-7)では、早くも次のように悩んでいる。

1930年3月17日付母和歌宛手紙：L-7

今、六十号描いて居ます。なやんでおります。今頃は水繪描きません。小山君*のエハガキ、彼のウマくなったのに驚いてゐます。自分の信ずる所をやって見る許りです。まだまだ、ホントウの芽は吹きません。

情としては早く歸国して、御安心の参るやうにしたいと思ひますのですが、なかなか仕事の方は思ふやうになつて呉れません。淋しさや誘惑や怠惰やそんな敵がたくさんゐます。多くは望みませんが、いゝ画が描きたいです。

*小山良修

こうした思いは、おそらく、日本から送られてきた小山良修の作品の絵はがきを見て、考えさせられることがあったからであろう。思いを整理するためか、あるいはずっとパリのアトリエに籠もっていたため気分を変えたくなったのか、3月末、中西はノルマンディー地方のディエップへ出かけることにする。昨年11月にマルセイユの旅から戻って以来、約5ヶ月ぶりの旅行である。

1930年3月31日付父理吉宛絵はがき：P-121

英佛海峡に臨んだディエップに來ました。パリーに居ること五ヶ月、久し振りでホテルの窓からきく波の音は又、格別です。

三日程、なんにもしないでボンヤリ空と海を見て暮したいと思っております。

また4月1日には、家族宛の文面をしたための複数枚の絵はがきを封筒に入れて送っている。そのうち母宛(P-123)のものには、宿泊先「Hotel AGUADO」の場所が示されており(図M-19①②)、ここで二三日ゆっくりすること、宿泊客がイギリス人ばかりであること等が書かれている。

そして4月3日には、ディエップを午前7時55分の急行で発ち、パリのサン=ラザール駅から車をひろって10時40分、パリのアトリエに戻っている(1930年4月3日付母和歌宛手紙:L-11)。戻ると日本からの便りが何通か届いており、その中には中西が送付を頼んだ日本で制作した水彩画の包みも含まれていた(なお、中西が送付を依頼した際の書簡はのこっていない)。

2) アトリエでの人物画制作

1930年4月3日付母和歌宛手紙:L-11

私の古い水彩画御送り下され有難う御座居ました。お手数かけまして申し訳ありません。早速、開いて沁々、昔の—と云っても二三年前の自分の画を見ました。そして幼稚さ浅薄さに驚くと共によくマアこんなものを麗々しく人前に出せたものだと実に恥いました。パリーに来て自分の姿、小さい幼稚な自分をはじめて知ったことはせめてもの幸ひでした。今度、日本へかへたら、之んな恥しい思ひはしたくありません。(—中略—)昔の画を見るにつけても、矢張り画描きは少しでも長くパリーに居る方がよいことを覚りました。之からは一つ仕事に馬力をかけて、一寸いやなことですが御土産作品も少しは描きましょう。(—中略—)又来週からモデルはぢめましょう。少しづつは、目鼻がついて来ます(油の方に)、水彩は不満足です。今筆を持ちません。ウマイ、マズイは別として、人に恥しくない自分の画を描いてからかへりたいものです。モウ僅か一ヶ年半よりないのですから、マゴマゴしてはおられません。

1930年4月7日付母和歌宛手紙:L-12

今日は月曜、午後モデル始めました。アルサス生れのマダム、ベネジクチュフ。靴が高い故か、恐しいノッポで、扉を開けた時、首が上の方にあつて驚きました。いゝモデルです。モウシバラク水彩を描きません。油でシツカリやつておけば水彩だつて進歩します。近頃少し水彩に興味を失ひました。むずかしい許りであり本格的勉強になりませんので。しかし止めやうとは思ひません。

この様に、モデルを雇ってアトリエで制作を続ける中西だが、昨年から引き続いてもっぱら油彩画を描いていることが分かる。水彩画に満足できず、水彩への興味すら失いかけるものの、「し

かし止めやうとは思ひません」の記述からは、水彩画への強い思いも感じられる。水彩画への悩みを抱えつつの油彩での制作。こうした状況におけるアトリエでの人物画制作は、以後しばらく続くこととなる。

1930年4月21日付母和歌宛手紙:L-14

先週は人物三十号着衣やりましたが、割合、思った通りに行き、少しは慰められてゐます。手の難しいのはホトホト閉口してゐます。手だけでももう少し研究しなければなりません。時々は今までして来た勉強の跡を出して来て見ますが、まるで駄目です。水彩等、数だけは相当ありますが、日本に持って歸って発表しやうなぞ思ふ画は一枚もありません。淋しくもありますがどうも、自分が悪いですから止むをえません。歸国する日までに、一、二枚は気に入った作品が出来ることを願つてゐます。

1930年5月11日付母和歌宛手紙:L-22

仕事の方、続けて油の方許りやつてゐますが 水彩の如くに、材料そのものに制限されないのは、愉快です。しかしまだとりとめたものもありませんが。

1930年5月17日付母和歌宛手紙:L-23

相変わらずアトリエでモデルを描いております。一寸好いモデルが手に入ったので約一ヶ月程、續けました。アルサス生れの女でロシア人と結婚して、パリーに住って居るのださうです。未だ若い癖に二つになる子供があるさうで、そんな点から、割合、他のモデルより温和なのでしょう。

中西はアトリエでの人物画研究を、この年の8月末頃まで集中して続けており(この間、パリ近郊のフォントネー=オー=ローズに3週間ほど滞在しているのだが、これについては後述する)、その間、モデルも何名か代わっている。1930年の8月末までの中西の手紙で触れられているのは、4名である。

まず、上述の4月7日付手紙(L-12)で記されている「アルサス生まれ」の「いゝモデル」マダム・ベネジクチュフ。5月6日付母和歌宛の手紙(L-20)で「ヨイモデルだが、此奴、時々我儘を云つて弱ります」と記してはいるものの、1ヶ月以上、雇っている。5月18日付母和歌宛の手紙(L-24)(この日は日曜なのでモデルは来ない)に「明日から又、新しいモデルがアトリエへ来ます」の記述があるので、上述の5月17日付手紙(L-23)が書かれた日まで、このモデルを描いていたことが判る。次に言及があるのは、イタリア人のモデルである。

1930年5月31日付手紙:L-28

今週は友人小堀君*の紹介で伊太利生れの女をモデルに使つて居ります。三十号人物、着物はうまく行ったのですが、顔で手こずつて、今日はとうとう消してしまひました。油にし

ろ水彩にしろ、相変わらず悪戦苦闘を續けております。時々
は書きためた水彩を出して来て見ると、少しは見られるのを
発見しますが、その数は実に又少数です。

*小堀四郎

1930年7月8日付母和歌宛手紙：L-35

只一人きりの生活にも練れました。シャツのつくろい等は其
の時其の時のモデルがやっけて呉れます。今のモデル伊太利ト
リエスト*生れの十八才、母上が出発の節入れて下さったこ
んな鈴のついてゐる日本の鉄**を器用に使って新しいシャ
ツの長い袖をつめてくれます。

*トリエステの伝語読み **手紙には握り鉄のイラストが描いてある。

7月8日付の手紙(L-35)に書かれたトリエステ生まれのモ
デルと、5月31日付の手紙(L-28)にあった小堀四郎の紹介と
いうイタリア生まれの女性は同一人物である可能性もある。「日
本の鉄を器用に使って新しいシャツの長い袖」詰めをしてくれ
るという記載からは、モデルとの親しさも感じられるが、「シャ
ツのつくろい等は其の時其の時のモデルがやっけて呉れます」と
も書かれており、手紙で触れられている以外にも、モデルがい
たことは推測できる。中西は、モデルに、気軽にしばしば、縫
い物等を頼んでいたであろう。

翌8月に登場するモデルが、鈴木良三の女友達、レオンで、
彼女に関する最初の言及は、8月2日付の手紙(L-43)になる。
この7月、パリは涼しく過ごしやすいことも手伝って、中
西は「海へ行くこともなく、引続きアトリエに籠城して」(1930
年7月24日母和歌宛手紙：L-40)制作を續けているのだが、満足
のいく作品がなかなか出来ず、制作上の悩みは、一つのピークに
達していく。と同時に、水彩にグワッシュを併用した色彩研究
について初めて手紙で述べているのもこの頃である。悩みなが
ら試行錯誤を續け、ひとつの方向性を見いだそうとしている
……。レオンがモデルをつとめたのは、このような時期にあ
たる。

1930年7月24日付母和歌宛手紙：L-40

今夜(七月二十四日)、今まで出来た画(水彩画だけ)を整理
して見ました。全部(大小合せて)約百五十点あります。之
のなかで私が日本で発表してもよいと思ふのは約一割でし
ょう可。もう後、一ヶ年半で約同数出来るとして、全体で四十
点位、発表出来る画を持ってかへりたく希望しております。
今秋のサロンドートンヌに出品して見たいと思つておる作品
が現在二点あります。やゝ、気に入った作で、水彩にグワッ
シュを併用したもの、之れも今少し深く研究して見たら面白
いと考へてゐます。

1930年7月31日付母和歌宛手紙：L-42

苦しみながらも、少しずつは、画の方もすゝんでおるやうで

す。最近、少々無理勉強をして、大きな水繪を(二尺——一
尺六寸)を十五六枚描いて見ましたが結句、無理して多く描
いても、よい画は出来ません。二三日たつと、皆んな嫌にな
つてしまひました。画位、正直なものではなく、慾ばつてたく
さん描いても、骨折ぞんに終ることがシバシバです。(一中
略——)ともかく、やれる所までやつて見ます。今、グワツシュ
(水彩と油の混血児みたいな材料)をやつております。

1930年8月2日付母和歌宛手紙：L-43

今、グワツシュで大きな画を描く下稽古をやつてゐますが、
どうも甘くなって、又、人眞似になつて面白くありません。
画つて、むずかしいものです。描いても描いても算術のやう
に思つた答へが出来て来ません。パリーにだつて僕より下手
な画描きが幾千人もあるでしょう。しかし上手な奴ときては
又素晴しくうまくて、そいつ等の画の前に立つと、ガッカリ
して気が遠くなります。(一中略——)近頃はなんだか自分の画
がいゝのだから、悪いのだから判らないやうな混乱振りです。な
るほど、昔の画と比べてみれば、一寸は見られるやうになつ
たのでしようが。来週は鈴木良三さんのマダム(アミと称し
て同棲しておる婦人)にポーズしてもらつて、油をやるつも
りです。(一中略——)せめて、二十点は人に見せられる作品を
持つてかへりたいと思ひます。

1930年8月5日付母和歌宛手紙：L-44

只今、鈴木さんのアミ、マドモアゼル、レオンにモデルになつ
てもらつて、油を描いております。(一中略——)それにつけて
もフランス語が上手になりたいと思ひます。で一生懸命、午
後はモデルのレオンと話します。先ず一通りは面白く世間話
し位判ります。時々、レオンに佛和大辞典をさがさせながら。

1930年8月13日付弟幸三郎宛手紙：L-46

今、幸ひよいモデルを得たので、毎日午後、アトリエで勉強
しております。以前よりやゝ筆の運びも楽にはなりましたが
まだまだとても、よい画は出来ません。来月は午前午後と大
いにやつて見たいと、大きなトワル(画布)等用意して意気
組んでおります。

1930年8月16日付母和歌宛手紙：L-48

先日、大分、上等な画布、五十号八枚分、求めました。九月、
十月とモデル續ける用意です。之からの一ヶ年半は今までの
二年にも三年にも比敵する能率のあがる期間と考へます。大
分、勝手も分り、落付きも出ましたから。で伊太利寫生旅行
でとゞめをさすとして、ともかく来年の秋までには、少しは
まとまつた作品が獲られると、——一寸、獲らぬ狸の皮算
用ですが——とマア思つてゐます。

1930年8月26日付母和歌宛手紙：L-52

今週は私もいさゝ可、死物狂いで画を描いてゐます。午前と午後。午前九時、レオンが来ます。僕の朝飯のパンを持って。寝坊しなくて結句いゝです。でも午前午後、たち續けておるので、ロクな画も描けないくせに、午後六時にはヘトヘトに疲れて、レオンの足音が階下に消へると、ベットの上面にぶっ倒れて、休みます。

3) 日曜日には郊外へ

このように中西は、4月3日にディエップから戻って以降8月末まで、モデルを雇い、アトリエで奮闘する毎日が続いている(後述するフロントネー=オー=ローズ滞在期間を除く)。しかしながら、日曜日にはアトリエでの仕事を休み、パリ郊外へしばしば写生や遊びに出かけた。この写生では、中西は主に水彩を用いている。「よい空気と美しい流れと生々しい樹木はパリーの疲れを休めて」(1930年4月15日付手紙：L-13)くれるものだった。この郊外への外出には、しばしば荻野暎彦が同行している。

1930年4月7日付母和歌宛手紙：L-12

昨日の日曜(四月六日)には荻野君と二人で、クラマールからムードン方面に寫生に出かけました。午後三時まで二人共頑張って一枚仕上げ、非道く空腹を感じたので、カフェーに飛込んで、大きなパンを存分食べました。

1930年4月21日付母和歌宛手紙：L-14

先日の日曜日(四月十三日)には山内君*、荻野君と僕の三人で、サンゼエルマン、アン、レイ(パリー近郊の名所、電車で約三十分)に散歩に行きました。フランスに王朝盛んなりし頃、離宮に使用された城等あり、善美を盡した庭園、延々一里に近き大テラス(散歩用の)皆公園になって居り、日曜、祭日にはパリー人を楽しませております。

*荻野と同じ船で渡仏してきた青年。中西の書簡では「日佛通商の方、と云って来た二十六才の青年」(1930年5月11日付母和歌宛手紙：L-22)と書かれている。その名は中西の書簡に散見するが、中西の手紙には姓のみしか書かれていない。後日、帰国した中西のもとに届いた1932年3月22日付のはがきに書かれている「山内篤治」と同一人物と思われる。

1930年4月27日付母和歌宛手紙：L-16

四月廿七日(日曜)、春らしい青空、荻野君と二人でFIN D'OISE*まで寫生に行きました。此處はセーヌ河の下流、オアーズ河の合流する地点、ガールサンラザール**より約四十分、日本の田舎でも一寸、見られないやうなボロ自動車。(一中略一)荻野君は油、僕は水彩を各一枚づゝものして、午後三時、川沿ひのレストランでハムとパンの遅い中食をすませ、又、寫生なぞしてパリーへ歸ったのが、午後七時

*ファン・ドワーズ：コンフラン=サントノリーヌにある駅名 **パリーのサン=ラザール駅

1930年5月3日付絵はがき：P-125

パリーから汽車で三十分許りの近郊に之んな美しい静かな所*があります。五月三日(土)、午前モデルをやったので午後一人でスケッチブックだけもって行って見ました。川沿ひに小奇麗な別荘なぞあってよい所です。

*ラ・ヴァレンヌ=サン=ティレール

1930年5月4日付絵はがき：P-127(図M-20①②)

荻野君と Villier Sur Morin*に寫生に参りました。ガールドレスト**発午前十時二十四分、Esbly***乗換、美しい平和な村に降りたのが十一時半、二人共各一枚ものして、此の寫眞のレストランで中食代りに御菓子なぞ食べました。ここは以前、死んだ二科の佐伯祐三がウント勉強した所で、たくさん日本人画家も行くため、村の人も親切にして呉れます。コノハガキもホテルのマダムが呉れたのです。

*Villiers-sur-Morin(ヴィリエ=シュル=モラン) **パリーの東駅

***エスブリー駅

1930年5月11日付母和歌宛手紙：L-22

今日の日曜日は山内 荻野 僕の三人で先日、寫生に行ったヴァレンヌ*に出かけ、雨に降られながら、ボート漕いだり、一日清遊しました。

*ラ・ヴァレンヌ=サン=ティレール

1930年5月18日付母和歌宛手紙：L-24

十八日(日曜)、寫生に出る予定でしたが午前中天氣が面白くないので、二人*でステッキ片手の散歩に出かけました。アルマ**よりセーヌ河の蒸気船に乗る頃から、上々の好天氣となり、一時間近くの川下りは実に愉快でした。

*中西と荻野 **アルマ橋

1930年4月～5月における日曜の郊外への外出について、中西の書簡で触れられているのは以上であるが、ほぼ毎週出かけていたことを鑑みるともう少し多いのではないと思われる。4月15日付手紙(L-13)に次の日曜は「Villiers Montbarbinへ参ります」(ヴィリエ・モンバルバン：パリ近郊クレシー=ラ=シャペルにある駅の名)という記載はあるものの、実際に訪れたかどうかは判らない。また、当館ではアンギャン=レ=バンが描かれた作品を所蔵しているので、書簡での言及はないものの、中西が郊外への写生の一環として、この頃この地を訪れたことは確かである。

平日はアトリエでモデルを描き、日曜日は郊外へ写生や遊びに出かける生活が定着する中、中西は、6月、パリ郊外のフロントネー=オー=ローズで3週間を過ごす。パリから列車で20分程の場所ということもあり、必要に応じて、しばしばパリへ行っては戻る(用足しのみならず、パリで食事をとって戻る等も)ことを繰り返したようだ。

1930年6月11日付母和歌宛手紙：L-29

六月十一日、此の数日来、素晴しい好天気續きめっきり、暑くなりました。今日、午後、荻野君を誘って、ホントネーオーローズへ出かけました。パリーの市内電車で行ける所ですが大変な田舎です。以前、古家新君がおった所で、其のホテルで一泊休ましたら、皆出て来て歓待して呉れました。しばらく田舎の景色描かないので、丁度、安い室(七日間六十法*、一日八フラン五十)が空いておった故、来ることにして、定めて来ました。明日から一週間か二週間、ホントネーで風景を勉強しましょう。一日が八法五十(日本貨にして七十銭位)とは安いホテルです。其れであつて洗面所が別室についてゐると云ふ訳、まあ、夕飯はパリーで食べて、ホントネーに歸り、早寝早起をやって、画を描きましょう。

*法=フラン

1930年6月12日付絵はがき(封書で3枚送付)：P-132～P-134

(P-132, 図M-21①②) 繪の道具と、家出でもするやうな手廻りの品をいれた風呂敷包み抱へてフォントネーオーローズに来ました。此のホテル*にゐます。一等上等の室、一日八法五十(七十銭)

(P-133) こんなノンキな汽車でパリーから二十分程、市内電車も一二七番と八十六番が来ます。至極便利で、それであつて実に田舎田舎してゐます。

(P-134) 拾号風景一枚描きました。明日はパリーのアトリエから水繪の道具運んで来ましょう。毎日パリーへ出られますから便利です。

*Maison ANCELIN(メゾン・アンスラン)

1930年6月29日付母和歌宛手紙：L-33

ホントネー、オーローズの生活もモウ三週間になります。来週は巴里に引上げやうと思つておりますが仕事の關係で多少延びるかも知れません。油がそれでも十点程、まとまりました。始めは水彩の大作をやる積りで参つたのですが、油繪の方に、(洒落ではありませんが)——油がのつて水繪は出来ません。来週はパリーで寫生する予程、セーヌの岸も美しいが、ヂャルダン、チュイルリーのさびのついたパリーらしい美しさは格別です。

中西がフォントネー=オー=ローズのホテルを引き払つてパリに戻つてきた日は、はっきりしない。7月1日にはパリから手紙を出している(L-34)ものの、既述のようにフォントネー=オー=ローズ滞在中、中西は、しばしばパリに戻つてゐるからだ。7月8日付の手紙(L-35)からは、アトリエでモデルを描いていることが判るので、この日までには、完全にフォントネー=オー=ローズのホテルを引き払つたことは明らかだ。

なお、この6月にはパリで、中西にとって興味深い展覧会

が2つ開催されている。ルーヴル美術館で開催された、「ウジェーヌ・ドラクロワ展」(*Exposition Eugène Delacroix : peintures, aquarelles, pastels, dessins, gravures, documents : Musée du Louvre, juin- juillet 1930*)と、ベルネーム画廊で開催された「ジェリコーより今日までのフランス水彩画家達展」(*Les Aquarellistes français de Géricault à nos jours : Galerie Georges Bernheim, du 18 juin au 3 juillet 1930*)である。

ドラクロワ展には油彩の他、100点近い水彩画も展示された。「私は数多くのドラクロワの水繪を此時見て眞に驚嘆した。ドラクロワの水繪を見ると、それは決して餘技的にとか習作的にとか考へられないもので、その技法は正に正面から堂々と攻めた水繪技法の本格的な最高度の練達を示して居るのである。それらは(一中略一)藝術的な香りと鋭い感覺を持ち、その水繪具の効果に於いては豊かさと新鮮さに満ちて居るのである」(前掲「水繪 技法と随想」p.313)。また、フランスの水彩画家達展については、「かくも多くの畫家の手に成つた水繪の多數が一堂に集められ展覧されたと言ふ事は眞に珍らしいことで、私にとつて忘れることの出来ない興味深い展覧會だつた」「大作こそ無かつたが、それらは繪畫として極めて純粋な美しさに満たされた、香り高いものであつた」(前掲書pp.316-317)。後年、この二つの展覧会について、中西はこのように述べており、以後の中西の水彩画制作にあつて、非常に大きな啓蒙と示唆を与えるものとなつたようだ。中西は同書でこのように続けている「此の二つの展覧会は私に教へるものゝ實に多くを持って居た。私は會場に何度となく足を運んで、それらの水繪の語る不思議な美しい世界に見入つたのである」(前掲書p.317)。

中西は、7月以降もアトリエでの人物画制作と、週末における郊外でのスケッチ等を続けている。しかし、以後の書簡には、具体的なスケッチ等の様子が書かれたものは少ない。7月15日付母和歌宛絵はがき(P-135)はパリから出したものだが、絵はがき自体はムラン(Melun)のものなので、それ以前にムランへ出かけたことは確かであろう(但しその文面はスケッチとは無縁の内容)。1930年7月～8月の書簡で郊外スケッチについて具体的に触れているのは、7月24日付母和歌宛手紙(L-40)の「明日はクラマールへ写生に行きます」というものと、8月17日付絵はがき(P-136～P-140)のマント(マント=ラ=ジョリー)へのスケッチである。

1930年8月17日付絵はがき(封書で5枚送付)：P-136～P-140

(P-138) 十一時四十五分発、急行でMANTESまで走り續ける。トリエール辺りのセーヌの下流の美しいこと。十二時五十分、マント着。重い荷かついで、お寺までテクル。

(P-139, 図M-22①②) 此の古い橋は、カラーも描いてゐる。一家揃つて川べりで食事してゐる平和な情景を随所に見る。僕、珍らしく神妙に水彩一枚仕上げる。一寸甘いがママママ日曜日の餘興ぢや止むをえまい

マントの絵はがき5枚目には、スケッチを終えてパリへ戻り、食事をした後、カフェでフジタと会った時の様子が次のように書かれている。

(P-140) カフェのテラスで藤田に会ふ。新しいマダム同伴、さすが藤田の御所有物だけあって其の手の美しさに驚いた。

V 1930年の絵画制作 II (9月から12月)

1) トリエール=シュル=セヌでの日々

9月、中西はパリから35キロほどのセヌ河の下流、トリエール=シュル=セヌに2週間ほど滞在する。毎週末にパリ近郊の様々な場所へスケッチ等に出ている中西だが、この地を訪れてみようと思ったきっかけは、上述の8月17日にマントを訪れた際に車窓から見えた「トリエール辺りのセヌの下流の美し」(1930年8月17日付絵はがき:P-138) さであったのだろう。

1930年9月5日付母和歌宛手紙:L-54(図M-23①②)

九月五日(金)、パリーを離れること約35キロメートルの小さな Triel(トリエール)の町に参りました。汽車で約一時間、戸數五百、セヌ河の下流に沿った一寸、描けさうな町です。昨日、下検分に来て、気にいつたので、ホテルの室をさがしたのですが、こんな所へもパリーから避暑に来る人があると見えて、満員でかなりさがすのに骨を折りました。で、やっとホテル、コンメルスにとてもキタナイ一室をさがし出して、ともかく定めて、昨日はかへりました。しかし今日、来て見ると全く物凄い位、キタナク暗いので、(一中略)外をさがしましたら、幸ひ川向ふの Restaurant Pascal(レストラン、パスカル)の三階の一室が空いておったので明日はそこへ移るつもりです。此處とて、電気がなく、ランプが机の上に置いてある始末、しかし食堂も庭も清々しく いかにも清潔なので気に入りました。一日、三食付30フラン(2円40銭)安いものです。景色もなかなか美しく、相当描けそうです。気にいった作品が出来たら、サロン、ドートンヌに送って見ましょう。

この手紙は、中西がキタナイと書いているオテル・デュ・コムルスの便せんに書かれており、同封されたトリエールの町の概略図(図M-23②)も、ホテルや主要な建物の位置関係が一目で分かり興味深い。また、現在6枚のこされているトリエール=シュル=セヌの絵はがき(P-141~P-146, 図M-24~M-26)も、この町の様子をよく伝えている。中には写真面に書き込みがあるものもあり、宿泊している「レストラン・パスカル」をはじめとする滞在地の説明用に、手紙に同封されたものと思われる。そのうち、9月15日の日付があるもの(P-146,

図M-26)には、セヌ河で釣りをする中西の姿が描き加えられていて、下記9月14日~16日の様子を日記風に記した手紙の、15日の内容と一致する。

また、トリエールもパリから近いので、中西はパリへ出て用事を済ませたり、時にはそのまま自分のアトリエに泊まることもあった。下記の手紙からもその様子が分かる。

1930年9月16日付母和歌宛手紙:L-57

九月十四日(日)、天気悪し。一日、レストランパスカルの屋根裏でくすぶる。画を直したり、ボンヤリ煙草ふかしながら外を眺めたりなどして暮す。田舎で雨に降られるのは一寸困り者、(一中略)今夜だけパリーのアトリエへ泊りにかへることにして、夕食後、八時十一分の汽車でパリーへかへる。ガールサンラザール*着、九時十分。タキシーを飛して、アトリエへ。下のコンシェルジュの所で、八月廿六、廿八日御差出しの御便りその他、郵便物をもらってアトリエに入る。自分の室らしい感じのするのも嬉しい。(この後、友人たちと徹夜して過ごしたことが述べられている)

十五日(月)七時にねて、十一時に起きて、日佛銀行に走せつけて、十二時二分の汽車でトリエールにかへる。全く、電光石火。中食をすませ、午後、レストランの親爺と釣りに行く。まア、ほとんど生れて始めて位の釣り、所が意外にも面白いやうにピョンピョン釣れて、二時から五時頃までに、僕だけで十六、七匹釣上げる。

九月拾六日(火)、晴、昨日、三時間も立ったまゝ、釣りをしたので一寸、腰がいたい。午前九時、朝食をお婆さんに室まで持って来て貰ふ。午前中、お寺を中心にした構圖の三度目を描く。午後、可成重たい道具をかゝえて、汽車で次の駅(Andréchy-sur-Seine**)まで出かける。トリエール以上に変化のある美しい町だ。セヌの河沿ひにはパリーの金持ちの、美しい庭を持つ別荘が並んでゐる。川には白いボートが浮んでゐる。なかなかシックな風景。アンドレシー**で一枚、Pont-Effel***で一枚、午後七時六分の汽車でトリエールにかへる。(一中略)只今、約、十五号大の水彩を描いてゐます。之れで筆を練らして、来るべき伊太利旅行の準備をしてゐるわけです。一寸、石井柏亭さんに、画が似て来たのは嫌味ですが、その内、又、なんとか変わるでしょう。柏亭氏はえらい。アノ使用法こそ、水彩繪具にもっとも、合つてゐるのですから。しかし人眞似は禁物、大嫌い。明日は又、一つ馬力をかけましょう。

*パリーのサン=ラザール駅 **正しくはAndrésy(アンドレジー) ***Pont-Effel(エッフェル橋の意)は、オワーズ川にかけられた橋で、コンフラン=サントノリーヌにあったが、1944年に壊され、現在は無い。

また、中西はトリエール滞在中、周辺の町々をしばしば訪れて、スケッチを重ねている。

1930年9月17日付父理吉宛手紙：L-58

午前中、昨日の画を、筆をいれたりして過す。午後、天気が悪いで、スケッチ帖と雨具を持って、Poissy*へ行って見る。汽車で二つ目、汽車賃一フラン八十。一寸、凝ったレストラン等ある町で、景色もよい。二ツ三ツ、スケッチしてお寺を見に行く。天気が悪くなったので、歸る汽車をと思った所、五分の差で逃してしまい、田舎の汽車とて次のまで二時間半もあるのは閉口、待つのもつまらないので雨の中、次の駅 Villennes**まで歩いて見る。ビレンヌについてもまだ二時間もあるので、到々、タキシーをさがして、トリエールにかへる。

*ポワシー **ヴィレンヌ=シュル=セヌ (Villennes-sur-Seine)

本状に同封したと思われる、ポワシーの絵はがきが3枚のこっており、それぞれに「一九三〇、九、一七」(P-147)、「一九三〇、九月十七日午後」(P-148)、「今日行ったポワシーです。一寸、よい寺でしょう」(P-149)の書き込みがある。

1930年9月18日付母和歌宛手紙：L-59

トリエール滞在も早、二週間になりました。特別な、まとまった収穫はありませんでしたが、淳朴な田舎人の間に入って、釣りしたり、散歩したり、清々しい川辺りの空気の中で過した二週間は決して悪いものではありませんでした。可成、近所もまめに歩き廻って見ました。ベルヌイエ* ベルヌイユ**。ムーラン***。アンドレシー。ポワッシー。ピエンヌ****。コンフラン、ポン、エッフェル。(一中略)午後七時半から食事、八時に終って、それから煙草屋ヘラデオを聴きに行くのが一つの習慣になりました。(一中略)今夜はモツアルトの「魔笛」サンサンの「サムソンとデユリア」*****等。明日はロンドンのクィンスホールオーケストラがベートーベンの第六シンホニーをやるから、是非、早く来いと云ふ言葉に送られて家にかへりました。お蔭で、音楽をきけて、夜分、退屈しません。大体において、フランスの人は気さくで、つきあいよいです。

*ヴェルヌイエ (Vernouillet) **ヴェルヌイユ=シュル=セヌ (Verneuil-sur-Seine) ***ムラン=アン=イヴリーヌ (Meulan-en-Yvelines) ****ヴィレンヌ=シュル=セヌ *****サン=サーンスのオペラ「サムソンとデリラ」

1930年9月19日付母和歌宛手紙：L-60

トリエールの田舎生活もいよいよ今夜限りで終ります(九月拾九日)。六日から二十日まで。歩き廻ったり仕事したり、釣りしたり、愉快地に過せたことを喜んでみます。(一中略)今日は午前中、暴風雨で外へなぞ出られませんでした。午後、天気がよくなったので汽車でMuelun*へ行きました。其して、近辺を歩いて、エハガキ等求めてかへりました。実に美しい町です。所々、心覚えにスケッチしたりして。時々、アマリ美しいのでタメ息が出ます。今度の旅行で集めたトリ

エール及び其の近傍のエハガキだけで百三十何枚、いずれ、日本に持ってかへって、アトリエでフランスを思ひ出す、よい手がかりとなるでしょう。(一中略)来週は又、アトリエへ モデル始めます。

*正しくはMeulan(ムラン=アン=イヴリーヌ)。なお、ムランの絵はがき2枚(P-150, P-151)は、この手紙に同封されたものと思われる。

9月5日から20日に至る、2週間のトリエール滞在(レストラン・パスカルへの滞在は9月6日から20日)について、中西は「歩き廻ったり仕事したり、釣りしたり、愉快地に過せたことを喜んでみます」(9月19日付手紙)と述べている。8月26日付の手紙(L-52)に書かれていた「死に物狂いで」絵を描き、「ヘトヘトに疲れて」「ベットの上にもぶっ倒れて」休む状況からは一転。トリエールとその周辺の美しい自然や、この地の人々との心あたまの交流は、制作に思い悩み疲れた中西の心を、十分に癒やしたようである。そのような心の状態は、制作においても良い方向へと中西を導き、この地での滞在から《トリエール・シュル・セヌ》(千葉県立美術館蔵)(図C-16)や《トリエール風景》(当館蔵)(図C-17)といった、滞欧時代の代表作が生まれている。前者はこの年のサロン・ドートンヌに入選し、後者は帰国後の第13回帝展に入選することとなる。なお当館では、第13回帝展入選作に加え、中西がトリエールで現場制作した作品(図C-18)も所蔵している。両者を比較すると、いくつかのモチーフについて、色彩や形状、配置等に違いが見られ、中西が本面に仕上げる際、それらを整理しなおして画面を作り上げていることがよく判る。

2) オランダ再訪、2度目のサロン入選

10月、中西はアムステルダムの市立美術館で9月6日から11月2日まで開催されたゴッホの展覧会を見るために、再びオランダ、次いでベルギーを訪れる。この展覧会には、クレラー=ミュラー家のコレクションを含む366点が出品されており、中西はこのゴッホ展のことを、トリエール滞在中に知ったのだった。

1930年9月17日付父理吉宛手紙：L-58

それから、オランダのアムステルダムで最近、ヴァン、ゴッホの記念展が開かれました。陳列点数三百以上ときゝます。昨年行った所ですが、此んな機会は又とありませんから、荻野と二人で出かけるやうになるでしょう。

そして10月2日、荻野暎彦とともに、オランダへと旅立つ。

1930年10月2日付父理吉宛絵はがき：P-152

十月二日、パリー発アムステルダムに参りました。昨年と同じホテル、グーデムホーフ*に泊っております。

*ホテル・ハウデン・ホーフト

1930年10月4日付母和歌宛絵はがき：P-154(図M-27)
いつ来てもオランダは感ずのよい国です。ヨーロッパを旅してオランダが一番文明国のやうに思いました。毎日美術館通い、ゴッホの三百六十六点、もうこんな素晴らしい展覧会は一寸ありますまい。

中西は、展覧会を見た感動をこのように記している。そしてこの展覧会で、ゴッホが120点の水彩画を描いていることを知って驚いている(前掲『水繪 技法と随想』p.319)。すでに中西は、パリの画廊で初めてゴッホの水彩画に触れた時、「あのボキボキした筆觸から溢れ出る強い迫力と不思議な美しさ」「水繪具といふものの中にこのやうな不思議な美しさと感情を盛り込むことが出来るものか——」(前掲書p.323)と、深い感動を覚えていた。そして前年(1929年)の8月末～9月初めには、既述のようにゴッホ終焉の地であるオーヴェール=シュール=オワーズや、クレラー=ミュラー・コレクションによるゴッホ展を見るためハーグを訪れてもいた。中西にとってゴッホは最も尊敬する画家のひとりになっていく。そして翌1931年7月7日付母宛ての手紙(L-110)では、一年間探し求めたゴッホの画集をようやく手に入れ、その喜びを書き送ることとなる。時系列的には1年先のことにはなるが、ここで併せて紹介しておこう。

1931年7月7日付母和歌宛手紙：L-110

先々週、一年がかりでさがしておりました、ゴッホの大画集(四冊)を偶然オペラの附近の本屋で見つけまして、手金を打っておきましたので今度の送金は可成待受け気味の所、今朝到着、早速、銀行にはせつけ、本屋に廻って受取って、アトリエに持ちこんで、ヤット安心しました。此の画集は、一九二八年、限定出版にてパリーで発行されたもの、なかなかどこにもある品でなく、昨年、荻野が一部手に入れた時は私ものどから手の出る位欲しかった本、昨年の六月以来、私の知っておる目ばしい本屋を全部巡ってさがしてゐたのです。なかなか高價で千三百五十フラン(百二十円位)先ず東京ぢや荻野と私位しか持ってゐない本でしょう。私の最も尊敬するヴァン、ゴッホの画集を手に入れて今日は実に愉快です。

この画集とは、1928年に刊行されたド・ラ・ファイユによるゴッホのカタログ・レゾネ(Jacob Baart de la Faille, *L'Œuvre de Vincent van Gogh, Catalogue raisonné*, 4 Volumes, Paris et Bruxelles, 1928)である。そして後年、中西が執筆することになる「ゴッホの水繪に就いて」(前掲『水繪 技法と随想』1943年に所収)という小論は、このカタログ・レゾネをもとに、中西が研究した成果である。中西の作品の中で、ゴッホからの影響を直接に感じさせる作品は少ないが、例えばペンで描画し水彩を施した《麦秋》(1946年)(図C-30)は、中西が上記の小論の中で次のように述べる作品からの影響は明らかであろう。「青い二輪馬車が畫面中央におかれ、その後にはひろびろとプロヴァンスの野

が展けてゐる風景を彼は全く同じ位置から何枚となく描いてゐる。その内の一枚はペンで線描きした上に水繪具をかけ、前景の叢や白壁などにパステルを施したものであるが彼の水繪の中で最優作であらう」(前掲書pp.330-331)。

さて、1930年10月のオランダ旅行に話を戻すと、中西は、アムステルダムで再びレンブラントの《夜警》(1642年)の前に立って感銘を新たにしている。その一方、帰路ベルギーでかなり多くのルーベンスの作品を見たものの、油彩技術の点は別として、絵画そのものはどうしても好きになれなかったと記している(前掲書p.319)。

中西がアムステルダムから出した書簡(P-152～P-155)には、上述の展覧会を見ての感動に加え、オランダ出発前に寄った大使館で知らされたある事実に対する説明も述べられている。その事実とは、大使館員から聞いた「貴方と同名の方が亡くなった」というもので、中西は、日本の自宅へ間違った連絡が行くことを心配する。そして、はがきには、急遽、電報を打ってからアムステルダムに来たこと、自分は無事なので心配しないで欲しいことを、併せて書き送っている。今日のように簡単に通信ができなかったこの当時であって、家族になるべく心配をかけたくないという中西の思いが読み取れる。

10月9日、中西はパリへ戻った。

1930年10月9日付母和歌宛手紙：L-63

拾月九日、約一週間のオランダ、ベルギーの旅を終へてアトリエに歸りました。まだ、ガン、ブリュヂュ、ブリクセル*を巡る荻野とは今朝、アンベルス**で別れました。汽車は「ロアゾーブリュー」***、荻野が駅まで送って来てくれました。九時半発、パリー午後二時着。(一中略一)(10月2日にパリを出て)三、四、五、六——とオランダのアムステルダム滞在、七日、ヘイグを見てアンベルスへ。アンベルス二泊、そして今日パリーへ戻ったやうな次第です。

*ブリュッセル **アントワープの伝説名(Anvers アンヴェール)
***L'Oiseau Bleu(青い鳥の意)アントワープ～パリを結ぶ国際特急列車。その名はベルギーの作家メーテルリンクの「青い鳥」からつけられた。

パリへ戻るとこれまで同様モデルを雇ってアトリエでの人物画制作と、日曜日のパリ郊外スケッチの日々が続く。

そして11月、中西はサロン・ドートンヌへ2度目の入選を果たす。第23回サロン・ドートンヌ(グラン・パレ、パリ：11月1日～12月14日)に入選したのは既述の《Triel-sur-Seine(トリエール・シュール・セーヌ)》(千葉県立美術館蔵)(図C-16)、《Paysage à Meudon(ムードン風景)》(現在は「ロダンの家に見える風景(木立)」というタイトルで知られている)(図C-19)の2点である(註32)。この時、11月8日の『ル・タン(*Le Temps*)』紙におけるサロン・ドートンヌ評で、中西の作品にも言及があり、中西はこの新聞とともに、次のような手紙を家族に送っている。

1930年11月13日付母和歌宛手紙：L-66

私のサロン画の批評 ― と云ふ訳でもありませんが、一寸した記事が十一月八日の「ル・タン」紙に出ましたので、此の新聞送ります。(記事の原文を書き出し、それに続けて)「一つの優れたムードンの風景が、日本人中西氏の繊細な筆によって、同程度の、自由さをもつ他一点と共に、水彩画として、よりよく表現されておる。」拙たな譯ですがマア大体こんな意味です。こんな新聞の批評で納まぢまふほど、それほど私も馬鹿に出来上ってはおりませんから御安心下さい。でも二千何百点もある画のなかから、隅みっこに並べてある私の画を、見つけて、こんなことを書くチボー、シソン氏がパリーにおることを私は一寸面白く思つてゐます。今度出品した二点の内、一点は今までの私のゆき方をそのまゝ進めて行った、マア、私らしい、おとなしい繪、他の一点は、可成新し味を加へた一つの試みと云つた繪、それを一面識もない同氏がよく感づて、書いてゐるのには、いささか敬服もし、一面、樂屋を見すかされたやうなウス気味悪さも感ぢました。

この文面からこれら2点の入選作について、ル・タン紙の評を中西が「繊細な筆」と訳し、続けて「今までの私のゆき方をそのまゝ進めて行った、マア、私らしい、おとなしい繪」とした作品が《ムードン風景(ロダンの家の見える風景(木立))》であり、また「同程度の、自由さをもつ他一点」と訳し、「可成新し味を加へた一つの試みと云つた繪」と続けた作品が、《トリエール・シュル・セヌ》であると思われる。ただ、『ル・タン』紙の原文は、“un excellent Paysage de Meudon, interprété à l'aquarelle avec autant de liberté que de finesse par le Japonais Nakanishi” (註33)で、訳すと「日本人中西の、繊細でありまた同じく自由である(=繊細さと自由さとを併せ持つ)水彩によるすばらしい《ムードン風景》となり、《トリエール・シュル・セヌ》に対する記述はない。おそらく中西は、新しい試みを行なつた《トリエール・シュル・セヌ》に対する思いから、このように解釈したものと思われる。この作品について中西は後年「白は相當大膽に各所に使はれては居るが畫面を重苦しくはして居ないと思ふ。それと可成り大きな部分が透明に一度塗られただけでそのまゝにしてあるのが、現在見て面白く思ふ點である。當時は全體的效果といふことを極度に考へて苦んでゐたので、時には自分のものでない異物も感ぢられるが、私としては想出多い作品である。」(『水繪 技法と隨想』p.333)と述べている。

サロン・ドートンヌへの2度目の入選、そして、ル・タン紙のサロン評で取り上げられたことも、中西にとってひとつの自信へと繋がつたのであろう。以後の手紙からは、制作に思い悩む様子が代わり、自分なりの成果や手応えを感じつつある様子が見て取れる。

1930年11月16日付母和歌宛手紙：L-67

画の方も覺つかなげながら、少しずつはどうかになつて行くやうです。

1930年11月29日消印母和歌宛手紙：L-73

仕事の方も、近頃は可成、面白くなつて、いろいろのことやっております。古い判画(ママ)の手法を水彩の技法にとりいれて、いさゝか研究しておりますがなにか出来さうです。油の方も此の二ヶ月續けて五十号許り描いて、此の材料にもやゝ手練れました。なんでも、少し打ち込んでやると面白味が湧いて来るものです。そして人間は、はじめて生き甲斐を感ぢるのぢやないでしょうか。

1930年12月16日付母和歌宛手紙：L-76

パリーも冬の悪い氣候に入つて毎日、天氣が悪く勉強もやりにくいですが、とにかく續けてゐます。今スエーデンの娘がポーズしてゐます。来週は止めるつもりでしたが、或る人の紹介で他のモデルが来ることになりました。

1930年12月23日付母和歌宛手紙：L-78

サロンの寫眞到着致しましたさうですが、マアあんな風なものを二点出して見ました。一枚の、新しい方の画はまだまだ自分でも疑問をもつておるので、このまゝでは、面白くありません。もう一奮発、かへるまでなんとか目鼻をつけたいものです。

1930年12月28日付母和歌宛手紙：L-79

近頃は、主として、グアッシュをやつてゐます。水彩より面白くなりさうですから。

当館所蔵の1930年の年記がある《黄色い首巻(人物)》(図C-20)は、おそらくこの頃の作品であらうと思われる。中西がパリのアトリエで、モデルを描いた人物画は、実はあまり多くはのこされていない。中でもこの作品は、帰国後の第19回日本水彩画会展(1932年)で滞歐作として特別陳列された作品(この時のタイトルは《人物》)としても貴重である。この作品について中西は後年、「約二十號大の厚手のボール紙にグアッシュで描いた作、滞佛當時パリー十四區のアトリエでフランス女をモデルにした人物畫である。グアッシュの効果といふものは水繪とは又別で寧ろ油繪的追求をしてもよいと考へられる。この作なども相當厚手に色をつけて、色を削つたりなどまでして描き込んでいる。グアッシュでは水繪具のやうな細かい技巧は出來ないが、そこが又グアッシュの面白い所でもあり、強さも相當出るものである」(前掲『水繪 技法と隨想』p.343)と述べている。

こうして1930年末頃になると、中西は制作することの面白味を感じるようになってきた一方、日本の家族からは度々、帰国予定はいつなのか知らせよう催促を受けるようになる。そ

して1931年の9月末頃フランスを発ち、11月に帰国することを検討していると、次のように伝えた。

1930年12月3日付母和歌宛手紙：L-74

度々のおさいそくで恐縮しております。では大体的見当をお知らせしておきましょう。来年九月三十日、マルセイユ出帆の康國丸(ママ)*、で日本へは十一月五六日頃着く予定
*正しくは靖國丸

中西はいよいよ帰国の年=1931年を迎えることとなる。

VI 1930年パリでの暮らし

1) 音楽会や舞踏会

これまで1930年の中西の書簡から、主に絵画制作に関わる部分を中心に紹介して来たが、ここで少し、交友や、食生活、趣味に関する事等を見ていきたい。

クラマールからパリのアトリエに移って、生活の中で大きく変わったことの一つに、夜開催される音楽会や舞踏会へ足を運びやすくなったことがあげられる。音楽好きの中西が、フランスに来て早々に立派な蓄音器を買ったことは既述のとおりであるし、クラマール時代にも、パリで開催される音楽会に通っていたとは思われる。小磯良平は後年、「三人(中西・小磯・竹中郎)で音楽会をよく聞きに行ったものである。サール・プレイエルやサール・ガボオ(このホールの玄関には昔の美しいピアノやチェンバロが飾ってあった)などに出かけた。私達のいた頃はコルトオ、チボウ、カザルスまたルシアンバレエに興奮した頃でもあった」(註34)と書いているので、中西が小磯らとコンサートに行ったとすれば、それは小磯が帰国する前のクラマール時代ということになる。だが、クラマール時代の中西の書簡にはコンサートに行ったことはあまり触れられていない(註35)。パリに移り、中西は、書簡で触れているだけでも様々なコンサートへ出かけ、夜に映画を見、舞踏会等にも参加するようになる。

1930年2月18日付父理吉宛手紙：L-3

先日(二月十五日)荻野君のおられる日本人学生会館*でBal(舞踏会)がありまして、僕も出席しました。そして、すゝめられるまゝにベルギー生れのお嬢さんやフランスの娘さんと生れて始めてダンスと云ふものを人前で踊りました。いさゝか、厚顔しいの自分自身であきました。ベルギーの嬢さんの両親は大変喜んで呉れて、四人でビュフェー(日本なら模擬店)へ行って、飲物などとり、いろいろ話したりしましたがその時、羊羹をすゝめましたら皆、おいしがって食べました。愉快な人達です。(一中略一)鈴木さん**とタクシーで家へかへったのが朝の六時、十二時までねむりました。は

じめてパリらしい美しい舞踏会を見まして、愉快でした。

*1929年、薩摩治郎八がパリ国際大学都市に建設した「日本館」 **「鈴木さん」と書いているので鈴木良三と思われる。

1930年3月17日付母和歌宛手紙：L-7

今夜、荻野君と二人、サルプレイエル*のcolt チボウ カザルス**の三重奏(先ず現在では世界一の顔合わせ)を聴きに行き(以下略一)。

*Salle Pleyel パリ8区にあるコンサート・ホール、Salleとは仏語でホール、広間 **ピアニストのアルフレッド・コルトー、ヴァイオリニストのジャック・ティボウ、チェリストのパブロ・カザルスで、1905年にカザルス三重奏団を結成した。

1930年3月25日消印父理吉宛手紙：L-8

今夜*はサル、プレイエルでベートーベンの二つの交響楽をブルノー、ウォルター**が指揮したので聴いて来ました。立派でした

*3月25日消印なので3月24日 **ブルーノ・ワルター

1930年5月6日付母和歌宛手紙：L-20

十時から荻野君と二人、オリンピア*に活動寫真を見に行つて今かへった所です。

*L'Olympia オランピア劇場。開業は1893年。現在はミュージックホールとして知られるが、一時映画館にもなっていた。

1930年5月11日付母和歌宛手紙：L-22

同ぢ夜*、二人**でテアトルシャンゼリゼーにアンナパブロバ***の舞踏を見ました。

*5月10日 **荻野と中西 ***20世紀初頭のロシアのバレリーナ、アンナ・パヴロワ

1930年5月17日付母和歌宛手紙：L-23

五月十三日と十五日の両日、ベルリン国立オペラの名指揮者、フェルトベングラーがパリに来てグランドオペラで演奏会を開きました。二日共荻野君と二人で聴きに行きましたがフランスのオーケストラとは又格段の相違で、強い感激を覚えました。

1930年5月31日付手紙：L-28

今夜は荻野君と二人、(尤もいつも二人ですが)サルプレイエルで催された、是こそホントウの世界一の歌手、シャリアップ*氏のレサイタルに行きました。年一回、それも唯一夜限りパリで開かれる会なので大変な人気で、それこそパリー社交界の花形、總出動と云ったやうな賑やかさでした。

*フョードル・シャリアピン

1930年12月21日付母和歌宛手紙：L-77

今日は十二月二十一日の日曜日、午後九時からサル、イエナ

で、ソニヤ、ベルビズキー*が各国の俗謡を歌ふので、行って見ました。三十国の歌を各々其の国語で歌ってきかせるのです。どんな日本語で日本の歌を歌ふか、一寸面白く期待してゐましたら「猫ぢゃ猫ぢゃとおっしゃいますが、猫が……」
「猫ぢゃ猫ぢゃ」には一寸、てれましたが西洋人は、あの、簡単な、陽気な節が気に入ったのか大変な拍手でアンコールをしました。(一中略)パリーに居ると飛んだものをきかされます。

*ソニヤ・ベルビズキーについては不詳

以上が、書簡に開催場所や演奏者・演目等が書かれているものであるが、それ以外にも「淋しい時は荻野君と二人で活動寫眞を見に行きます」(1930年4月15日付手紙:L-13)「活動寫眞を見ました」(1930年6月19日付母和歌宛手紙:L-31)、あるいは「オペラを見てゐる時」(1930年8月16日付母和歌宛手紙:L-48)等の記述が見られ、中西はもっと多くの映画やコンサート等に足を運んだと思われる。また、書簡において5月までの記述が多いのは、パリでの新生活が始まり、映画やコンサート通いの近況を家族に伝えたい思いが強かったからであろうとも考えられる。

2)交友：上社会メンバー、在仏邦人、外国人

中西のパリでの交友については、まず、上社会のメンバーたちからみていきたい。既述のように、中西がフランスで最初に頼り、交友したのは、東京美術学校西洋画科の同窓生＝上社会の仲間たちである。中西のパリ到着時にリヨン駅で迎えた荻須高德と山口長男、ともにヨーロッパ各地を旅行した小磯良平。小磯からはそのアトリエを引き継いでもいる。中西がマルセイユで出迎え、以後しばしば行動を共にし、その書簡に最も多く登場する人物＝荻野暎彦も、上社会のメンバーである。またフランス滞在が長くなるにしたがい、中西の立場も、頼る側から頼られる側へと変わっていく。そして友人の住居の世話等もするようになる。

1930年2月24日付父理吉宛手紙:L-4

荻野君、去る二月二十一日(土)、50 rue Vavin, Paris(6^e)*のアトリエに引移られました**。二人で引越しました。そして、台所道具とかカーテンとかテーブル類を二人で時々マガザン***に買出しに行きます。至って元気でお暮しです。おついでの節、ご両親におつたへ下さい。

*パリ6区ヴァヴァン通り50番地 **荻野はそれまで日本人学生会館にいた(2月18日付父理吉宛手紙)。 ***仏語で商店、店

1930年8月14日付母和歌宛手紙:L-47

今日(八月十四日)実に幸ひにも僕のアトリエの一階上のアトリエが空きました。早速、荻野君へ飛ぶやうにして行って知せて、荻野君の入ることに決定しました。

この後、1930年8月19日付母和歌宛手紙(L-50)では、荻野の引越しが確定し、それを「御母上にもお知らせ下さい」との記述がある。上記2月24日付父理吉宛手紙には「おついでにの節、ご両親におつたへ下さい」という記載もあり、在仏の息子を持つ日本の親同士も交流を持っていたことがわかる。ちなみに荻野の父は、古美術保存事業に尽力し、国宝保存会委員などもつとめた荻野仲三郎(1870-1947)である。

この頃パリには、中西、荻野に加え、荻須高德、山口長男、小堀四郎、高野三三男、加山四郎、藤岡一といった上社会のメンバーがおり、いずれにしても気心の知れた同窓生たちがこれだけ揃っていたことは、お互い心強かったに相違ない。1930年4月6日には、中西は荻野とともに、ムードン方面への写生ついでに、当時ムードンにあった藤岡一の家を訪問し、夫人の手料理をごちそうになる等もしている(1930年4月7日付母和歌宛手紙:L-12)。

この上社会パリ在住会員は、1930年7月19日、東京美術学校教授、岡田三郎助夫妻の歓迎会を開催しており、中西はその様子を手紙で伝えている。岡田は欧州へ出張のため、また小説家・劇作家として知られた妻八千代は、三郎助と別居していたが、この頃一時和解し、パリへやってきたのだった。

1930年7月24日付母和歌宛手紙:L-40

七月十九日(土曜)の夜、昭和二年度美校出身の上社会パリ在住会員主催で岡田三郎助御夫妻歓迎会を万花酒樓に開きました。集るもの、先生御夫妻を始め、上社会七名*(藤岡氏欠席)その他總て十六名、仲々盛會でした。寫眞出来ましたら送ります。終って、吉例の上社会レベイヤン**(夜明し會)を七名で高野君のアトリエ(11 rue daguerre)に催し、雑談に、一夜を明し、午前五時、高野君お心盡しのお茶漬けに一同、舌鼓みを打って散會しました。近頃面白い集りでした。

来る廿六日に、今度は美校出身者全部の歓迎会が日本人倶楽部であります。出席します。

岡田先生に御挨拶した時、先生はよく、貴方のことを記憶されておられて、お母さんお元気ですか——なぞおつしゃつておいででした。夫人は日本服で堂々とパリーを歩いておいでです。先生はベルサイユのホテルに、夫人はモンパルナスのホテルロイヤルに泊っておられます。

*中西、荻野、荻須、山口、小堀、高野、加山 **réveillon:真夜中の食事、夜通しの祝宴

なお、この時の写真によると、この会には、当時パリにいた東京美術学校助教の和田季雄夫妻や、荻須高德の友人である大橋了介、横手貞美も参加していた。

実は、上社会パリ在住会員のまとまった集まりとしては、これが2回目となる。1回目は前年の1929年12月8日に和田季雄夫妻を囲んで開催したもので、写真を見ると中西も出席しているのだが、このことに触れた中西の書簡類は、残念ながら

のこっていない。写真には他に、荻須、山口、荻野、藤岡、小堀、高野に加え、この当時はまだ在仏していた小磯良平や小磯の友人竹中郁も写っている(註36)。

こうしたパリ上社会の集まりは、中西の書簡にはもう1度出てくる。1931年4月30日、パリを去る和田季雄の送別会を兼ねて開催されたものである。また、上社会ではないのだが、帰国目前の和田を囲む東京美術学校関係者による集まりも、1931年5月10日に行われている。時系列的には次の年になるが、これら2つについても併せて触れておこう。

1931年4月30日(5月1日朝)付母和歌宛手紙：L-92

午後七時より日本人倶楽部で和田先生送別会を兼ね、上社会開催、會するもの、十名、親しみのある、よい集りでした。記念撮影后、荻野だけ帰宅(一中略)後った一同、タキシード二台に分乗して、モンマルトルの藤岡君のアパートに参上、そこで、御馳走になり、到々、夜明し、朝の六時、一同、引上げました。

1931年5月10日付母和歌宛手紙：L-94

上海亭で本日、和田先生夫妻にお目にかゝりました、先生は来る十五日の箱根丸で日本へかへられます。皆んなの希望で、私のアトリエでシネマを見せることになり、私だけ一足先きにアトリエにかへり、準備等してると八時半、同勢七人、和田夫妻、同級の藤岡夫妻と清ちゃん、荻須君、下級の吉井淳二君、そこへ偶然、加治木中佐*も見えて大変な賑やかさ。私の撮ったニースのカルナバルの実寫、ルクサンプルグ公園**、其の他を映寫、それから、お持たせのお菓子を丁戴、日曜日らしい賑やかさ、愉快でした。

*加治木は、中西によれば、フランス大使館付武官として何度もパリへきており、今回で4度目。中西とは偶然日本料理店で出会って話をしたのがもとで交際が始まり(1931年6月24日付母和歌宛手紙：L-105)、従五位勲三等海軍中佐(1931年6月25日付母和歌宛手紙：L-106)の肩書きを持つという。この人物は、海軍兵学校38期卒業で、少佐時代の1925年末から2年間在フランス大使館付海軍武官補佐官を務め、1930年に中佐となった加治木智種であると思われる(The Naval Data Base 人名事典による)。加治木は、1931年の中西の書簡に、しばしば登場する **リュクサンプル公園

上社会の仲間に加え、白山丸に同船してきた白山会のメンバーとも、中西は深い付き合いを続けている。鈴木良三についてはこれまでも述べてきたが、同じく同室だった広島高等工業学校教授の中江大部とも、パリの中西のアトリエで牛鍋をつついたりするなど(1930年4月15日付手紙：L-13)、かなり親しい交際を続けたようだ。1930年4月21日にはともに競馬にも出かけている。

1930年4月21日付母和歌宛手紙：L-14

今日は中江教授とロンシャンの競馬を見に行きました。パリ一物物の一つで、その芝地の美くしきは実に無類です。パ

リー、いや、ヨーロッパの流行は春のロンシャンの競馬場より始まるといはるゝ位、パリー中の金持が流行の先端をきそふ有様は実に盛んなものです。(四月二十一日、パックスの祭日*でモデルは休み)

*Pâques(パックス)とは仏語でイースター(復活祭)のこと。イースターは日曜日であり、1930年4月21日は月曜日なので、曜日があわないのだが、イースターから連続してモデルが休みなのだと思われる。本来ならアトリエで制作をしている日に競馬へ出かけたこと理由を律儀に説明しているようだ。

また、書簡への登場は1931年になるのだが、中西は作家の福永恭助(1889-1971)とも、白山丸以来の仲間として交友していたようだ。

1931年3月1日付母和歌宛手紙：L-83

改造二月号に一寸、面白いパリーの話が出てゐますから逆輸入してお目にかけます。筆者は白山丸と一緒にパリーへ来た、そしてクラマール時代には、僕のベットを買って(ママ)あげたことのある、福永恭助さん、多賀京助さんと変名してゐますか。

1930年4月27日付母和歌宛手紙：L-16

昨夜、鈴木良三さんのアトリエで白山会の解散會をやりました。二ヶ年續いたパリーの白山会も、来月始め、木村さん*、六月に中江さんがお歸りになるので、残るのは鈴木氏、僕、及び今ニースに居る生嶋君だけになるので、一先ず解散して、又改めて日本で集まることになったのです。木村さん(「改造」に出される有名な文士)は六月始め日本へつかれます。

*既述した木村毅

白山会のメンバーも帰朝者が増えていく中、解散会が行われた。そして11月には鈴木良三も、帰国の途につく。

1930年11月13日付母和歌宛手紙：L-66

昨十二日、鈴木良三さん、日本へお出発になりました。白山丸で二ヶ年前、一緒にパリーへ入った方、昨夜はガールドリヨン*まで御見送りしましたが、なかなか賑やかでした。

*パリのリヨン駅

一方、パリで新しく出会った人々のうち、1929年8月以降、中西の書簡にその名が頻出するのが既出の画家、近藤七郎一家である。

1930年2月24日付父理吉宛手紙：L-4

先日、プーラレヌ*の近藤様のお宅でお雑煮の会にお招きを受け、大いに食べてお正月気分を満喫しました。その折、映寫器持参、杉並制作の「尾花咲く頃」二巻を御覧にいれました**大好評でした。マダムなぞ大変御満足で母上のお姿

を御覧になって「お目にかゝったやうで嬉しい」など、一家七人、お喜びでした。

*ブル＝ラ＝レーヌ Bourg-la-Reine パリ南部郊外にあるコミューンで、パリ中心部からも9キロほど **日本の家族と、撮影したフィルムを互いに送り合っている様子が窺える。

この近藤一家も、1930年11月末に帰国の途につくこととなるのだが、次の2つの書簡からは、近藤一家との交際の親密ぶりがよく分かる。

1930年11月18日付母和歌宛手紙：L-69

本日午後、近藤さん、及び奥様 ラン子さん三人でわざわざアトリエまでおいとまごひにお出でになりました。いよいよ二十五日午前十一時ガールドリヨン発、マルセイユ、及ニース一泊の上、二十八日の香取丸で日本へおかけです。パリ―マルセイユ間の汽車の切符の買入れ方のご依頼を受けましたので、お手伝ひすることにして、千フランお預りしました。明後日、お別れの宴を兼ね、前々より御約束の、ツール、ダルジャン(パリーで名高い鴨料理店)で夕飯を共にすることになりました。洋服に一寸困りましたが。

1930年11月24日付母和歌宛手紙：L-70

昨日の日曜は近藤氏の子供連れて一日 ルナ、パークで遊びました。今日は(十一月廿四日)、近藤氏としてはいよいよ終りのパリーの夜、夕飯後、ホテル、イエナにお訪ねし、近藤氏と二人で、カフェクーポールで、朝の二時まで話し込みました。実によいご夫婦(一中略)私は、来年の忘年会は マダムと三河屋でやることに御約束してあります。近藤さんがかへつたら、少しく、歸へりたくりました。

親しかった近藤一家の帰国に、中西は淋しさを禁じ得ない。なおこの後、帰国した近藤夫人からは、中西のもとに虎屋の羊羹が送られてくる。近藤の帰国時に、中西が気安く「日本へおかけりになったらヨーカンでも送って下さい」と言ったことに応えてのものであった(1931年6月11日付父理吉宛手紙：L-99)。

1930年の中西の書簡には、松岡という人物もよく登場する。この年の5月以降頻出し、荻野も一緒であることが多い。1930年5月5日の夜には、荻野とともに松岡のアトリエを訪問したり(1930年5月6日付母和歌宛手紙：L-20)、9月14日、トリエール滞在中の中西が一時パリのアトリエに戻った際、荻野、松岡とともに中西のアトリエでレコードを聴いたり(1930年9月16日付母和歌宛手紙：L-57)等している。中西は松岡について「松岡君は美校師範科出の人、可成親しくしております。実に温健(ママ)な人。」(1930年12月16日付母和歌宛手紙：L-76)と記している。1930(昭和5)年12月発行の『東京美術学校卒業生名簿』を見ると、図画師範科、大正9年3月の卒業生に「在佛國 松岡銀六」、また同名簿の在外卒業生の項に「松岡銀六 16 rue du

St. Gothard Paris XIV」の記載があるので、この人物だと思われる(註37)。また中西は、この松岡を介して、パリ在住の外国人たちとも交流をもった。

1930年12月16日付母和歌宛手紙：L-76

今日は十二月十六日(火)、夕飯を、松岡君と ^{ガスタオ}Gastao Worms 氏と三人で共にして、それから、ガスタオさんの自動車で音楽会へ行きました。此の人は南米生れでパリーへ画の勉強に来てゐる人、サロンにも二点出品してゐる、如く性質の温順な(全く西洋人に珍らしい位な)画描きです。

このGastão Worms(ガスタン・ウォルムズ：1905-1967)はブラジルの画家である。フランス系ブラジル人の母親も、やはり画家であった。1927年から1932年までパリに留学し、アカデミー・ド・ラ・グランド・ショミエールや、アカデミー・ジュリアンで学んだ。帰国後は、1951年の第1回サンパウロ・ビエンナーレにも出品している。

1930年12月28日には、中西、ウォルムズ、松岡の3人で、トリエールまでドライブに出かけており、その様子をイラスト入りの手紙で伝えている(図M-28)。

1930年12月28日付母和歌宛手紙：L-79

今日は日曜日、珍しい快晴、私のアトリエのお向ふの室には一ヶ月振りで美しい太陽が輝いてゐます。で私達は郊外へドライブすることにしました。→ 此處にウォルムズさんの物凄く立派な?ガタガタ自動車があります。此車で我々はとうとう、トリエールまで行って来ました。あのレストラン、パスカル(お魚を釣った)に乗りつけてお茶をのんでかへりましたが、主人公ビックリしてゐましたヨ。四時間もパリー郊外を遊び歩いて、そのガソリン代金、九フラン(七十銭)でまだ油があるので、夕飯を喰べに行くのに、レストランまで此の車で行きました。イヤハヤ、西洋人のお友達も出来て、大分、パリーの生活も面白くなりました。

ウォルムズは、翌1931年3月17日付の手紙(L-88)にも登場し、この前日の夜(3月16日)、中西のアトリエで、荻野、山内たちとともにレコードを聴いて、楽しく過ごしている。

また中西は、松岡の紹介で、二人のポーランド人とも親しくなっている。

1930年12月23日付母和歌宛手紙：L-78

昨夜は松岡君の紹介で知り合いになったポーランドのマドモアゼルとムツシューが訪ねて見えたので、遅くまで、アトリエでレコード等かけて遊びました。二人共、パリーへ七寶のやうな技術を習ひにきてゐる人、一体にヨーロッパでは小さい國のの方が人間がよいやうです。パターベビーを見せたら、大喜びでした。

この時おそらく松岡はおらず、中西一人がポーランド人たちと過ごしたようだ。フランスに来て2年半、中西の交際範囲が、かなり広がっている様子がわかる。

こうした日本人以外の友人達との交友は、翌1931年になるとさらに広がり、フランス人の結婚式に招待される等もしている。下記のように、結婚式では「親しい友人だけ7人」の中に、日本人の中西が含まれていることを考えると、中西はパリで知り合った外国人たちともかなり濃密な交友関係を構築していたようだ。

1931年7月7日付母和歌宛手紙：L-110

木曜日には、あるフランス人の結婚のお祝ひに招待されました。正式ではありませんから、私も、花でも持って出かけるつもりです。こう云ふ集りでは必ずダンスが付きものですが、これも幸ひ、先月末、モデルに教はつて、覚つかないながら歩けるので、まア、一つ出かけて見ましょう。

1931年7月9日付母和歌宛手紙：L-111

今日は午後から、結婚のお祝ひに行きました。モンパルナスの一流の花屋で立派なバラ(二十輪)を銀の箱に入れて、タキシーを172 rue de Ve[……]*のマダム、サブリの家に飛ばしました。お嫁さんは伊太利人、そしてポルトガル人の技師さんと結婚したのです。お祝ひの文句なんて、僕にうまく、いへる訳がありません。いゝ加減にして、七人で(親しい友人だけ)食事を共にしました。そして例に依ってダンス、毛唐は大人でも随分、思ひ切ってはしやぐものです。愉快的な半日でした。

* Veniseかと思われるが判読不能

5日後、7月14日のパリ祭は、このメンバーと楽しんだようで、「此の連中と七月十四日のお祭りには大いに踊りました。気軽な面白い人達です」(1931年7月20日付母和歌宛手紙：L-113)と記している。

中西はまた、偶然出会った日本人画家仲間とともに過ごすこともあった。

1930年11月16日付母和歌宛手紙：L-67(図M-29)

十一月十六日(日曜) 昨夜土曜なので、珍しく出會った二科の海老原、吉井と三人、シルクジベールを見に行き、終ってからカフエークーポールで、話しが面白くなって到々夜明しで語り合い、タキシーでアトリエへかへったのが、朝の六時、で起きたのが午後一時、(以下略)

ここに登場する二科の海老原、吉井とは、海老原喜之助と吉井淳二である。海老原は1923年に渡仏(34年帰国)、以後もしばしばフランスを訪れている。吉井は、東京美術学校で中西の二年後輩にあたり、卒業後の1929年に渡仏、32年に帰国し

た。海老原と吉井は、ともに鹿児島出身で中学の同級生でもあり、生涯にわたって親交を結んでいるので、パリ滞在時も二人はしばしば行動をともにしていたのであろう。また、シルク・ディヴェール(Cirque d'hiver:冬のサーカスという意)は、建築家ジャック・イトルフが設計し、1852年に完成した20角形の建物で、直径41メートル、2000人が収容できるという。19世紀末、有名なヴィクトル・フランコーニにより運営されていた時代には、ロートレックやスーラが、このサーカスの様子を作品に描いた。現在も冬はサーカス興行、その他の時期はコンサートやショーなどが行われている。中西はパリ11区にあるこの建物を、作品にも描いている(図C-21)。

中西の書簡ではまた、東京美術学校の先輩で、1929年から32年までフランスに滞在していた田口省吾(1897-1943)の息子の死(1931年)にも触れられている。田口は評論家、田口掬汀(1875-1943)の息子で、作家の高井有一(1932-2016)が省吾の息子であることはよく知られている。パリで亡くなった息子は、高井有一の兄にあたる。

1931年4月26日付母和歌宛手紙：L-91

田口さん(荻野君と一緒に船で来た)の赤ちゃんがなくなりました。昨日の朝、一寸、田口君のアトリエを訪ねた所、まるで魂の抜けてしまった人のやうな田口夫妻からそのことを聞いて、どう慰さめてよいのやら、途方に暮れました。生れて八ヶ月、よい子でしたが可哀さうに急性肺炎で、日本も知らず、死んでしまったのです。

このように、滞仏中の中西の交友は、書簡で述べられているだけでも、東京美術学校の同窓生をはじめとする美校関係者、白山会の仲間たち、そこから広がっていった友人たち、あるいは中西自ら関係を築いた人たち等、実に多岐にわたっている。1930年~1931年の書簡には、これまで触れた人物たちのほか、作家の片山敏彦(1898-1961)、島崎藤村の次男で画家の島崎鶏二(1907-1944)、作曲家でピアニストの高木東六(1904-2006)も登場している。高木はこの当時、パリのスコラ・カントルム(1894年に設立された私立音楽学校。エリック・サティ等も輩出)で学んでいた。

1930年7月14日付母和歌宛手紙：L-38

以前 桃園に住んでおられた片山敏彦さんに時々支那料理店にてお目にかゝります。

1931年4月18日付母和歌宛手紙：L-90

同封の寫眞は此の前の日曜日*にムードンへ遊びに行った時、撮りましたものです。新調の洋服を着た私の姿です。(1)は島崎鶏二君、(島崎藤村氏の二番目の息、お讀みになった藤村の「嵐」の中に出て来る主要人物)と島崎君のモデル、及び私、(2)は島崎君と高木君(ピアニスト)と私、私だけののは

焼増して後より送ります。

*4月12日(日)

1931年4月26日付母和歌宛手紙：L-91

ピアニストの高木君がマドモアゼルと遊びに来るので朝から、上の荻野の所から鍋や茶碗を借りるやら、肉や葱やお菓子を買い出しに出かけるやら獨りで大騒ぎしました。中飯を例の如く、モンパルのクーポールまで出かけて食べて、アトリエにかへり一息つく所へ高木先生やってきました。間もなく、マドモアゼルも来て、面白く、半日を過しました。マドモアゼル二人は姉妹で、日本の所謂、職業婦人。(一中略一)レコード聴いたり、拙たなダンス踊ったり、そして夕飯には、スキ焼の眞似事して、御馳走したのですがお世辞か、「オイシイオイシイ」って喰べて呉れました。お隣のスペインの画描き先生、驚いたでしょう。モデル以外女なぞ来たことのない私のアトリエから、賑やかな声がもれたのですから。

1931年6月24日付母和歌宛絵はがき：P-216

今夜、島崎君(藤村の息子さん)パリーを発たれます。

1931年6月28日付母和歌宛手紙：L-107

明日は高木が、ピアノを弾くのできゝに行きます

ところで、パリの在仏邦人たちは、スポーツイベント等で日本人選手がフランスにやって来ると、歓迎会を催し、応援参加者を募って皆で出かけたようだ。中西も有名選手が出場する際など、応援に行っている。

1930年8月23日付母和歌宛手紙：L-51

八月廿二日(金)午後八時より日本人倶楽部で、来巴された日本学生体育聯盟代表選手の歓迎会が催されました。会する者六十餘名、在佛邦人代表の祝辞、選手監督の謝辞に始り、久し振りの日本食にいずれも大元氣となり、快談縦横、宴なかばにして世界記録保持者、日本の国宝、織田君*は立って、いちいち選手諸君を紹介されました。(一中略一)戦ひはいよいよ明廿四日、午後三時よりです。愛国心を多分に持つ、血の氣の多い日本人我々一同は、パリー市の大型乗合自動車二台を貸切り、華々しく、應援に乗り出します。

*1928年アムステルダム五輪、三段跳びで日本人として初めて金メダルを獲得した織田幹雄

1930年8月26日付母和歌宛手紙：L-52

去る廿四日の日本、対フランスの陸上競技、残念ながら日本が負けました。なににせよ、ヨーロッパ各国を轉戦して来た後とて、選手も疲労しており、それに学生許り——若い人は十九才ときゝます——のことゝて、止むを得ません。

1930年9月21日付母和歌宛手紙：L-61

九月廿一日(日曜) 日本女子代表選手が、パリーの代表選手とスタッツ*エリザベスで戦ふ日です。(一中略一)軽い食事をカフェーですませて、美校の和田先生をお訪ねしました。之れは先生から誘って呉れとの御注文があったので。先生御夫妻、私とでポルトオルレアン(競技場)についたのが二時世分、フランスと日本の国旗がひるがへつてゐます。中へ入ると、モウ日本の女子選手は練習を始めてゐました。名高い大選手、人見絹代さんは直ぐそれと分りましたが後の人々は未だ女学校二三年、先ず十七八の年頃の人許り、あまり小さいので驚きました。(一中略一)僅か七点の差で日本の負けとなりました。

*stade 仏語でスタジアム、競技場

上記は一部を抜粋したもののだが、中西はこれに加えて選手の様子や試合の得点など、事細かに手紙で報告しており、興味深いものがある。

3) 日本の友へ

中西は渡仏後も、何かと蒼原会の仲間達のことを気遣っている。蒼原会は中西が中心となって作った会であると同時に、その仲間たちには働きながら水彩画に取り組む者も多かった。東京美術学校を卒業した中西は、彼らの中ではいわばエリート的な存在でもあり、会の動向をいつも気にかけていた。既述のように、1929年8月26日には、第4回蒼原会展に出品するため、フランスから3点の作品を送っている。

次の手紙には、そんな彼らのために中西がワインを送った時の様子が書かれている。

1930年2月24日付父理吉宛手紙：L-4

葡萄酒をわざわざお父上が幹事の所へお届け下さったのは実に申訳御座居ません。つまらないものを送った為、飛んだ親不孝を致してしまったやうです。ハガキで蒼原会幹事宛、「ブドウ酒ついた。とりに来い」と云っていただければ若いものがたくさんおるので、受取りに参ったものを。

またこの年10月に開催された第5回蒼原会展を見た家族からの手紙に対し、次のように返信する中西からは、蒼原会への思いの深さが伝わってくる。

1930年11月17日付母和歌宛手紙：L-68

いつもいつも御変りなくお元氣で、文房堂の蒼原会の展覧会御覧になりましたさうでなにより結構です。(一中略一)蒼原会もますます盛んだヨーと小山より便りあり、私と小山と富田と三人でこしらへた、私の名づけた蒼原会がモウ十年近くもつゞきますことは嬉しいことです。(一中略一)近い内、蒼

原会のために、なにかフランスの繪の月刊雑誌でも豫約してやりましょう。お許可を願ひます。小山も富田もエラクになりましたネ。

さらに次の手紙からは、蒼原会をともに作った小山良修や富田通雄と固い友情で結ばれていたことが窺える。

1931年3月17日付母和歌宛手紙：L-88

パリーに生活すると、人間と云ふ動物のアラユル面をそのまま、見ることが出来ます。小山君や富田君見たいな、心を打ちあけて話し合へるなんて友人はパリーにはありませんヨ。恐らく世の中にあんまりないでしょう。よい友人を二人 日本に持って来て幸せです。

一方中西の滞欧中、中野の中西家では、四谷の地所にある中西のアトリエを、中野の自宅へ移転する計画が進められる。移転にあたって中西は、いろいろと注文をつけると同時に、移転後の利用については母の助言もあり、自分がパリにいる間、蒼原会の集まりに利用してもらうことにする。

1930年5月26日付弟幸三郎宛手紙：L-26

アトリエの移轉すみましたら、周囲に樹でも植へて、外から見えぬやうにしておいて下さい。窓は北向きでよいでしょう。南に、必要があったら開けますから。

1930年5月26日付母和歌宛手紙：L-27

アトリエのことも幸ひうまく形がついて何よりでした。何時かは動かさねばならぬのですし、何時まで塩町*の地所の邪魔をしては申訳ありませんから。アトリエの後ろ向きの方は塩町にある時は下見板になってゐませんでした。郊外では見ともないですから、四方共全部下見板にして、色は白か如く薄い灰色位にしておいて下さい(—中略—)アトリエの利用、之れはよい所にお気がつかれました。どうぞ若い人々のむつまじい集りの為に使用して下さい。小山博士**をお招きして、課外講話でもうけたまわるのも結構でしょう。

*四谷塩町 **小山良修は医師でもあった。

このアトリエ移転は6月半ば頃には終わったようで、7月8日付の手紙で、中西は「アトリエ完成致しましたさうで、色々有難う御座居ました。」(1930年7月8日付母和歌宛手紙：L-35)と感謝している。なお、このアトリエ(図M-37)は、第2次大戦中強制疎開のため壊されてしまう。中西は戦後アトリエの再建をおこなうが、完成を見ずに、1948年10月6日、肝臓癌のため死去した。壁の上塗りもまだ仕上がっていないアトリエで、中西の葬儀が行われた。なおこのアトリエにはその後、1952年、十和田国立公園功労者顕彰記念碑の裸婦像(《乙女の像》として知られる)制作のために高村光太郎が移り住んだ。光太郎は自

炊生活をしながら翌1953年に像を完成させたが、肺結核のため1956年、このアトリエで死去している。

4) パリでの食生活、トラブルなど・・・

クラマール時代の中西は、はじめのうちこそ自炊をしたのであろうが、結局、一般家庭の下宿に移っている。パリに来てからは、自炊もしたが、カフェやレストランを利用することが多かったようだ。

ここでは中西の食生活をみていくが、まず、自炊について触れているものからいくつか紹介してみたい。

1930年3月17日付母和歌宛手紙：L-7

料理の本、つきました。で早速カツレツをこしらへて早速大失敗しました。ラードであげるのを、フライ鍋で焼いたからたまりません。メリケン粉の黒焼が出来上り、アトリエは煙りでモウモウと、以后注意しましょう。

1930年7月16日付母和歌宛手紙：L-39

珍らしく自炊をやる気になり、米を買ったり、肉や野菜を仕入れたり、可成活動して、只今、いささか珍妙な夕飯を終った所です。私のやる自炊は、よほど注意して仕込まないと、レストランより高價についてしまいます。

1930年7月31日付母和歌宛手紙：L-42

今、自炊して、妙な夕飯を済めた所、馬鈴薯を煮ることだけは、大分上達しました。御飯は時々、こがします。しかし一人で食べる一人者の食事位、面白くもおかしくもないものはありますまい。

1930年8月5日付母和歌宛手紙：L-44

夜は荻野君のアトリエでスキ焼をしました。僕は肉を買ひ、荻野君はネギと米とブドー酒。我々の買物姿、御想像下さい。アノ、キッチンとした好男子の荻野君、平気でネギの袋をかへてパリーを歩きます。御飯は僕がとても上手にたきました。ロクデモないことが上達しました。御飯たきや肉切りや馬鈴薯の皮むきなど。

1931年3月3日付母和歌宛手紙：L-84

今日は、久しぶりでアトリエでスキ焼して夕飯をすませました。御飯は実に見事に炊けるやうに上達しました。

自炊を重ねるにつれ、中西の料理が上達している様子が分かる。また、この「スキ焼」は中西が比較的よく手がけた料理のひとつであったようで、友人たちが遊びに訪れた際にも、スキ焼をふるまっている。(たとえば既出の高木東六とフランス人姉妹の来訪時など[1931年4月26日付母和歌宛手紙：L-91])

ところで「スキ焼」をするには、醤油など、日本の食材が必要であることは言うまでもないが、この当時、マドレーヌ寺院の近くに、日本の食材を売る店があったという。例えば仏文学者の河盛好蔵は、パリに留学した1928年頃のことについて、「当時はマドレーヌ寺院の近くに僅かばかりの商品を並べている店があるきりであった。私たちはそこでソース瓶に入った醤油を買ってきて、どんな料理にもそれをかけて食べた。格段においしくなるからであった」（註38）と記しているが、この店について、中西も手紙で触れている。

1931年3月1日付母和歌宛手紙：L-83

例のマドレーヌの店へ行ったら、大分目新しいものが見つかりました。一寸、興をそへて書きますと、△赤味噌一罐 十六フラン、△福神漬一罐 十一フラン、△葡萄豆一罐 九フラン、こんな奴がパリまで来てみたには驚きました。△[…]養志るこ 九フラン（一中略）△米 約二升 十フラン、△葡萄酒、カフェー、砂糖、馬鈴薯、ねぎ、等々……で先ず之だけあれば十日間のアトリエ籠城に、大丈夫、

河盛が記した頃から3年たち、中西が「大分目新しいもの」と書いているように、かなり食材が豊富になっている様子が窺える。

一方、いわゆるモンパルナスを生活の拠点としていた中西は、この界隈のカフェやレストランにも足繁く通った。中西の書簡に頻出するのはモンパルナスの老舗カフェのひとつラ・クーポール（1930年11月24日付母和歌宛手紙：L-70ほか）だが、同じく老舗カフェのラ・ロンドも登場している（1930年8月17日付絵はがき：P-136）し、ル・セレクトで書いた手紙もある（1930年11月18日付母和歌宛手紙：L-69）。レストランではサン・ジェルマン・デュプレのレストラン・デュヴァルの名も、書簡に散見する。しかしここでは、中西が通った日本料理のレストランについて触れておきたい。今でこそ、世界各地に日本料理のレストランはあるが、中西がパリに滞在していた頃は、まだまだ少なかった。ちなみに中華料理店について中西は、「パリには支那料理店が七八軒あり、皆、相当流行って居ります」（1930年5月6日付母和歌宛手紙：L-20）と述べているが、日本料理店については、その半分ほどであった。上述の河盛は、「私が最初にパリに行った昭和3年頃には、日本料理店は「常盤」と「富士」と「日本人クラブ」の3軒に増えていたが、まもなく「牡丹屋」というのができた」（註39）と述べている。

中西の書簡で触れられているのは、これらのうちの「日本人倶楽部」、「常盤」、「牡丹屋」の3件である。

1930年4月15日付手紙：L-13

日本人倶楽部に行けばいつでもヨーカンにお茶で日本の新聞を見られますし、時々支那飯も喰って元気をつけてみます。

日本人倶楽部（日本人会）は、エトワール凱旋門に近い、パリ17区、デバルカデール通り7番地（7 rue du Débarcadère）にあり、地下に食堂を備え、ここを会場に展覧会なども開催され、在留邦人たちが集っていた。既述した和田季雄の送別会を兼ねたパリ上社会（1931年4月30日）や、日本学生体育聯盟代表選手の歓迎会（1930年8月22日）等も、ここで開かれている。

次の常盤は、既出のロンドン、デンマークストリートの常盤の支店で、日本人倶楽部同様、エトワール凱旋門近く、シャルグラン通り（Rue Chalgrin）にあった（註40）。料理はなかなか美味しかったのであろう、中西は、しばしばここに足を運んでいる。

1930年4月21日付母和歌宛手紙：L-14

二人*共疲れて、夕食はエトワール近くの日本料理店常盤で久しぶりオイシイ日本食に舌鼓を打ちました。刺身、吸物、蒲焼、スタ、等、なかなか外国とは思へぬ位、美味しく感じました。

*中西と中江大部

1930年11月16日付母和歌宛手紙：L-67（図M-29）

夕飯は又、例によって常盤へ出かけました。素晴らしいまぐろが入りましたと云ふ主人の話に刺身を注文して見るとこれは又、全くパリーぢや珍しいまぐろ、でお刺身をお代りする始末、西洋人がまぐろの刺身を目当てに、こゝに来るには一寸、驚かされます。日本酒をチビリチビリやってゐますヨ。マダム同伴で。日本の新聞など見て、八時にアトリエへかへりました。チョイチョイ行くので常盤では、早く行くと、御飯前にお茶とお菓子を出します。私の甘黨をどこで知ったのか。

1930年12月23日付母和歌宛手紙：L-78

私のお正月、元日は、午に常盤へ出かけて、お雑煮を祝はうと思っております。先夜、常盤へ出かけましたら、主人が大自慢で正月料理の献立を述べたてました。なるほど正式に全部揃ってゐます。四十五^{フラン}法。

これらの中西の記述から、常盤では、かなり本格的で美味しい日本料理が出されていたことが判る。また、在留邦人のみならず、フランス人等も刺身を目当てに訪れていたことは、興味深い。

中西の書簡で1931年以降に登場するのが、牡丹屋である。牡丹屋は、この当時は、トロカデロ庭園近くのヴィヌーズ通り30番地（30 rue Vineuse）にあった。後に、同じ16区のモザール通り124番地（124 avenue Mozart）に移る（註41）。

1931年6月14日付母和歌宛手紙：L-100

伊太利より歸って以来、一ヶ月がまんしておったので すっ

かり日本食にうえて、甚だ意地きたない話ですが 日本の御飯ばかり、パリーで食べております。日本人には矢張り、米の飯に限ります。トロカデロの近くの日本料理店ボタン屋で、おうなの井にお吸物、此奴は眞底、骨身にこたへて、うまいと思ひました。喰物の話で恐れいります。

1931年6月16日付父理吉宛手紙：L-101

今日は午後、アトリエで仕事して、猛烈に空腹になりましたので、御夕飯に牡丹屋へ行ってスキ焼を喰べました。

このほか、ユニークなものとしては、ロシアン・レストランで、スイカを食べたエピソードがあるので、紹介しておこう。

1930年8月5日付母和歌宛手紙：L-44

夏の景物、おいしい西瓜、先日、モンパルナスの露西亜のレストランで出ておったので久し振りに味ひました。フランス語でパステーク*と申しました。しかし、西瓜は浴衣がけで、打水した涼しい夕方の庭を見ながら喰べるのに限ります。西洋人と一諸(ママ)にフォークやナイフを使って、コソコソやるのでは一向においしくありません。

* pastèque

中西の滞欧生活は、比較的順調なものであったといえるが、多少のトラブルには遭遇している。小磯からアトリエを引き継ぐ際のトラブルについては、すでに紹介したが、中西自身のミスで身分証明書の書換えが遅れたために罰金を支払ったり、また健康面では、歯痛のために歯医者に通ったりもしているのだ。

1930年6月26日付母和歌宛手紙：L-32

昨日は、秋間(日本人の案内人)を連れて、カルト、チダンチテ*の書換え(外国人の身許証明書)に行った所、僕の考へ違いか、少し書換えに来る時期が遅れて、罰金共、二百二十フラン拂はせられたのは、一寸痛事でした。

* carte d'identité

1930年7月11日付母和歌宛手紙：L-37

御承知の如く生来の悪い歯、二年の間、まア、無事に過ぎて来ましたが、トウトウ故障を生じてフランスの歯科醫の世話にならねばならなくなりました。

1930年7月15日付母和歌宛絵はがき：P-135

七月十五日、午前、102 rue de la Tourの歯科醫に行ってきました。心配することはないそうで、電気で焼いて呉れモウ二度程通へばよいそうです。どうぞ御心配ないように。

1930年8月13日付弟幸三郎宛手紙：L-46

歯の方も、パリーでは先ず相当な醫者に見せましたが、幸い

大したことでないやうで、此の所、様子を見ております。心配性の母が又、取越苦勞すると困りますから、貴方から心配せぬやうお傳へ下さい。

このほか、大使館の完全な人違いにより、マダム・ヴェルダン・ベッカーなる人物に対する債務の件で、在仏日本大使館庶務係からの呼出状が中西のもとへ届いたこともあったが(1930年10月10日付父理吉・母和歌宛手紙：L-64)、その後の書簡でこの件は一切触れられておらず、大使館側の完全な間違いということで、事なきを得たものと思われる。

Ⅶ 帰国の年 = 1931年

1) 南仏滞在からパリへ

1931年最初の書簡は、1月20日付けの南仏、ヴィルフランシュ=シュール=メールからの絵はがきにはじまる。このはがきは、南仏とイタリアを1ヶ月ずつ回る旅を計画した中西が、滞在中の南仏から出したものである(註42)。中西は、1929年1月に南イタリアのアマルフィで写生した際の「その空気に描く気持がピッタリ一致した」体験をもう一度味わいたいと、イタリア再訪を強く望むようになり、1930年7月頃より書簡に幾度もその思いを書いていた(註43)。イタリアを再訪して制作することを、ある意味で留学の集大成と位置づけ、そのための特別旅費の送金を両親に依頼、「特別支出一千円」の許可を得る。そして、「軍用金出来た以上、最後の奮闘をトスカナ、ウンブリアの平野に試み」(1930年11月24日付母和歌宛手紙：L-70)するため、1月15日夜(か16日)にパリを発ち、まずは南フランスまでやってきたのであった(註44)。

1931年1月20日付絵はがき(封書で3枚送付)：P-161～P-163

(P-161, 図M-30①②)一月二十日、ニースの宿を引きはらって、ここへ移りました。昨夜、マントンから荻野氏がニースへ来たので、二人で朝、車をVillefranche^{ビルフランシュ}へ飛ばしました。パンシオン、ケルマリアが私の当分の住居です。日本人も五六人来てゐます。皆画描き。

(P-162) 安い方の小さな室がないので二人室を三食附四十五フランできめました。アマリ、おいしくもないパンシオンの晝飯を二人で喰べて、二人でニースまで海岸沿ひに歩きました。(一里半位) 材料等求め、もう一晩泊まって、明日、マントンへかへる荻野君と別れ、一人でビルフランシュにかへりました。

(P-163) 止宿人は全部で十七人許り、内日本人四人。おかみも女中もなかなか気持よくもてなします。明日から商賣始めましょう。

このように中西は、パリを発ってまずニースに滞在後、近郊のヴィルフランシュ=シュル=メールへ移った。また同じ頃南仏マントンに滞在していた荻野とも、ニースやヴィルフランシュで一緒に過ごしている。中西は、ヴィルフランシュではまず上記の「パンション・ケルマリア」を宿にしたが、2月11日付けでヴィルフランシュから出した手紙には、滞在先が「Pension Nouvelle(パンション・ヌーヴェル)」と記されているので、この間に宿を変えたようだ。ヴィルフランシュから出された手紙は他に2通のこざれているが、いずれもパンション・ヌーヴェルからなので、以後は宿を変えていない。この南仏滞在は中西にとって予想以上の出費となったようで、南仏からイタリアへ入る当初の予定を変更し、一旦パリに戻ることにする。

1931年2月11日付母和歌宛手紙：L-80

今あるヴィルフランシュから伊太利亜までなら如く近いので之から直ぐ廻ればよいのですが、一人で二ヶ月以上の旅は可成疲れ(気疲れ)ますし、軍用金もいさゝか心細くなりましたので二月二十五日に一先ず、パリーの古巣に舞い戻りました。(一中略)南仏へ来て一ヶ月、金がかかったので驚きました。実に、外国人にうまく金をつかわせるやうに出来てゐるのです。佛国政府の収入になる滞在税、一日一人約二十銭、ニースにはあらゆるパリーの真似がしてあります。よく考へたものです。

いささか懐が寒くなってきたとはいうものの、ヴィルフランシュでの日々は、中西にとって愉快なものになったようだ。1月20日付の絵はがき(P-161～P-163)で、日本人画家が5,6人滞在していると述べているが、中西は彼らと楽しく過ごしたり、二年前に訪れたヴァンスを再訪したりしている。また滞在中、弟幸三郎にモンテカルロの絵はがきを封書で送っているので、日付は明らかではないものの、モンテカルロにも足を延ばした。

1931年2月15日付母和歌宛手紙：L-81

ビルフランシュの生活は頗る面白いものになりました。なにしろ血気な若者が七人それに、隣りに、三人も居るので、盛んなものです。時々一同、町の運動場へ集って、ベースボールをやる。全く、日本と変わりません。その代りフランス語は一向に上達しません。(一中略)寫眞はマントンにて、山口君(美校洋画三年下の人)と私

この山口君というのは、山口薫のことである。1930年11月にパリにやってきた山口はこの頃、東京美術学校の同級生たちとヴィルフランシュ=シュル=メールに滞在しており、彼らは中西と一緒に行動することもしばしばあったのだろう。4日前の2月11日付の手紙(L-80)には、「同宿の清水君(美校にて三年下の人)、風邪をこぢらせて、熱が下らず今朝、ニースの病

院に自動車入院しました」という記述もあり、清水啓三も一緒にいたことが分かる。このほか、同じく山口と同級の矢橋六郎もいた(註45)。

山口薫は、中西の書簡に、これより2ヶ月前にも登場しており(1930年12月23日付母和歌宛手紙：L-78)、そこには「明夜は山口君とクリスマス料理でも食べにいきましょう。」と記されている。中西と美校同級の山口長男は、1930年11月末にマルセイユから帰国の途についているので(1931年1月横浜着)、12月23日にはすでにフランスにはいないため、この山口君は、山口薫であると考えられる。

1931年2月20日付絵はがき：P-168

二月二十日、同宿の七人でサン、トロッペまで一日の清遊を試みました。美しい小港です。

1931年2月21日付母和歌宛手紙：L-82

本日、(二月二十一日)、二年前の二月に思い出深い三週間を過したVenceへ遊びに行つて見ました。嬉しいではありませんか。ホテル、レヂナの亭主もマダムも、よく覚えてゐて、大変な喜びやう、とうとう晝飯を御馳走になり、話し込んでかへりましたが、外国でもこんな珍らしいことがあるのです。軍用金いよいよ缺乏しかゝつたので二十五六日パリーへ戻ります。アトリエに千フラン、残してはありますが心細いので、此の手紙がついた時、まだ送金してありませんでしたら、電報為替で日佛*に送つて下さい。

*日仏銀行

この1ヶ月を超える南仏滞在の成果が、《モンテカルロ》(図C-22)、《ニースの庭》(図C-23)、《港(B)》(図C-24)といった作品群である。透明水彩と不透明水彩を併用した色彩研究に加え、モダンなフォルムなど、滞欧生活を通じて確立していった中西ならではの作風を見て取る事が出来る。その一方で、家族に送金を督促するなど、南仏での予想以上の出費は、中西を不安にさせたようだ。

2月25日、中西はパリへ戻った。「かへりの汽車、軍用金缺乏から、フランスへ来て始めて三等で十八時間もの長旅行して、よい経験」(1931年3月1日付母和歌宛手紙：L-83)もしている。

1931年3月1日付母和歌宛手紙：L-83

二月廿五日、薄日さずパリーへ無事戻りました。約四十日目です。思ったより暖かいので先ず安心、駅よりタキシーをモンパルナスのカフェ、クーポールに飛して久し振りにパリーのカフェ(コーヒーのこと)を味つて、生き返りました。(一中略)午後二時には電気会社まで呼出状を持って行って、三ヶ月分の電気料を支拂ふなど、なかなか急いことです。今度、始めて軍用金のとぼしいのに心細さを感じました。諸拂いを済ませて残つたのが、大枚六百フラン、之れだけ

で三月十日頃つく筈の奴を頼りに、暮さねばなりません。パリーについて全く始めての経験、しかしよい経験です。で先ず食料品を仕込みました。とてもレストラン等で好きなごたくを並べてみては、五日ももちますまい。自炊に限りますから。

こうして自炊を続けていたところへ、3月5日、日本からの送金通知を受け取り、中西は一息つくことが出来た。一方、制作に関しては、前年末から引き続いてグワッシュに力を入れている様子がうかがえる。

1931年3月1日付母和歌宛手紙：L-83

南佛での作から、グアツシュを二、三試みて見ました。一寸面白く行きさうですが、まだまだものにはなりません。

1931年3月5日付母和歌宛手紙(父宛手紙に同封)：L-85

仕事の方、先々順潮に進んでおります。この分ならかへるまでには、人に見せられる二十点位は出来さうです。

1931年3月17日付母和歌宛手紙：L-88

グアツシュを續けておりますが、マアマア水彩よりは見られるものが出来さうです。(一中略)今週はモデル使ってグアツシュの人物を試みておりますが、確かに水彩よりは面白いやうです。

4月に入り、中西は山内とともに、3日間のブルゴーニュ地方への小旅行に出かける。荻野と同船してパリへやってきた山内は、音楽好きの中西によって「スッカリ、レコード好きに仕込まれ、「月給の大部分をレコードに廻」す(1931年3月17日付母和歌宛手紙：L-88)までになる。中西は、親しく交際を続ける山内と、制作の合間、気分転換の小旅行を楽しんだ。

1931年4月5日付母和歌宛絵はがき：P-169

四月四日(土)、パック(復活祭)の休み、山内君と二人で、ブルゴーニュ地方に旅行してゐます。四日はディジョン泊り、此の地方の首都で人口八万余、このホテル*へ泊りました。今日(五日)は十二時の汽車でSemur**へ向ひます。六日夜、パリーへ戻る予定。

*ホテル la Clocheの絵はがき。このホテルは歴史ある5つ星ホテルとして現在も営業中(Grand Hôtel la Cloche Dijon) **Semur-en-Auxois スミュール=アン=ノーソワ ディジョンから北西に約50キロの歴史ある町。

2) 帰国船の決定。そしてイタリアへ

旅行から戻ると、中西は9月17日出帆の靖国丸で帰国することを決定する。靖国丸は1930年に竣工した新しい船で、中西はよりよい設備の新造船で帰ることを希望していた。しかし

この決定までには、少しでも長くパリにいたいという思いとの葛藤があった。中西は前年末、靖国丸で1931年の9月末頃フランスを発ち、11月に帰国することを検討していると家族に伝えたものの(1930年12月3日付母和歌宛手紙：L-74)、日本郵船の新たなタイムテーブルでは、靖国丸のマルセイユ出港日が9月30日から、9月17日に早まってしまう。そこで、帰国船は、靖国丸ではなく、11月26日出帆の照国丸(1930年竣工。こちらも新造船)でもよいかという手紙を家族に送っていたのだった(1931年3月13日付母和歌宛手紙：L-87)。しかしおそらく、家族からの一日も早く帰って欲しいと書かれた手紙を読み、9月17日出帆の靖国丸で帰国すると書き送る。

1931年4月18日付母和歌宛手紙：L-90

お手紙、読んで直に、マルセイユ出帆を九月十七日の靖国丸と定めました。モウモウ決して変更なぞ致しません。どうぞ御安心願ひます。早速、パリーの郵船代理店へ船室を申し込みましょう。御心配かけましたことは御詫申します。

1931年4月30日(5月1日朝)付母和歌宛手紙：L-92

本日午後、約束の如く、船室豫約金二百円、銀行より出して、郵船代理店に参りました。新船は乗り手が多いとのことでしたが、事実で、まだ五ヶ月も前なのに、中央寄りのよい室は、ほとんど予約済みには驚きました。私の室は三百十六号のB、(Bですから寝台は下)少々感心しない小さな方の二人室ですが、(一中略)新船は二等も一等のやうに二人部屋です。私の部屋の位置は、ほとんど、来た時の白山丸のと同じ位、船尾に近い所です。

帰国船を決定した後、中西はいよいよ、熱望していたイタリア再訪の旅へと出かけた。これまで同様、中西はほぼ毎日のように、旅先から絵はがきや手紙を送っており、旅の様子は手に取るように分かる。

1931年5月7日付母和歌宛手紙：L-93

永らくの懸案であった伊太利旅行、いよいよ来週日曜日(五月十一日)発つことになりました。本日、切符も求め、軍用金も伊太利貨に変へました。切符は二等、パリー、フローレンス往復(往きはモダーン*越へ、歸へりはサンゴツタード**経由)二ヶ月有効にて九百二十フラン、日本の汽車賃に比べますと頗るお高いものです。

*Modane モダーヌ:フランス・イタリア国境の町 **サン=ゴツタルド(伊語)、ザンクト・ゴットハルト(独語)、スイスにあるアルプスの峠

1931年5月10日付母和歌宛手紙：L-94

いよいよ明日、伊太利亜の旅に出ます。午後十時五十分、ガールドリヨン発、モダンの山峡より伊太利に入り、ピサ着、午後十一時四十分、実に二十五時間、ブツ續けて乗る譯です。

1931年5月12日付母和歌宛絵はがき：P-170

只今、伊佛国境の駅、モダンにて、昨夜、パリ一発、アツクスレバン*で夜明け、車窓より、こんな山がたくさん見えます。これから伊太利へ入ります。

* Aix-les-Bains エクス=レ=バン

1931年5月13日付母和歌宛絵はがき：P-171(図M-31①②)

五月十三日、美しく晴れた、初夏らしい朝、デュオモ*の芝には露がキラキラしてました。白大理石の寺は青空をバックに静かにたっています。落ちついた気持で伊太利の古い寺々を見て歩く楽しさ——でその Bon Souvenir のために

*ピサ大聖堂

1931年5月13日付母和歌宛絵はがき：P-172

ピサを午後一時三十五分に出る汽車は可成混みましたが、でも立たなくてすみました。(一中略一)懐しい花の聖母寺、メヂチの都、二年前を回想したり、私の心は躍ります。三時半着、ホテルの車で宿へ。Hotel Porta Rossa*、市の中央で出歩くのに都合がよい家です。

*ホテル・ポルタ・ロッサ 現在も5つ星ホテルNH Collection Firenze Porta Rossa として営業中

中西はフィレンツェ滞在中、このホテルを拠点に近郊の町を訪ね、制作を続けた。

1931年5月14日付母和歌宛絵はがき：P-174

昨夜お湯に入って、十時まで寝坊しました。二十五時間の汽車旅行の疲れもすっかり、とれました。伊太利晴れの良い天気、道具を持って、本寺前から七番の電車*でフィエソロ**へ。山の上の景色のよい所、一杯描いて、今カフェで一休みしてあります。

*この当時、フィレンツェの街なかを走っていたトラムのことと思われる。「本寺前」とは大聖堂前のことであろう。 **フィエゾレ

1931年5月15日付父理吉宛絵はがき：P-175

今日は東の方の郊外Settignano*へ出かけました。本寺から九番の電車で四十分程、昨日行ったフィエソロが遠くに見える小高い丘の町、日本人の顔は私が始めてかも知れません。

*セッティニャーノ

1931年5月16日付父理吉宛手紙：L-95

フローレンスに参って、もう四日になります。毎日、元気で郊外へ描きに出かけます。二年前来た時は、三人連れだったのに、外国生活に練れていなかったためか、疲れやすく、落ちつきがありませんでしたが、今度は年功を積んで度胸も出来たので、少しも不自由しません。伊太利語は「一二三」と「有難う」位しか知らないくせに。昨年グラチャーのローマの日本美術

展*以来、日本人の受けは頗るよく日本人であることが判ると、なかなかお世辞をつかひます。(一中略一)明日は日曜日、仕事を休んで、二年振り、ウフィチ画廊にポッチチェリの傑作を見に行くのを楽しんでおります。午後はピッチ宮殿の有名なボボリの庭でも見ましょう。そして月曜日は、午前九時の汽車でアツシへ発ちます。

*1930年にローマで開催された日本美術展覧会。大倉財閥の大倉喜七郎の全面支援のもと、横山大観、菱田春草、下村観山、川合玉堂、竹内栖鳳ら、当時の日本画壇を代表する画家たち80名の作品が展示された。

1931年5月20日付母和歌・弟幸三郎宛絵はがき：P-176(図C-45①②)

アツシの三日目*、朝から雨、午前、二階の隅の窓が二つある明るい室に引移る。先年のホテル、スパシボ**と違って、此の家は日本人を大に優待する。

*20日で3日目ということは、5月16日付の手紙通り、5月18日にはアツシに移ったようだ。 **おそらくアツシの老舗ホテルスパシオ(Hotel Subasio)と思われる。

1931年5月24日付母和歌宛絵はがき：P-177

五月二十四日、アツシに来て、もう今日は六日になります。毎日、大いに孤軍奮闘しましたが、なかなか思ふにまかせません。しかし、フローレンスの洗礼堂の扉一枚に実に二十七年間、苦心して仕上げたギベルデー*のことを考へると我々凡才が二年や三年の洋行で、一仕事しやうなぞ考へるのは間違ひ マア、身体でも丈夫にして、大いにやりましょう。

*フィレンツェのサンタ=マリア=デル=フィオーレ大聖堂附属のサン=ジョヴァンニ洗礼堂の扉「天国の門」を27年間かけて仕上げたロレンツォ・ギベルティのこと

1931年5月27日付父理吉宛手紙：L-96

二十五日午後、Assisi発、同夜八時三十分、再度フローレンスに参りました。今度は二ヶ年前、小磯、古家と三人で一週間世話になったパンシヨネ、Crociniに宿をとりました。此の家の人々は日本人に特に、厚意をもってゐて、実に心持よく世話をしてくれます。二ヶ年前、同ぢこの家で私が腹を悪くした時、コンニャクを熱くして、手拭いで巻いて持ってきてくれたことを覚えております。アルノ河に面した明るい、よい一人室を僕のために用意しておいてくれました。(一中略一)加治木中佐*とフィレンツェで會ふ約束があるので、六月五六日頃までここにおることになりましょう。(一中略一)六月十日より八月二十日まで、アトリエにたてこもり、最後の一戦を試みるつもりです。

*加治木中佐については、本書p.30(1931年5月10日付手紙：L-94の註)を参照されたい。

1931年6月2日付母和歌宛絵はがき：P-179

今日は六月二日、明日は汽車でピストイヤへ寫生、四日に加治木中佐に會つて、五日か六日に、パリーへ向けて発ちます。

1931年6月6日付母和歌宛絵はがき：P-180

五月三十一日(日)、フィレンツェで欧州女子競技が開催されまして、私も午後、見に参つた所、偶然寫眞屋に撮られて、そのエハガキが町に出ておりましたので送ります。(一中略一)日本の人見の人気は、ここでも大したもの。今日は六月六日、加治木氏と午後フィレンツェを發つて、今夜は景色の良いコモの湖畔で一泊、明日はスイスへ入ります。

1ヶ月近く、フィレンツェとアッシジを中心に「最後の奮闘をトスカナ、ウンブリアの平野に試み」(1930年11月24日付母和歌宛手紙：L-70)た中西。その成果は、《アッシジ(A)》(図C-25)《アッシジ(B)》(図C-26)《伊太利亜の春》(図C-27)のような作品として結実する。「伊太利の美しい五月、フィレンツェやアッシジで仕事のできたことは私の滞歐中の最も楽しい想ひ出となつて残つた。」「繪具はニューマン、紙はファブリアノ、場所は伊太利、季節は五月、といくつもの條件がピタリと揃つて私は我を忘れて美しい風景の中で好きな水繪を描くことが出来た。」(前掲「水繪 技法と随想」pp.320-321)と、このイタリア滞在について、中西は後日このように述べている。

6月6日フィレンツェを發つてフランスへの帰路、中西は、イタリアからスイスまでの旅程を加治木と同行するのだが、この間、ホテルや停車駅から、1日に何通も家族宛に絵はがきを送っている。6月6日コモに1泊後、翌7日から6月9日の夜パリに戻るまでの3日間に書いた父宛、母宛、弟宛の風光明媚な絵はがきは、今日のこっているものだけで32通にのぼる(「中西利雄滞歐書簡リスト」本書pp.65-71)。いくら筆まめな中西とはいへ、この数は普通ではない。中西は後日、「アノ旅行中、加治木氏と二人競争で書いたのがあのスキス便りです」(1931年7月15日付父理吉宛手紙：L-112)と書いている。その内容は、旅程のことから、景色に感動したこと、現地の歴史のエピソードなど多岐にわたり、家族それぞれにほぼ同じ文面を出しているものもある。これらの絵はがきの中から、ここでは、中西の動向が明確に分かるものを抽出して紹介する。

1931年6月7日消印父理吉宛絵はがき：P-181

六月六日、午後四時フィレンツェ發、ポロニア、ミラノを経て午後十一時二十分、伊太利北部の景勝、コモ(Como)着、湖畔のホテル、ボルタ投宿、加治木氏と御同行しましたので、お風呂附のよい室、一浴して、よく休みました。(一中略一)窓から美しいコモ湖を見ながら、朝食、午前散歩、今カフェーへ一休みして、これを書きます。

1931年6月7日付父理吉宛絵はがき：P-186

六月七日(日曜) 午後、一時二十三分、伊太利コモ湖畔發、キアツ*よりスキスに入り、ルガノの勝景、サン、ゴツタードのトンネル、ウィリアム、テルの古跡等、美しいスイスの風物に夢のやうな五時間を過して、春雨煙るルセルン**に午後六時半着、オテル、ディアナに投宿しました。

*キアツ。イタリアとの国境にあるスイスの町 **ルツェルン

1931年6月8日付母和歌宛絵はがき：P-199

インターラーケンで乗換へて、スイスの首府ベルンに午後七時半着、駅の近くのホテル、ウィルドマン*(山男ホテルと訳しましょうか)投宿、スイスのホテルはどこでも実に清潔で近代的で、とてもとてもフランス等の比ではありません。夕飯後、町を一廻りしましたが、設備満点、世界の公園の町の名をはづかしめません。ドイツが近いのでビールが素敵にうまいこと。

*ヴィルデンマン(Wilden Mann)

1931年6月9日付母和歌宛絵はがき：P-210

三日間の印象深きスイスの旅も今日で終わりました。ベルン一時半發、Olten*で加治木氏とお別れて**、三時半、スイスとフランスの国境に近いBasel***でパリー行に乗換へ。バーゼルまで来ると懐しいフランス語が一ヶ月振りて耳にひびきました。

*オルテン。オルテン駅は、チューリッヒ、ベルン、バーゼル、ルツェルンから、現在列車で30分以内の位置にある。 **同日付父理吉宛の絵はがきで、加治木はチューリッヒへ向かうことが触れられている。

***バーゼル

中西は、6月9日の夜パリに到着した。旅は無事に終了したものの、最後にパリでちょっとしたトラブルに見まわれるのだが、その様子を2枚の絵はがきに綴っている。

1931年6月9日付母和歌宛絵はがき：P-213

とうとうパリーへかへりつきました。六月九日、午後十一時二十五分、パリー、ガールドレスト*着。時間がおそいので、門番を起すのも気の毒と思って、駅前ホテルを赤帽に命じた所、荷物を持ちこんだこのホテルは、頗る怪しげな、御二人連れ専用らしい代物、それ故、馬鹿馬鹿しく高い。

*東駅

1931年6月9日付母和歌宛絵はがき：P-214

とうとう一番勝手をよく知ってゐるパリーで馬鹿な目に會ひました。こんなキタナイ部屋が四十フランだなんて人を馬鹿にしてゐます。

3) 滞欧生活最後の日々

6月10日、1ヶ月ぶりに自分のアトリエに戻った中西は、これまでの滞欧生活を振り返るとともに、両親への感謝と、今後の残り少ない日々における決意表明を、次のように書き送る。

1931年6月10日付母和歌宛の手紙：L-98

六月十日、午前十時、一ヶ月振りでアトリエに戻りました。下のコンシエルヂュから、手紙やその他一ヶ月分の郵便物を貰って、三十日目にアトリエの扉をあけました。ホコリ臭く、キタナイけれど、矢張り私のアトリエです。なんだか安心しました。そして一通り、掃除してから先ず、母上よりのお手紙七通を拝見致しました。(一中略一)三十歳前後に、ともかく世界の本場を踏んで、本ものの画を見、そして伊太利に二度、画の筋道を尋ね、四ヶ年*の歳月を海外に暮すことの出来た幸せを、父さんや貴方にどれだけ私は感謝してよいか、わかりません。唯、不肖の私、どれだけ、之の御恩がへしが出来るやら、—— 只今アトリエで三、四、月に出来たグアッシュを見てあります。画描きはパリーを去ってはならぬと、シミジミ感じました。パリーこそ、若い画描きの道場です。そこには、世界各国の名人、奇手が集ってありますもの。(一中略一)サア、私は一人でアト三ヶ月、私の大好きナ、エルネストクレソン私のアトリエに立てこもりましょう。そして、貴方にお見せる私の画の完成を急そがねばなりません。

*足かけ4年という意味であろう。

さらに翌11日、14日と、たたみかけるように、自身の思いを書き連ねている。

1931年6月11日付父理吉宛手紙：L-99

今日、伊太利から持ちかへった画を出して見ました。そして、一つ、さとしたことがあります。それは、アンナニ、頑張つて、描いて来た画が、パリーのアトリエで描いた画に、どうしても及ばないと云ふことです。それは、伊太利で出来た画は上手には仕上がってあります。が、なんとなく、野暮臭くて、ものたりなくて…… 黙って、アト三ヶ月、アトリエに立て籠りましょう。パリーの画は不思議なものをもってあるやうです。(一中略一)アト、敷へて見ると僅か、三ヶ月と五日(マルセイユ出帆の日まで)、正味は二ヶ月もありますまい。落ちついて勉強出来る日数は、でもやります。二枚でも三枚でも、よい画が欲しいです。ほんとうに心から。弱い意志に鞭打って、仕事しましょう。私は私の弱点をよく知っています。もっと、強くならなければならぬと思ひます。ほんの僅かもってある、長所をもっと、育てなければなりません。

1931年6月14日付母和歌宛手紙：L-100

明日は日曜日、アト十二週間、一つ、終りの頑張りを始めましょう。油繪ぢや、外に上手な人が日本にもゐますから私は私で、グアツシュと水彩でゆかうと思ひます。四十号大(三尺に二尺五寸)のカルトンを用意したのですが、之れが、うまくいって呉れるとよいと願ってゐるのですが。額縁に入ると随分と大きなものになります。伊太利の作品も、まア相当地でしたが、パリーのアトリエのに比べると、どうも味がありません。今の私には、普通の巧さ——にはあまり感興をひかれません。其の点、パリーにゐる画描き共は、実際一人一人が不思議な普通でないうまさ、——を持ってゐてエライと思ひます。個性の現はれ——とでも云ひましようか。

9月17日の靖国丸マルセイユ出港まで3ヶ月、実際に落ちて着いて制作できるのは正味2ヶ月と考え、制作に打ち込む中西。また6月14日付けの手紙からはあらためて、「グアツシュと水彩でゆかう」という決意も見て取れる。こうして制作を続ける中西のもとに、6月23日、日本郵船の事情で、帰国船の靖国丸と箱根丸との日程が入れ替わり、箱根丸が9月18日発、靖国丸が10月1日発になったという連絡が入る。少しでも長くパリにいたいと考えていた中西にとって、これはある意味朗報でもあった。中西は、船の変更はせず、10月1日マルセイユ発の靖国丸で帰ること、神戸着は11月4日になること、そして「今度の変更は私の勝手ではなく、罪は日本郵船にあるのですから、どうぞそのお積りで。」(1931年6月23日付両親宛手紙：L-104)と書き送った。そして引き続きアトリエでの人物画制作や、戸外でのスケッチを続けていくが、その滞欧生活最後の制作ぶりを追ってみよう。

1931年7月7日付母和歌宛手紙：L-110

幸ひ私も至極元気で、今日なぞ、半年振りでスエーデンのモデルのお嬢さんがアトリエに来ましたが、随分、肥って色が黒くなったなぞと驚いておった位、先々、丈夫で勉強出来るのはなによりと喜んでおります。このモデル、眞面目な女で、パリーのモデルとしては珍らしい人、今、大きな人物のグアツシュをやっております。

1931年7月20日付母和歌宛手紙：L-113

今日は日曜日、久し振りでセーヌ河岸へ寫生に参りました。パリーに暮してゐるくせに、パリー市中の画はありませんので、出かけて見ました。ボン、サンミツシエルで八番の電車を降りると、アノ美しいノートルダムドパリーが直ぐ目に入ります。伊太利で随分、古い美しい寺を見て来ましたがこんな立派な寺は、あまり数多くあるものではありません。くすんだ壁と青々した樹木が実に美しい対照をなしてゐます。寺を一巡りしてゐると鐘が鳴り出しました。そして、その音は、二ヶ月前のアツシ、の一週間を懐しく想ひ出させま

した。オテルドビュウ*を主題にしてセーヌの景色を水彩で一枚仕上げてかへりました。

*オテル・ド・ヴィルHôtel de Ville = 市庁舎

帰国が近づくとつれ、中西は日本の展覧会の様子を気にかけてはじめる一方、中西が間もなく帰国することを知った日本の友人たちからは、滞欧作を展示したいという知らせが中西のもとに寄せられるようになる。

1931年2月15日付母和歌宛手紙：L-81

本日、上社会の目録入手仕りました。盛んなものですね。在佛会員では荻野、高野、加山、顔*、小堀、と私の六人が出品してゐません。つまり、あの外に六人あるのですから盛んなものです。来年は私も二十点位、水彩を並べて見ましょう。日本水彩画会と光風会 御覧下さい。目録をお願いします。
*顔水龍(イエン・シュイロン)(1903-1997)は台湾出身。

1931年6月16日付父理吉宛手紙：L-101

六月一日出の日本水彩展目録在中の御便り本日到着、有難く拝見仕りました。友人達がなかなか元気で出品してゐるのを知って愉快でした。不破君*なかなか大きなものを出してゐるさうで、勉強家ですし、眞面目ですから、よい画が出来るでしょう。小山君や富田君はいかがです。伊太利から、あまり無沙汰してゐるので日本水彩展事務所宛で皆さんにハガキ出して置きました。来年から私も仲間入りをするわけです。
*不破章は結成間もない東京三脚会(後の蒼原会)に参加し、以後活動を続ける。日本水彩画会、光風会、帝展等にも出品、戦後は日本水彩画会理事長となり、日展でも活躍した。

1931年6月28日付母和歌宛手紙：L-107

昨日、不破君から可成長い手紙が来ました。それによると日本水彩画会は来年、僕のために特別室をこしらへて、私の画を列べるのださうですが、こんな話きくと、画のことが気になります。アト三ヶ月、一大決心をせねばなりません。(一中略)どうしても、相当の力作を四十点(一室分)持ってかへらねばなりません。そこが画描きのつらい所です。

1931年7月9日付母和歌宛手紙：L-111

上社会と日本水彩画会の友人の双方から滞欧作の特別陳列は、私の会で是非——なんて手紙が来る度に、画の数も多少考へて置かねばならず、出来は勿論大切なことですし、誠に画描きつらい商売だと思ひました。日本にかへたら、十一月月中旬から春まで当分、アトリエにたてこもって、制作をしなければなりません。

ある程度まとまった数の滞欧作の力作を揃えなければと、中西は覚悟を新たにしているが、次の7月23日付母和歌宛手紙

からは、中西の滞欧生活の成果が凝縮されたような、一つの自信に満ちた思いを見ることが出来る。

1931年7月23日付母和歌宛手紙：L-114

いよいよかへる日も近くなりました。自分の仕事をふりかへて見て、頗る不満足を感じ、情なく思ひますが、又、日本へかへつて、桃園のアトリエで一人で——ではない貴方の傍で、——画を勉強することを希望にして、勇気をつけて、国へかへりましょう。でも一つの慰めは、画とはどんなものかと云ふことが、判ったことです。三年の間パリは勿論、ヨーロッパ中をめぐる、数多くの名作を見ました。之からは無駄なまよひ方はしないと思っております。

制作に打ち込む合間を縫い、中西は6月24日、帰国することになった加治木とフランスでの最後の時を過ごしている。既述のように加治木は、中西がイタリアからの帰途、スイスの旅に同道した人物である。

1931年6月24日付母和歌宛絵はがき：P-216

加治木氏とパリより汽車で一時間程の郊外モウ*の町へ参りました。川沿ひの一寸した田舎町、寫真で知っておる美しい寺**があります。(一中略)久し振りで見るフランスの田舎もなかなかよいものです。

*Meaux モー **サン=ティエンヌ大聖堂

中西は、加治木と昼間モーに遊んだ後、夜は、加治木が宿泊しているホテル(ANSONIA HOTEL)を訪ね、スイスの旅の思い出話等をして楽しく過ごし、加治木が中西のために用意してくれたこのホテルの部屋に宿泊した。翌25日、アメリカ経由で帰国する加治木をパリの北駅まで見送っている。(1931年6月24日付母和歌宛手紙：L-105、および1931年6月25日付母和歌宛手紙：L-106)

また、友人たちと、野球をして楽しむ時間もあつたようだ。

1931年8月9日付母和歌宛手紙：L-115

昨日は日曜日*、友人達十二三人集つて、ボード、ブローニュ**の中の美しい草原でベースボールをやって半日遊び暮しました。關東、關西に別れて戦つたのですが、二十二対二十で關東組の勝、終つて、日本人倶楽部にて夕飯を共にし、雑談に時の移るのも忘れませんでした。

*なお、1931年8月9日は日曜日なので、8月9日付けの手紙で「昨日は日曜日」というのは、つじつまが合わない。「8月9日付」なら「昨日は土曜日」、「昨日は日曜日」なら「8月10日付」ということになる。この手紙の消印は、8月11日であり、また「日曜日だから皆で集まって野球をした」と考える方が自然であることから、手紙はおそらく「8月10日」に書かれたものであろう。 **Bois de Boulogne ブローニュの森。パリ16区にある森林公園で、パリの中心からは西へ5キロほど。

8月17日、中西は三度目となるノルマンディー地方への旅

に出る。滞欧中のスケッチ旅行としては、おそらくこれが最後のものとなる。この旅では絵はがき5枚がのこされているが、その都度出されたものではなく、裏面にちょっとした文章が書かれ、まとめて封書で送られたものである。これらのうち4枚がルーアン、1枚がフェカンのもので、中西がこの旅で、ほかにどこを訪れたかは不明であるが、8月24日付母和歌宛手紙(L-116)で「二十二日(土)夜に、一週間のノルマンデー地方の旅を終へてパリーに戻りました」と記しているの、6日間の旅であったことは分かっている。また、この旅で中西が送った絵はがきは、本来はもっと多かったと考えられる。

1931年8月17日/19日付絵はがき(封書で送付): P-217~P-221

(P-217)八月十七日パリーを発ってノルマンデーへ小さな旅をしました。其の印象、——第一日のルアンで 名高い古時計(P-219)第一日のホテル、ルアン、オテル ドラ ポスト 第一流、チト身分不相應の感あり

(P-221)第三日はFécamp*へ、アマリ、シックでない海水浴場、でホテルも安い。パンション、一人五十五フラン。

*フェカン

中西は、最初のノルマンディー旅行(1929年7月)で、ル・アーヴル、トゥルーヴィル、オンフルールを回り、2度目の旅行(1930年3月~4月)では、ディエップを訪れているので、今回は、ルーアンやフェカン等、これまで訪れなかったところへ行っただけと思われる。この時の成果の一つに《ルーアンの河岸》(図C-28)がある。中西はルーアンを、ノートルダム大聖堂を擁する古都としてではなく、河港都市としての姿で描いている。

上述のノルマンディーの旅から戻ったことを記した手紙で、中西は次のように続けている。

1931年8月24日付母和歌宛手紙:L-116

最早、パリー生活も餘す所、僅か三十日、今週より、ソロソロ荷物の整理を始める積りです。荷造り、運送一切を或る運送屋にまかせる方が、一人でゴタゴタ荷造りするよりよいと思っております。御金、到着致しました。有難う御座居ます。今週中に船の切符の残額 七千フラン*拂ひ込んでしまひましょう。

*ちなみに中西はすでに内金2千フランを払い込んでいる。中西が乗る靖国丸二等のマルセイユから横浜までの料金は9千フランである(1931年5月27日付手紙:L-96)。これを既述の1フラン=約8錢、1円=現在約2千円で計算してみると、144万円になる。

さらに続けて、この手紙到着後の返信は、もうパリで読むことは出来ないため、「日本行き靖国丸の乗船客 中西利雄」宛てで、9月5日から10日に出す手紙はマルセイユに、それ以降の手紙は香港に出すよう、家族に頼んでいる。また、懸案だったアトリエの後継者も、無事に決まる。

1931年8月31日付母和歌宛手紙:L-117

幸ひ、アトリエの後継者も見つかりまして、本日、差配の所へ出かけて、話をすませて参りました。権利金は半分にして、千百フラン*、森君から拂ってもらふことにしました。まア、これで、一先ず型はつきました。今週の金曜日に運送屋が私の荷物の量を見にきます。来週はマルセイユに向けて送り出さねばなりません。切符も求めましょう。

*アトリエの権利金は、次の借り手が前の借り手に支払うことが習わしとなっていたようで、中西も小磯良平からアトリエを引き継ぐ際、二千フランを小磯に支払っている(1931年5月27日付父宛の手紙:L-96)。中西がアトリエを引き払う時には、権利金は二千二百フランに値上げされていたが、中西は、森が支払う権利金を半額にして、残りは自分で負担したようだ。

アトリエの後継者については、これまで複数の候補者の名が手紙で述べられてきたが、結局、それまで一度も名前が出てこなかった森芳雄(1908-1997)が引き継ぐことになった。森は1931年5月に渡仏、9月に中西からアトリエを引き継いだ後は、1933年の夏にパリ近郊のエピエリユ(Épiais-Rhus)に移るまで、このアトリエに住むこととなる。

こうして問題が無事解決した中西は、9月11日、再度ロンドンへ赴いた。

1931年9月11日付母和歌宛絵はがき:P-222

二年振りに再び英佛海峡を渡ってロンドンに来ました。今度はホンノ三四日、お名残りの美術館見物。宿も同ぢDenmark St. の常盤、こゝの日本料理はなかなか結構

1931年9月12日付母和歌宛絵はがき:P-224

部屋で英国風の朝飯を喰べて、早々、ナショナル、ギャラリーへ出かけました。(寫眞左の建築)、よく整理の出来た、世界屈指の大美術館、午後二時まで足の疲れも忘れて、見て廻りました。午後はアルバートミュージアムへ水繪の時代巡、陳列を見に行きます。

1931年9月12日付母和歌宛絵はがき:P-225(図C-46①②)

午後、雨の中をアルバートミュージアムに行きました。(一中略一)こゝには一八〇〇年から近代までの水彩画の年代順陳列があるのです。大いに得る所がありました。さすがは大英国、美術館博物館の充実してること。この絵はサー、ジョン、ミレーの描いた水彩画、作者の娘さんがモデル、明日はテートギャラリーへ行きます。

1931年9月14日付母和歌宛絵はがき:P-227

今日は午前テートギャラリー、午後ナショナルミュージアムへ行っただ(一中略一)明日はひるま、能率を挙げて、夜の汽車でパリーへかへります。明後日はクラマールのマダム、ベルジェ*にお別れの宴で呼ばれておりますので。

*中西が下宿をしていた家

「お名残の美術館見物」の後、中西は15日夜、ロンドンを発ち、16日午前、パリへ戻った。この前後の9月8日から22日までの日程を、中西は2枚の絵はがきに連ねて記し、家族へ送っており、この間の行動を明確に伝えている。実に忙しい毎日を送っていることが判る。

1931年9月22日付母和歌宛絵はがき(2枚続き)
(P-228)

九月八日より二十二日まで

- 八日より九日にかけて荷造り
- 九日、荷物を運送屋に渡す*
- 十一日、英国に行く。
- 十二、十三、十四、ロンドン滞在、
- 十五日夜、ロンドン発
- 十六日午前五時パリ着、

全日正午クラマル。マダムベルヂェーの家にお別れの食事、

- 十七日、上社会送別会
- 十八日、送別会**にてテツヤ(クーポール)
- 十九日アトリエの取引済む。

(P-229)

○二十二日、お金つきました。有難う御座居ました。そして今夜、この駅***カラ一寸、スイスへ行行って参ります。チェルマツツ****へ——唯マツターホルンを眺めてくるだけに。一たんパリーに戻ってマルセイユへたちます。

*後日書かれた(9月29日付)絵はがきでは「十日に荷造屋に渡す」とある。
同じく9月29日付絵はがきによれば、遊び仲間の送別会 *パリ・リヨン駅の絵はがきのため「この駅」としている。 ****ツェルマツ

9月22日の夜、中西はパリのリヨン駅からスイスへ向けて出発した。

1931年9月23日付母和歌宛絵はがき:P-230

フランスとスイスの国境で眼が覚めました。八時、ローザンヌ、(一中略)十時四十五分ビスプ*(この寫眞の所)乗換、あこがれのチェルマツツに行く汽車にのりました。車中にて
*Visp フィスプ

1931年9月23日付母和歌宛絵はがき:P-231

一生に一度は是非来て見たいと考えてゐたチェルマツツに来て、マツターホルンの気高い姿を仰いで満足しました。二十五日にパリーへ戻ります。

1931年9月24日付母和歌宛絵はがき(続きもの)

(P-232) 二十四日 午後はこの寫眞のやうな電車に乗ってGomergrat* まで登りました。三千百三十六メートル、こんな高い所に立派なホテルがあります。

(P-233) シーズンはずれの九月末のことゝて、誰れもいません。その誰れもないホテルの恐ろしく大きな立派なティー

ルームで僕一人、山を眺めながら御茶をのんで一寸愉快でした。

*ゴルナーグラート

23日、24日とツェルマツツに滞在し、マツターホルンの雄姿を眺めて25日にはパリへとんぼ返りした中西。これらスイスから出した絵はがきの次は、いよいよマルセイユからの書簡となる。

9月29日にマルセイユへ到着した中西は、再び「グランドホテル」(Le Grand Hôtel du Louvre et de la Paix)に泊まった。このホテルは、フランス到着時、そして荻野暎彦をマルセイユで迎えた際にも滞在した、中西お気に入りのホテルである。ここから3枚の絵はがきに続けて文章を綴り、封書で出したものが、次の滞欧中最後の絵はがきである。前半の内容は、9月22日付2枚続きで出した絵はがきとほぼ同じである。

1931年9月29日付絵はがき(封書で3枚送付)

(P-234) 九月二十九日、マルセイユ、グランドホテルにて利雄、ノ到々マルセイユへ着きました。此の十日以来、あまりの忙しさに御便り差し上げられませんでした。大体こんな工合に運んで。ノ九日、午後三時より翌十日、朝六時まで荷物の整理、ノ十日、荷造屋に渡す。(以下、9月22日付絵はがきと同内容のため略)

(P-235) 二十二日、正午日本よりの送金着、同夜、スキスへ向け出発ノ二十三日 二十四日 スイス チェルマツツ滞在ノ二十五日 スイスよりパリーへかへる。ノ二十六日、御土産物など。こんな工合で、少し慾ばりましたので可成忙しい思ひをしました。ノ荷送費、九百八十六フランノ運送費、七百フラン、ノ(パリー、マルセイユ)ノ客車積み荷物超過料六十二フランノ荷物は木箱五個、ノ鞆、四個、画道具等ノなかなかたくさんになりました。

(P-236) 昨夜、汽車がこんで寝ませんので可成疲れました。今、一風呂浴びて休んでおる所です。木箱五個がエアライ重量で(ホトント一噸近い)汽船の超過量が充分高價になりさうです。今日、明日はマルセイユで少し休みましょう。(一中略)元氣よく日本にかへれて、私も愉快です。明後日から又、一ヶ月以上の船旅が始まります。では又、船中にて

帰国時の中西の荷物は、相当な分量であることが判る。その中には、1931年3月3日付母和歌宛手紙(L-84)で「畫集が約五十冊、レコードが百枚、そして蓄音器と、この三つが難物です。」と書き送ったものも含まれていることだろう。またこの3月3日付の手紙では「五月頃からソロソロ荷物を郵船で送り始めますから、御手数ですが、お受けとり下さい。」「本は先きに送りましょう。海上保険をつける積りです。」とも書かれており、中西が先に日本へ送った分を考えると、滞欧生活中の荷物の総量は、推して知るべしである。

10月1日、靖国丸に乗船した中西は、早速家族宛に手紙を書いている。出帆の前に書かれた以下の手紙は、マルセイユから出された。

1931年10月1日付母和歌宛手紙：L-118

只今、靖国丸に乗り込みました。なかなか綺麗です。室の位置も悪くはありません。室附給仕は横沢と云ふ人、ナポリまでは三百十六号の室は私一人です。(一中略) 荷物があまり多くて、これにはほとんど閉口しました。マルセイユより横浜までの荷物の運賃が百五十円位かゝりさうです。大きな箱が五つ、一緒に積むと三メートルに五メートルもの量になります。部屋に持ち込んだ荷物が六個。あまり荷物が多くなりましたから、神戸でおりずに横浜まで行かうと思ひます。神戸淀泊は二日ですから、小磯や竹中と會ったり、奈良へでも行ってゐればすぐです。横浜へみんな来ていただきましょう。(一中略) 出帆は午後六時の予定。十月一日午後三時マルセイユ港 靖国丸にて

出帆したその夜、中西は靖国丸のメニューに、手紙を書いている(図M-32①②)。メニューはこの日のディナーのものだが、日光東照宮の陽明門があしらわれ、オードヴルからデザートまで、なかなか豪華な内容である。内側には日本郵船の航路が示され、折り込んで手紙として出せるような仕様になっているのも面白い。

1931年10月1日午後11時、地中海にて：L-119

午後五時三十分、マルセイユを出帆致しました。折悪くの雨、懐しいフランスの風景も雨に霧で、よく見えません。ノートルダムドガルト*が かすかに、それと判りました。三年半暮したフランスと別れる——妙に気が減りました。(一中略) 二等は日本人、私をいれて、たった二人(一中略) 新造船だけあって、よい設備です。第一、機関の振動が船室に傳はないので驚きました。船室はよいホテルと変りません。三等の立派なのにもおどろきました。三等には日本人が十人位おります。

*ノートル・ダム・ド・ラ・ギャルド聖堂、小高い丘の上にある。

1931年10月2日付母和歌宛手紙：L-120

昨夜夕飯後、私の室にスエズまで行く西洋人が移って来ました。(三等から) 幸ひ、この人はフランス語を話すので大いに助かりました。午後十一時頃から船がゆれだして、ベットに入ってから室中グラグラします。一万一千噸もある大きな船を房州通ひの小舟と同様に、ゆり動かす海の力に驚きました。(一中略) 十月二日、午前六時半にボーイがカフェーとトーストを持って来ます。海はすっかり静かになってゐます。八時朝食、フランス風と違ってなかなかの御馳走です。(一中略) 十二時夕食、三年振りでカレーライスを喰べて

うまいと思ひました。湖のなかを走るやうに静かな航海を續けております。(一中略) 本船からは八十銭で、電報がいつでも打てるさうです。必要の時は利用します。

この10月2日付の手紙が、現在ご遺族のもとにのこされている中西滞欧中の最後の手紙である。また、ご遺族のもとには、中西が航海中や帰国直後に打った電報ものこされている(図M-38)

「ヨキコウカイヲツヅクトシオ」10月14日中野局印

「ホンコンニムカフゲンキトシオ」10月24日中野局印

「コウベ ニテオリルヨテイーニチ」10月27日中野局印

「一ニチアサコウベチャクトシオ」10月31日中野局印

「アスヨル九ヂ ニ〇フンツバメニテアニトモニトウキヨウエキニツク」11月1日中野局印

「イマコウベハツツバメ六ゴウシャトシオコウザブロウ」11月2日中野局印

これらの電報から、中西は11月1日、神戸に着き、弟幸三郎が神戸で中西を迎え、特急燕で11月2日の夜、東京駅に着いたことが分かる。燕は、東京～神戸間を9時間で結んでいた。中西は、靖国丸から出した手紙(10月1日付：L-118)では、「神戸でおりずに横浜まで行かうと思ひます」と述べていたが、神戸の淀泊で2日間過ごすよりは、一日でも早く自宅へ帰ることにしたと思われる。こうして中西は、無事、帰宅したのである。

おわりに

これまで見て来たように、中西の書簡には、自身の制作に関することはもちろん、海外で触れた文化・芸術に対する感動、パリでの交友や日常生活の様子などが生き生きと語られている。これらは、中西利雄に関する資料として重要であるばかりでなく、当時の様子を伝える記録として、またそこに登場する様々な人物たち等にとっても、意味のある資料であるといえるだろう。

中西の3年間の留学生活は、特定の師についたり、美術学校へ通って学ぶ(モンパルナスのアカデミーには、不定期に通ったりはしたものの)というものではなかった。パリを中心にヨーロッパ各地を回り、数々の巨匠たちの作品に触れながら自身の作品、制作のあり方を問い直していくというものである。そして実はこれこそは、強い意志がなければ続かない、孤独な闘いでもあった。水彩画の限界を感じ思い悩む様子、パリのアトリエでの葛藤の日々を、書簡は赤裸々に伝えている。油彩画ばかりを制作していた時期も長く、時に水彩画への興味を失いそうになりながらも、水彩画を止めることはしなかった。

こうした試行錯誤の末、中西はデッサンの重要性を再認識す

るとともに、透明水彩に不透明水彩(グワッシュ)を加えた色彩、そしてモダンなフォルムという独自のスタイルを確立していく。この滞欧期の集大成ともいえる作品のひとつが《森のカフェ》1931年(図C-29)で、画面からは、パリ郊外のおしゃれで小粋なカフェの様子が生き生きと伝わってくる。デュフィを思わせる軽妙なタッチで多くの人物を描きながら、その構成や配色の妙など、これまでの日本の水彩画には見られなかった、中西が創出した独自の世界を見ることができる。

こうした成果をもって帰国した中西の眼に、当時の日本の水彩画は次のように映った。

誰れの描いた水繪も同じやうに見へ、且同じやうな鈍調さを呈してゐるのも不思議に思へてならなかつた。そして水繪の多くが、繪を一つの効果的な繪らしき畫面にまとめ上げることに急で、ほんとうに一つのを個性的に深く掘下げる誠實さに缺けて居ることやデッサンの眞の理解に到達して居る作品の甚だ少ないことが何にもまして痛感されたのである。(前掲『水繪 技法と随想』p.322)

翌1932年の第19回日本水彩画会展で中西の滞欧作27点が特別陳列されると(図M-39①②)、その近代感覚溢れる作品は多くの人々を魅了し、高い評価を得る。そしてその後も中西が、水彩画では難しいとされていた人物画に積極的に取り組むなど、水彩画の革新者として活躍していくことになるのは、周知の通りである。

(副参事兼企画課長)

本稿執筆にあたり、1997年の「没後50年 水彩画の革新者 中西利雄」展以来、機会あるごとに様々な資料を見せて下さり、多数のご教示を賜りました、中西利雄ご長男、中西利一郎氏に、心からの感謝の意を表します。

註

- 註1：『わが青春の上社会一昭和を生きた洋画家たち』展図録、豊田市美術館・神戸市立小磯記念美術館・中日新聞社、2020年
- 註2：なお、ご遺族のもとにのこされている同書の草稿によると、藤岡との同船は、偶然であったようだ。
- 註3：中西利雄「懐かしき船室」『蒼原』2、蒼原会、1940年11月、pp.15-16
- 註4：母和歌宛絵はがき(P-27)に、この住所の記載がある。(はがきに日付はなく、消印も潰れていて読めないが、昭和3年8月10日着の記載がある。7月20日付の絵はがき(P-26)が、8月7日に中西家に届いているので、この絵はがきは、1928年7月23日頃のものと思われる。)なお、註2でも触れた『水繪 技法と随想』の草稿によると、この部屋は友人たちによって用意されていたという。
- 註5：1928年当時のパリ在留邦人の数については、和田博文「パリ／フラ

ンス在留日本人数(1907～1940年)」、和田博文 他「パリ・日本人の心象地図 1867-1945」、藤原書店、2004年、p.11、芸術家の数については、和田博文「『巴里週報』とパリ在住日本人の動向」における“画家・彫刻家・音楽家・写真師”である日本人の数、石黒敬章・田中敦子・和田博文編『ライブラリー・日本人のフランス体験 第2巻 パリの日本語新聞一『巴里週報』II』、柏書房、2009年、pp.467-468、による。

- 註6：野口健司(1893-1950)は、薬剤師として病院勤務の傍ら絵画制作を行い、1925年頃蒼原会に入会して研鑽を重ねた。日本水彩画会展や光風会展などに出品、音楽好きで、中西とも仲が良かった。
- 註7：この絵はがきには日付がなく消印も見えないが、このホテルの住所が書かれていることから1928年7～8月頃のものであると特定できる。
- 註8：小磯良平「巴里と中西君」『中西利雄遺作展』図録、1953年、遺作集『中西利雄』、中西利雄遺作集頒布後援会、1953年に再所載。
- 註9：註2および註4でも触れた『水繪 技法と随想』の草稿には、「最初の一ヶ月を呆然と過した私は、静かな生活を望みつつ居をパリー西郊のクラマールに移した。そこに求めた獲た(ママ)新しい岡の中腹のアトリエも/のそのあまりの淋しさに堪へ難くて、ホテルの一室に移り、又アパートの二階に移り、數度居を轉じた末、クラマール広場に近き老人二人限りの静かな中流家庭の二階の一室にやっと落付く部屋を見出すことが出来た。」と、ベルジェ家の下宿に落ち着くまでの様子がかかれている。
- 註10：小磯良平 前掲「巴里と中西君」
- 註11：小磯の旅には、竹中郁が同行していることが多いのだが、このイタリア旅行中、中西の書簡に竹中が同行している様子は書かれていない。
- 註12：小磯良平「中西君のこと」『中西利雄展』図録、東京新聞、1979年
なお、小磯の言う「ブルーギット」は、ブルー・ガイド(仏語でギド・ブルー)のこと。
- 註13：実はこのはがきには日付がなく、切手が剥がされているため消印も見えない。しかし、次に出された12月13日消印、パドヴァの絵はがき(P-39)にある「今日午前ミラノをたつて」という記述およびこの絵はがきの「今日と明日はミラノ泊まり」という記述から、この絵はがきが書かれたのが12月11日(ミラノに泊まったのは12月11日、12日)で、パリを発ったのが12月10日であることが判る。
- 註14：江川佳秀「仏蘭西日本美術家協会の成立から解散まで—両大戦間のパリにおける日本人展の推移を概観しながら」『薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち』図録 1998-1999年、徳島県立美術館ほか pp.27-28
- 註15：前掲『薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち』図録 p.139
- 註16：Itoh, Keiko, *The Japanese Community in Pre-War Britain: From Integration to Disintegration*, Routledge, 2001, pp.67-68)。
- 註17：8月12日付弟幸三郎宛絵はがきの「旅から旅を一人で続ける時」および「八月にはブルターニュ地方の写生旅行に出て一ヶ月近く一人で歩き廻った」(『水繪 技法と随想』p.306)の記述から
- 註18：野田佳奈子「画家・近藤七郎の生涯」『美術の北大展』図録、北海道大学大学院文学研究科芸術学講座、北海道大学総合博物館、2014年。なお近藤七郎については、佐藤由美加「北海道美術の1920年代—大原美術館展IIによせて」『大原美術館展II』図録、北海道立近代美術館、2017年 を通じて、同氏からご教示いただいたことを付記しておく。
- 註19：廣田生馬「オリーブの画家・古家新」『古家新とゆかりの画家たち展』図録、神戸市立小磯記念美術館、2010年、pp.11-14 なお西村秀雄は、京都大学教授を務めた冶金学者。
- 註20：周(小山周次)「太鼓を叩く」『みづゑ』297、1929年11月、p.539
- 註21：Omoto, Keiko, *Van Gogh, pèlerinages japonais à Auvers, Études et présentation des livres d'or de Paul Gachet*, (尾本圭子「ファン・ゴッホ、日本人たちのオーヴェール巡礼 — ポール・

ガシェ家芳名録の研究と紹介)Paris, Musée Guimet, Moulin de Suillyzeau, Éditions Findakly, 2009 この芳名録は現在、ギメ美術館で所蔵されている。また2017～18年に北海道立近代美術館、東京都美術館、京都国立近代美術館で開催された「ゴッホ展 巡りゆく日本の夢」の第5章「日本人のファン・ゴッホ巡礼」は、このガシェ家の芳名録およびクレラー=ミューラー・コレクションのゴッホ展(1929年)の芳名録研究をもとに構成された。

註22: 尾本圭子 前掲書、p.135

註23: 尾本圭子 ‘Signataires des Livres d’or’、前掲書、pp.149-155

註24: 尾本圭子「ガシェ家芳名録の資料的意義について」『お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター研究年報』8、2012年3月31日、p.62

註25: 前掲「ゴッホ展 巡りゆく日本の夢」図録、p.156

註26: 「表1 クレラー=ミューラー本社でのファン・ゴッホ展(1929年)芳名録日本人署名者リスト」、園府寺司、コルネリア・ホンブルク、佐藤幸宏編『ファン・ゴッホ 巡りゆく日本の夢』青幻舎、2017年、p.264、なお、このリストには22名の名が掲載されているが、そのうち同一人物の署名が二つあるため、人数としては21名となるとのことである。

註27: 後小路雅弘「カンボジアのSUZUKIを探して」『アジア近代美術研究会 会報 するば』Vol.1、2016年5月1日、pp.9-11

註28: 「サロン・ドートンヌ日本人出品記録」『巴里憧憬—エコール・ド・パリと日本の画家たち』展図録、徳島県立近代美術館ほか、2006年付属CD-ROM所載

註29: 匠秀夫「中西利雄と水絵」『中西利雄展』図録、東京新聞、1979年ほか

註30: 「中西利雄展」1979年、東京新聞主催、小田急百貨店:3月2日-3月14日 および「中西利雄展 新しい水絵を求めて」1984年、呉市立美術館:8月31日-9月30日 ほか

註31: 中西は、1930年4月21日付母和歌宛手紙(L-14)で、「四月十五日、画室三ヶ月分千三十フラン(四、五、六月)拂いました。」と書いている。

註32: 註28に同じ。

註33: Thiébauld-Sisson, ‘LES SALONS DE 1930—LE SALON D’AUTOMNE—LA PEINTURE II’ *Le Temp*, 8 Nov. 1930

註34: 小磯良平 前掲「中西君のこと」 なお、「サール・プレイエル」Salle Pleyel については、本書p.28、1930年3月17日付母和歌宛手紙(L-7)の註を参照されたい。「サール・ガボオ」Salle Gaveauは、1907年にオープンしたコンサート・ホールで、パリ8区にあり、今日までクラシック音楽のコンサートが行われている。

註35: クラマール時代の書簡で音楽会の言及があるものは、1928年10月30日付手紙(L-1)で、シャンゼリゼ劇場における秋のシーズン開きのコンサートに行き、コルトーのピアノを聴いたことが述べられているものと、ほぼ同内容の記述がある1928年10月付弟幸三郎宛絵はがき(P-33)のみである。後者の絵はがきについては、日付がなく、消印から判断すると1928年か1929年のはがきであること、また日本への到着日から10月に書かれたものであることが分かるのだが、書かれているコンサートの内容が1928年10月30日付手紙(L-1)と同じであることから、1928年10月に書かれたはがきであることを特定した。

註36: 山田美佐子「パリの上社会—荻須高德の交流を中心に—」『わが青春の上社会』展図録、豊田市美術館、神戸市立小磯記念美術館、2020年、pp.49-51)

註37: 昭和5年の時点で、東京美術学校図画師範科の卒業生で「松岡」姓の者は、他に松岡圭三郎(大正8年3月卒業)と、松岡正雄(大正6年3月卒業)の2名がいるが、1930年当時のパリ在住者ということで考えると、松岡銀六以外考えられない。

註38: 河盛好蔵『巴里好日』文化出版局、1979年、p.35

註39: 河盛好蔵 前掲書p.90

註40: Itoh, Keiko, 前掲書p.67 および和田博文 他 前掲『パリ・日本人

の心象地図 1867-1945]p.162

註41: 和田博文 他 前掲『パリ・日本人の心象地図 1867-1945]p.128

註42: 「一月十五日頃、パリーを出発して、南佛に一ヶ月、伊太利に一ヶ月位、の旅をはぢめる予定です。」(1930年12月16日付母和歌宛手紙:L-76)とあり、当初は続けてまわる計画だった。

註43: 1930年7月14日付母和歌宛手紙:L-38、1930年8月2日付母和歌宛手紙:L-43、1930年8月16日付母和歌宛手紙L-48、1930年9月16日付母和歌宛手紙:L-57、1930年11月16日付母和歌宛手紙:L-67など

註44: パリを出発した日付について、手紙に明確には記されていないが、1930年12月23日付の手紙(L-78)で「一月十五日夜、パリー発、南佛、伊太利の写生旅行に出かけます」、12月28日付の手紙(L-79)で「十五日までアトリエで水彩とグアッシュを勉強します」、2月15日付の手紙(L-81)で「丁度明日でパリーを出て一ヶ月になります」と書いているので、パリ出発は1月15日の夜、もしくは16日と思われる。

註45: 杉山幸子編「年譜」株式会社東京美術倶楽部監修『山口薫全作品集』、求龍堂、2011年

カラー図版



C-1 《橋の在る風景》 1924年 第11回日本水彩画会展



C-2 《盛夏麗日風景》 1924年 第5回帝展



C-3 《風景》 1927年 第3回蒼原会展



C-4 《クラマールの並木道》 1929年



C-5 《田舎の並木道》 1930年



C-6 《アマルフィにて》 1929年 当館蔵



C-7 アマルフィで描いた1929年1月7日の年記がある作品



C-8 《雪景色(ヴァンス)》 1929年



C-9 古家新《残雪の丘(南フランス)》 1929年
神戸市立小磯記念美術館蔵



C-10 《雪の風景》 1929年 当館蔵



C-11 《カーニュ(南仏)にて》 1929年



C-12 《マルセイユ風景》(現場制作) 1929年 当館蔵



C-13 《波止場(マルセイユ)》 1929年 当館蔵



C-14 《トゥルーヴィル、船》 1929年
第22回サロン・ドートンヌ



C-15 《ムードンの丘》 1929年
第22回サロン・ドートンヌ



C-16 《トリエール・シュル・セーヌ》 1930年
第23回サロン・ドートンヌ 千葉県立美術館蔵



C-17 《トリエール風景》 1930年 第13回帝展 当館蔵



C-18 《トリエール風景》(現場制作) 1930年 当館蔵



C-19 《ロダンの家の見える風景(木立)》 1930年 第23回サロン・ドートンヌ



C-20 《黄色い首巻(人物)》 1930年 当館蔵



C-21 《シルク・ディヴェール》 1931年



C-22 《モンテカルロ》 1931年



C-23 《庭(ニースの庭)》 1931年



C-24 《港(B)》 1931年



C-25 《アッシジ(A)》 1931年



C-26 《アッシジ(B)》 1931年



C-27 《伊太利亜の春》 1931年



C-28 《ルーアンの河岸》 1931年



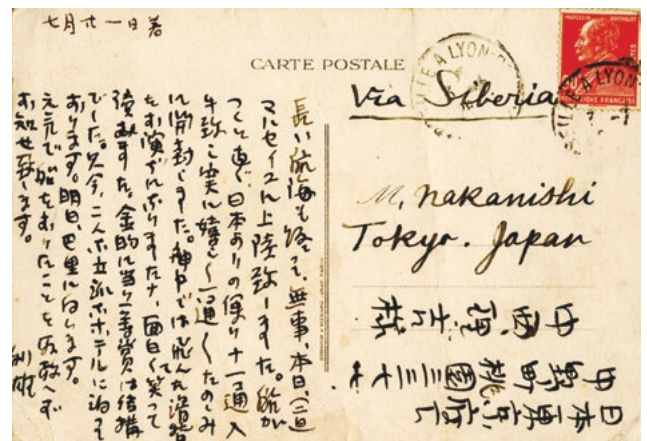
C-29 《森のカフェ》 1931年



C-30 《麦秋》 1946年



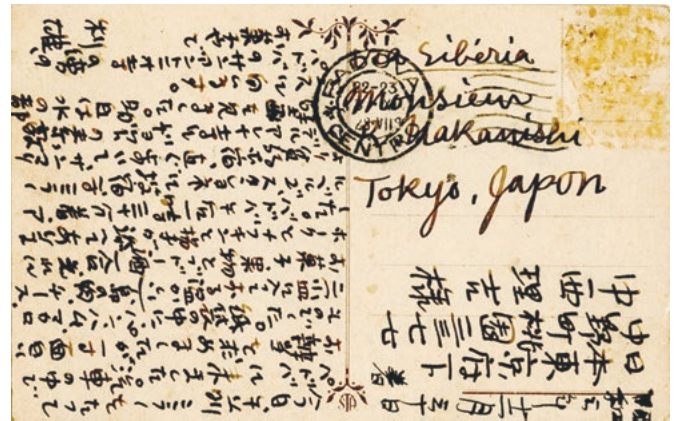
C-31① 1928年7月2日 マルセイユ(表) [P-22]



C-31② 1928年7月2日 マルセイユ(裏) [P-22]



C-32① 1928年12月13日 パドヴァ(表) 【P-39】



C-32② 1928年12月13日 パドヴァ(裏) 【P-39】



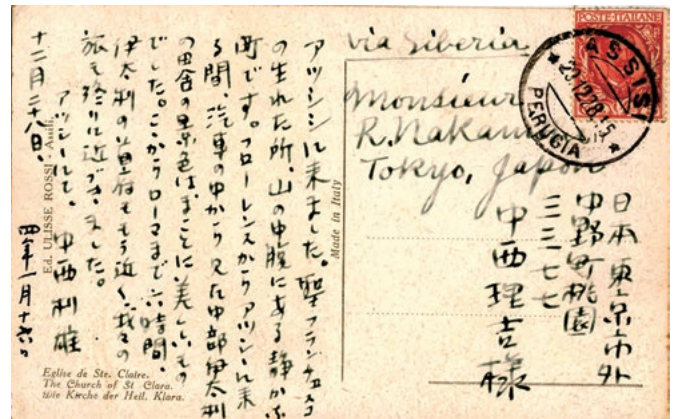
C-33① 1928年12月14日 ヴェネツィア(表) 【P-40】



C-33② 1928年12月14日 ヴェネツィア(裏) 【P-40】



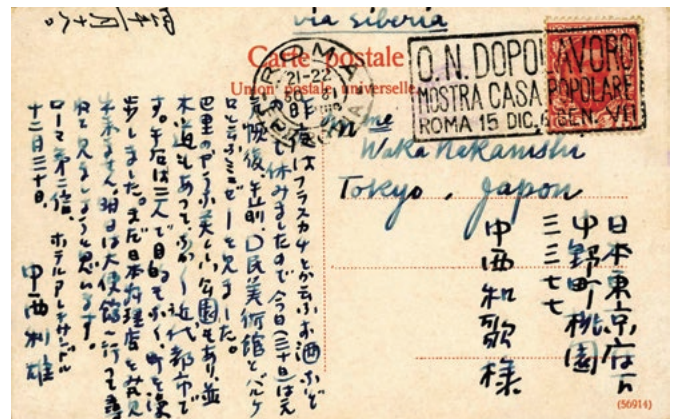
C-34① 1928年12月28日 アッシジ(表) 【P-43】



C-34② 1928年12月28日 アッシジ(裏) 【P-43】



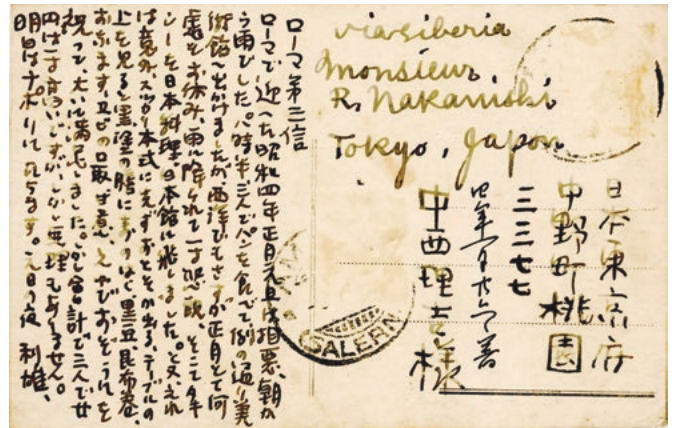
C-35① 1928年12月30日 ローマ(表) 【P-46】



C-35② 1928年12月30日 ローマ(裏) 【P-46】



C-36① 1929年1月1日
ローマ(表) [P-48]



C-36② 1929年1月1日 ローマ(裏) [P-48]



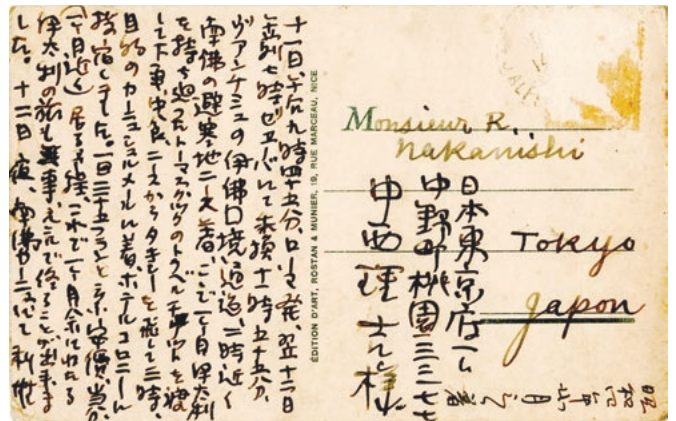
C-37① 1929年1月4日 アマルフィ(ポンペイの絵はがき) (表)
[P-50]



C-37② 1929年1月4日 アマルフィ(ポンペイの絵はがき) (裏)
[P-50]



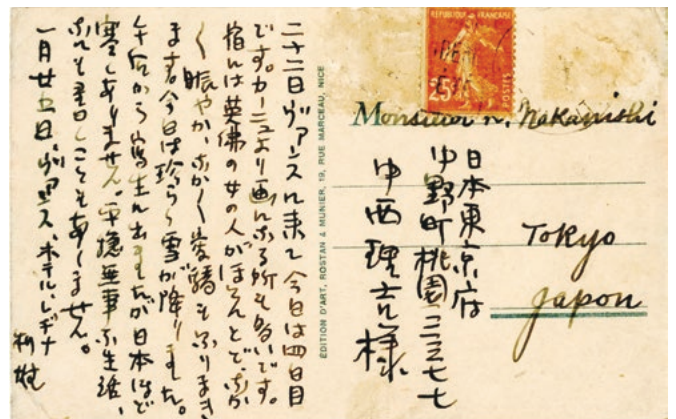
C-38① 1929年1月12日 カーニュ=シュル=メール(表) [P-55]



C-38② 1929年1月12日 カーニュ=シュル=メール(裏) [P-55]



C-39① 1929年1月25日 ヴァンス(表) [P-59]

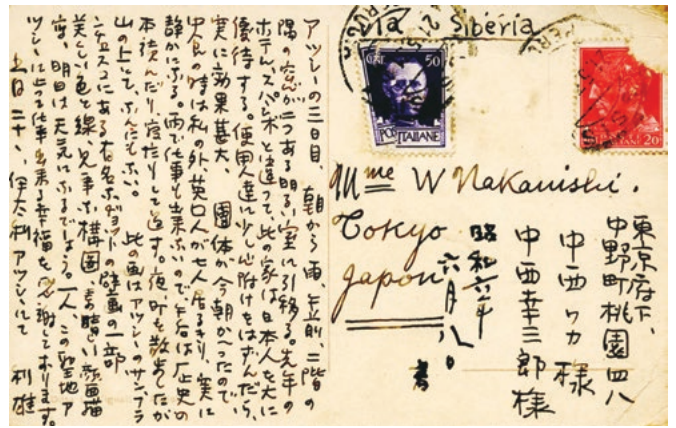


C-39② 1929年1月25日 ヴァンス(裏) [P-59]



Assisi - Chiesa superiore di S. Francesco
 Trasporto della salma di S. Francesco a S. Damiano (Giotto)

C-45① 1931年5月20日
 アッジジ(表)
 [P-176]

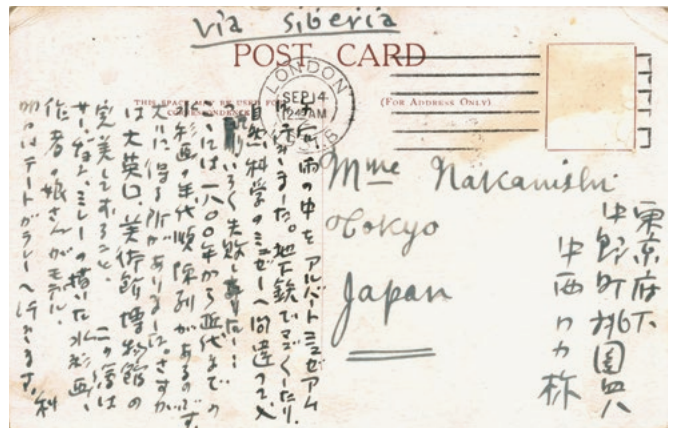


C-45② 1931年5月20日 アッジジ(裏) [P-176]



SIR JOHN EVERETT MILLAIS, P.R.A.
 My Second Sermon.
 (The Artist's Daughter Read).
 Water-colour painting. 5 1/2 in. x 6 1/2 in.
 VICTORIA AND ALBERT MUSEUM. No. 299-1901
 Produced by W. F. Bodgwick Limited

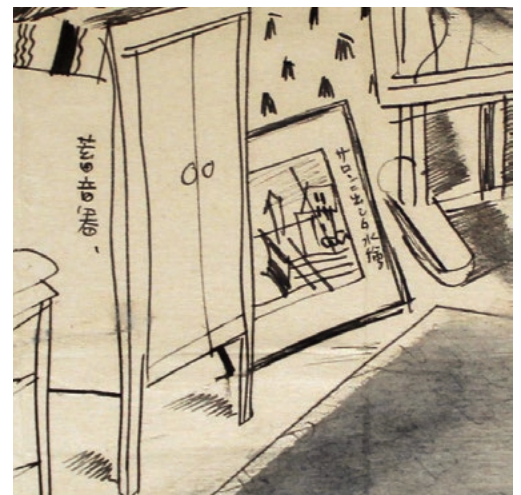
C-46① 1931年9月12日
 ロンドン(表)
 [P-225]



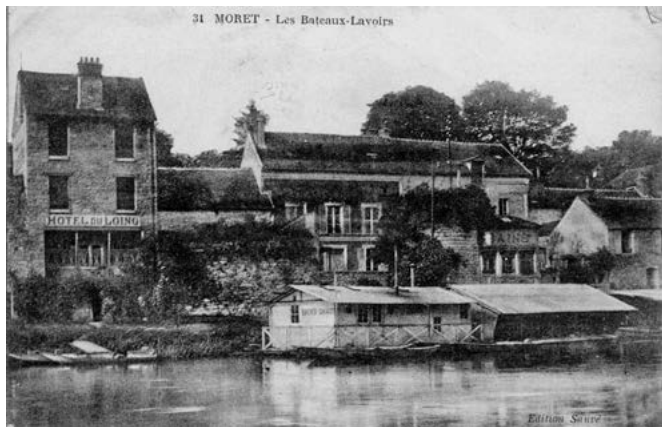
C-46② 1931年9月12日 ロンドン(裏) [P-225]



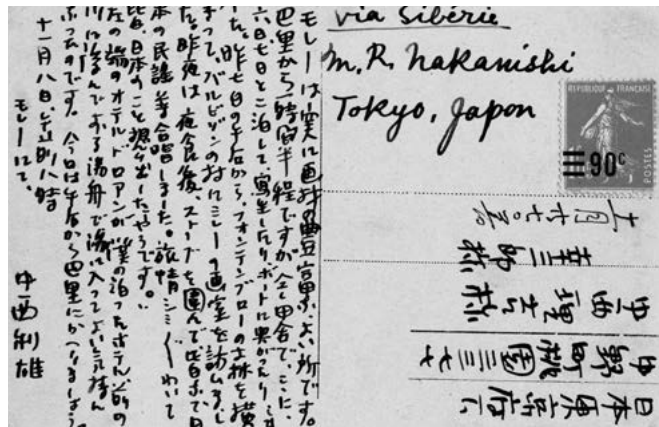
C-47① 1930年1月8日 パリのアトリエ イラスト



C-47② 左図パリのアトリエ イラスト(部分)



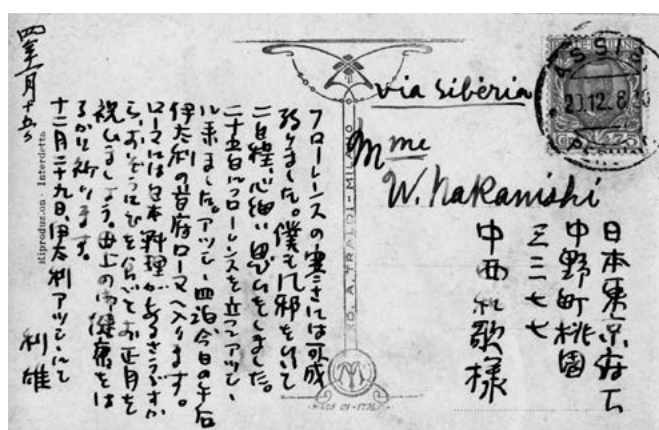
M-7① 1928年11月8日 モレ=シュル=ロワン(表) 【P-35】



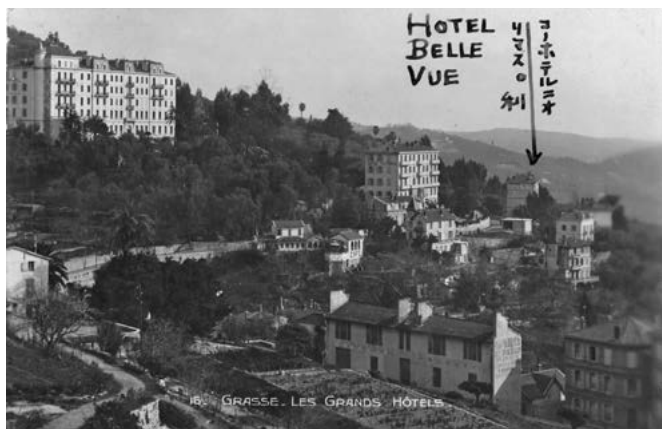
M-7② 1928年11月8日 モレ=シュル=ロワン(裏) 【P-35】



M-8① 1928年12月29日 アッジジ(フィレンツェの絵はがき) (表) 【P-44】



M-8② 1928年12月29日 アッジジ(フィレンツェの絵はがき) (裏) 【P-44】



M-9 1929年2月9日 グラス(表) 【P-62】



M-10 1929年2月15日 グラス(カンヌの絵はがき) (表) 【P-64】



M-11① 1929年7月8日 トゥルーヴィル(表) 【P-82】



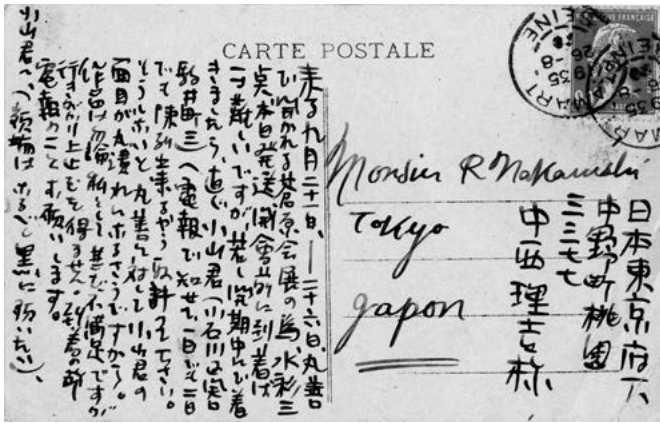
M-11② 1929年7月8日 トゥルーヴィル(裏) 【P-82】



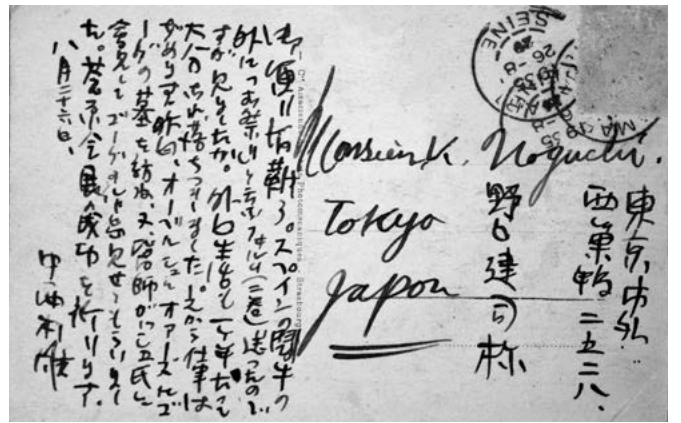
M-12① 1929年7月10日 トゥルーヴィル(表) 【P-84】



M-12② 1929年7月10日 トゥルーヴィル(裏) 【P-84】



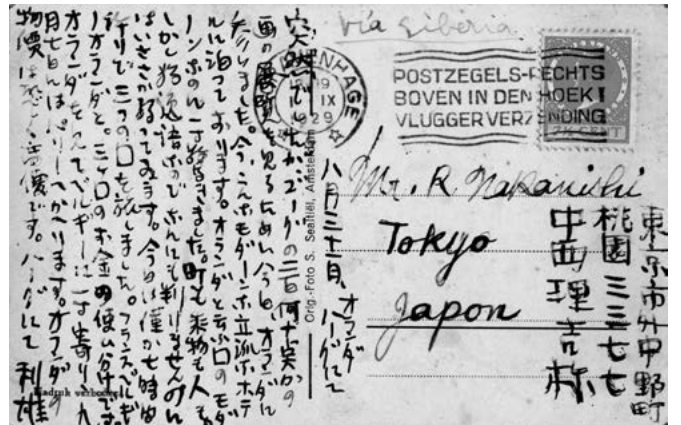
M-13 1929年8月26日(消印) パリ/クラマール(裏) 【P-94】



M-14 1929年8月26日 野口健司宛 パリ/クラマール 【PN-4】
上記はがきの「建」は誤字。正しくは「健司」



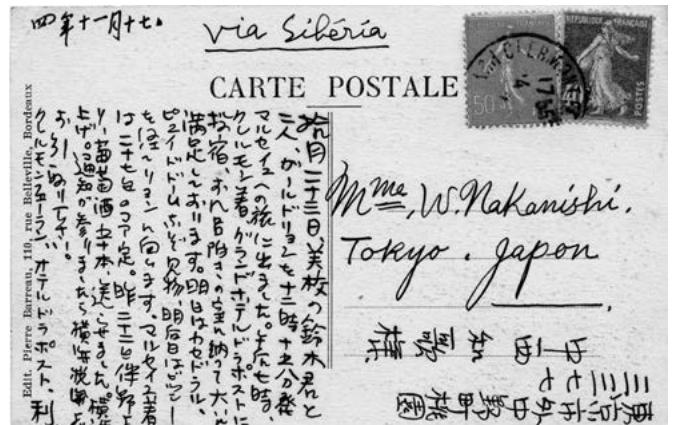
M-15① 1929年8月31日 ハーグ(表) 【P-95】



M-15② 1929年8月31日 ハーグ(裏) 【P-95】



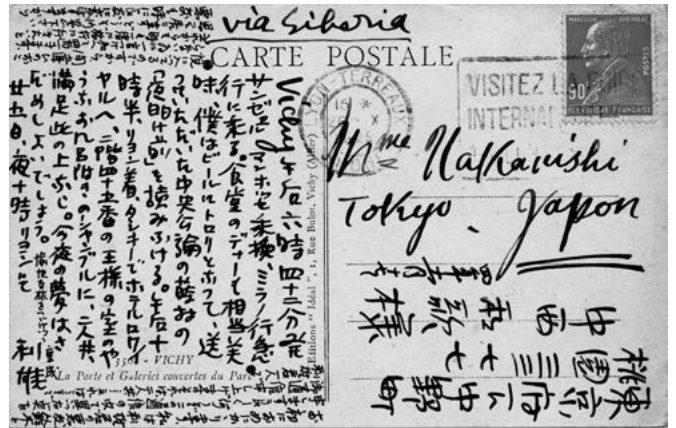
M-16① 1929年10月23日 クレルモン=フェラン(表) 【P-106】



M-16② 1929年10月23日 クレルモン=フェラン(裏) 【P-106】



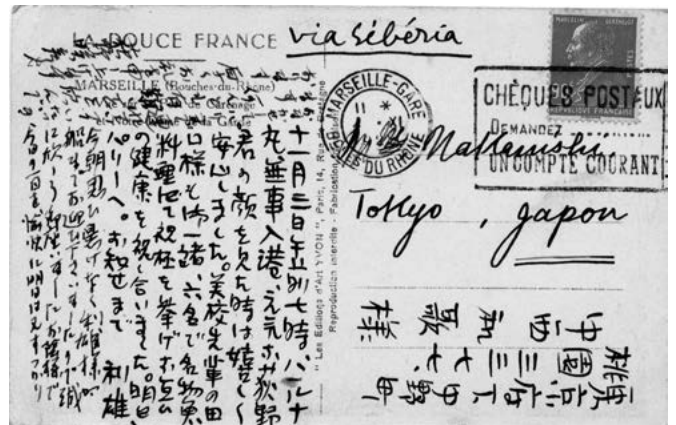
M-17① 1929年10月25日 ヴィシー〜リヨン (表) 【P-110】



M-17② 1929年10月25日 ヴィシー〜リヨン (裏) 【P-110】



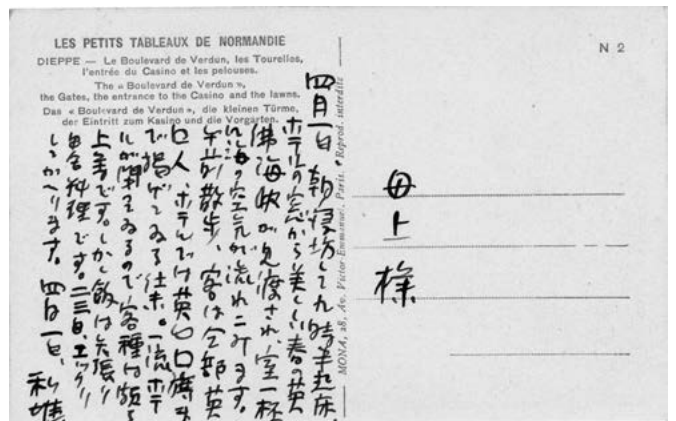
M-18① 1929年11月3日 マルセイユ (表) 【P-116】



M-18② 1929年11月3日 マルセイユ (裏) 【P-116】



M-19① 1930年4月1日 ディエップ (表) 【P-123】



M-19② 1930年4月1日 ディエップ (裏) 【P-123】



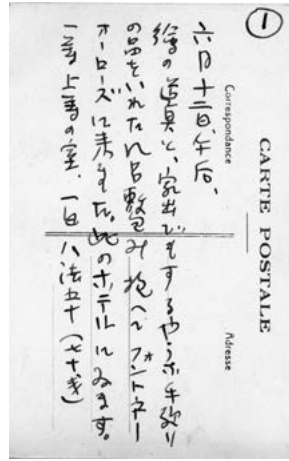
M-20① 1930年5月4日 ヴィリエ=シュル=モラン (表) 【P-127】



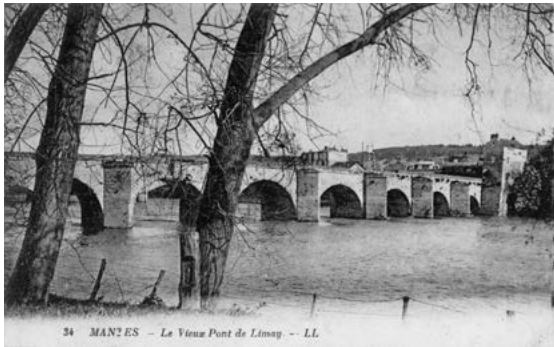
M-20② 1930年5月4日 ヴィリエ=シュル=モラン (裏) 【P-127】



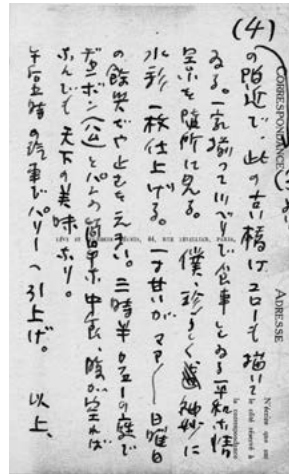
M-21① 1930年6月12日 フォントネー=オー=ローズ1 (表) [P-132]



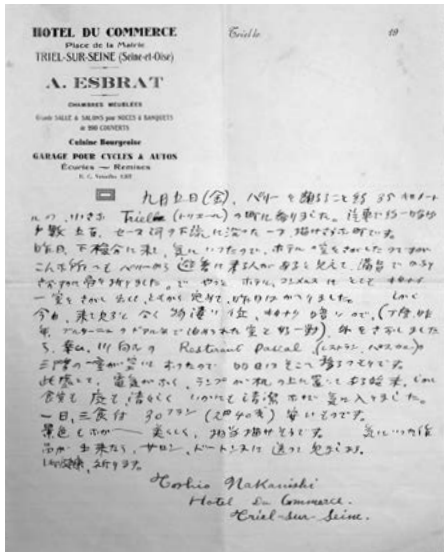
M-21② 1930年6月12日 フォントネー=オー=ローズ1 (裏) [P-132]



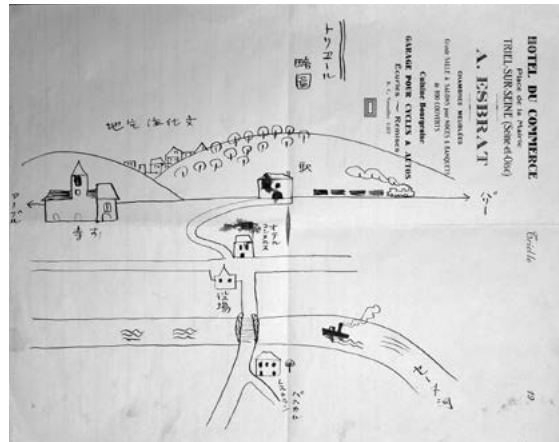
M-22① 1930年8月17日 マント4 (表) [P-139]



M-22② 1930年8月17日 マント4 (裏) [P-139]



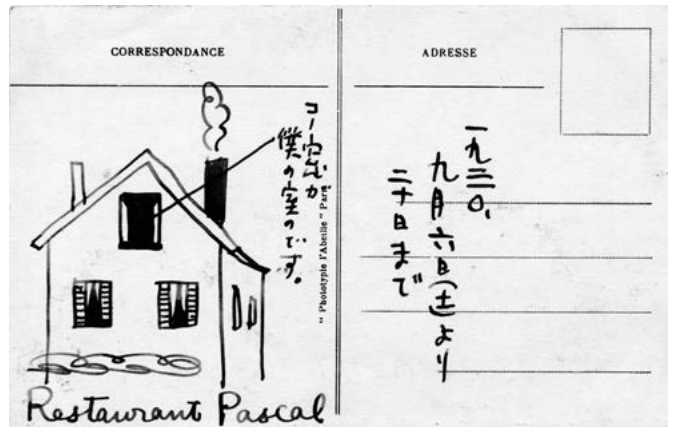
M-23① 1930年9月5日 トリエール=シュル=セヌ [L-54]



M-23② 1930年9月5日 トリエール=シュル=セヌ [L-54]



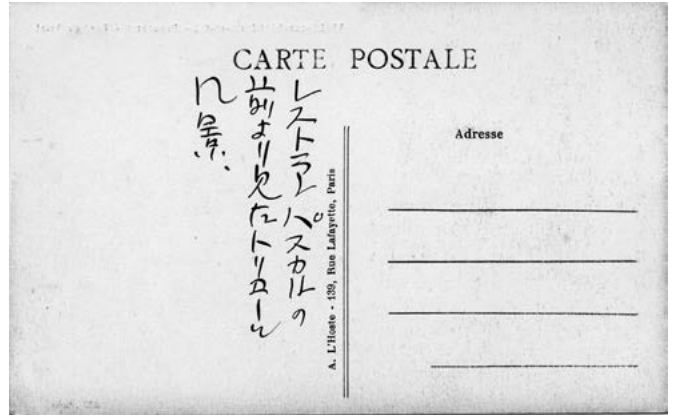
M-24① 1930年9月6日-20日 トリエール=シュル=セヌ1 (表) [P-141]



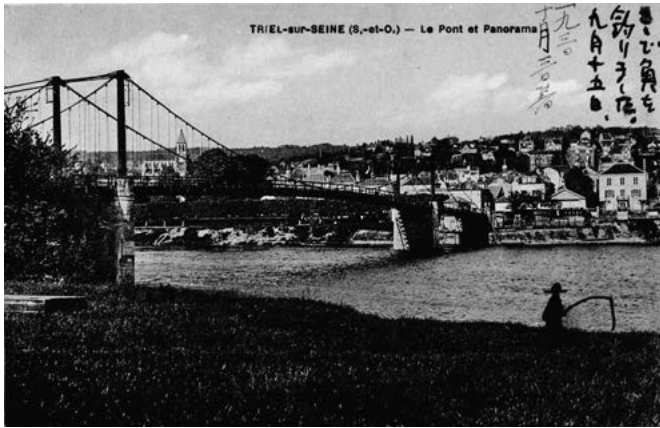
M-24② 1930年9月6日-20日 トリエール=シュル=セヌ1 (裏) [P-141]



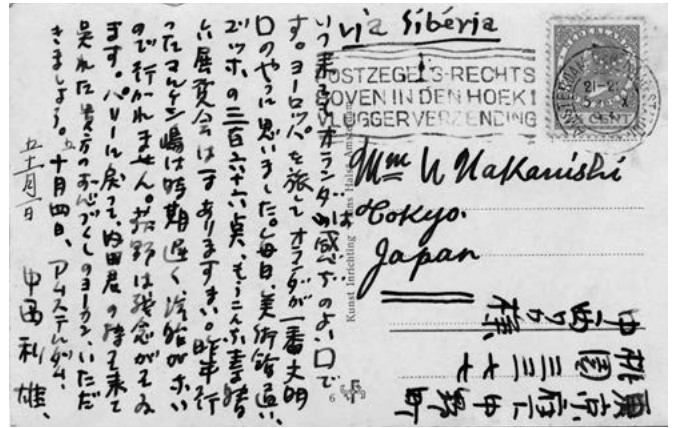
M-25① 1930年9月6日-20日 トリエール=シュル=セーヌ2(表) [P-142]



M-25② 1930年9月6日-20日 トリエール=シュル=セーヌ2(裏) [P-142]



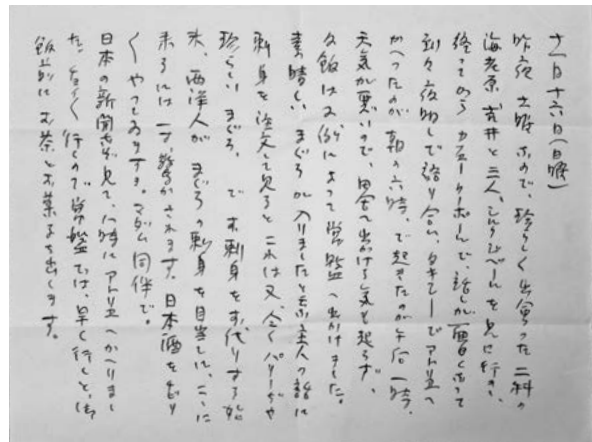
M-26 1930年9月15日 トリエール=シュル=セーヌ(表) [P-146]



M-27 1930年10月4日 アムステルダム(裏) [P-154]



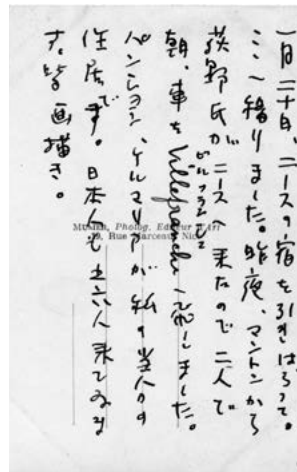
M-28 1930年12月28日 パリ [L-79]



M-29 1930年11月16日 パリ [L-67]



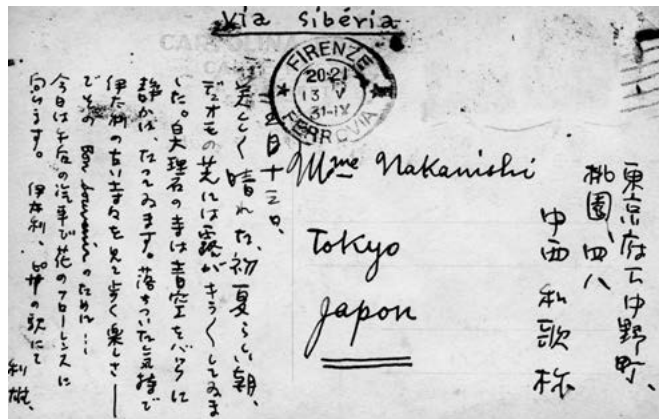
M-30① 1931年1月20日 ヴィルフラシユ=シュル=メール1(表) [P-161]



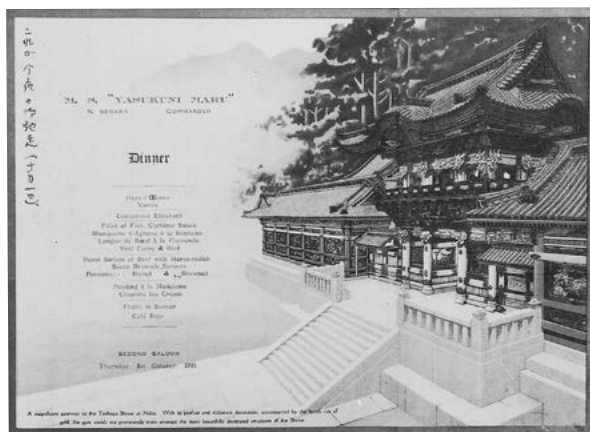
M-30② 1931年1月20日 ヴィルフラシユ=シュル=メール1(裏) [P-161]



M-31① 1931年5月13日 ピサ(表) [P-171]



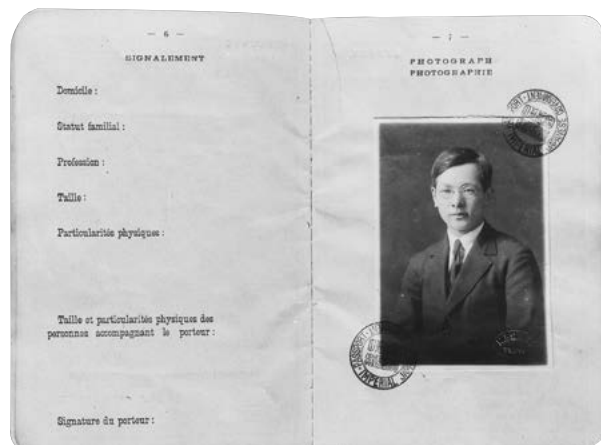
M-31② 1931年5月13日 ピサ(裏) [P-171]



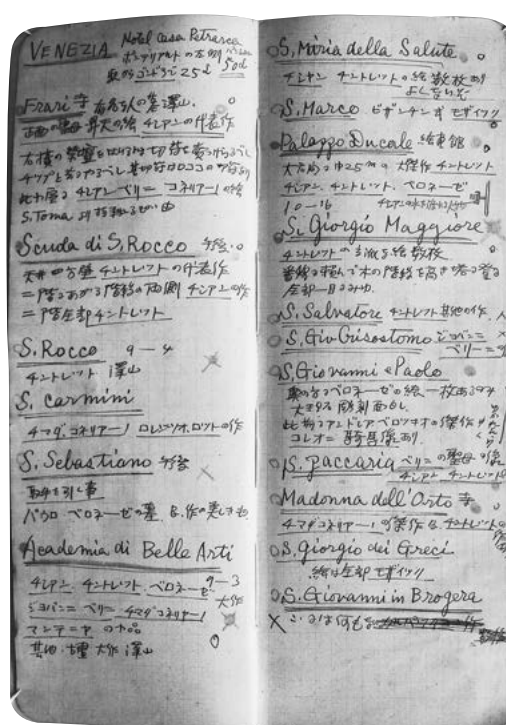
M-32① 1931年10月1日 地中海(表) [L-119]
(靖国丸のメニューに書いた手紙)



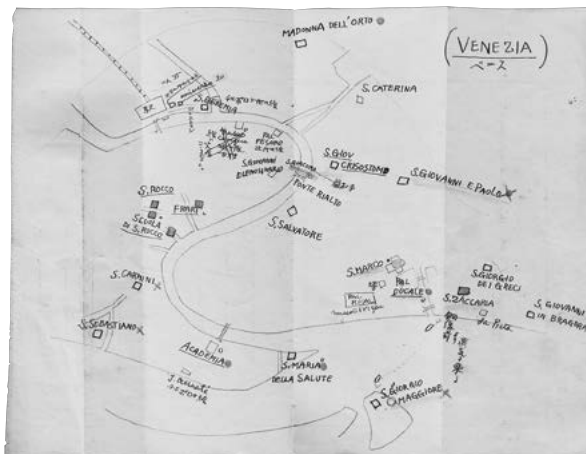
M-32② 1931年10月1日 地中海(裏) [L-119]
(靖国丸のメニューに書いた手紙)



M-33 中西のパスポート



M-34 イタリア旅行の際の手帖



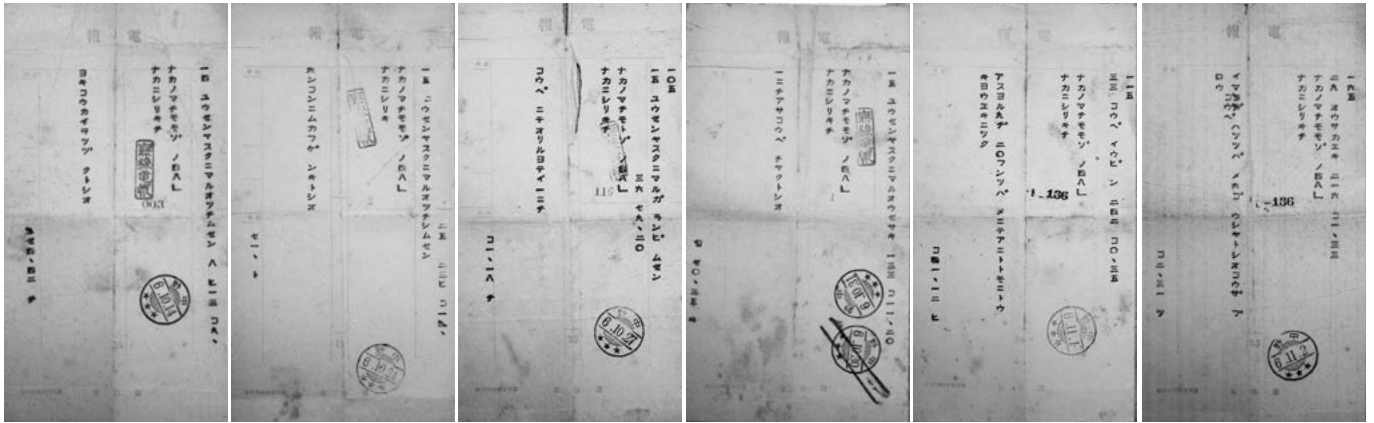
M-35 中西が書いたヴェネツィアの地図



M-36 1929年11月2日 ゴッホが描いたアルルのはね橋を背にして



M-37 アトリエ (第二次大戦中、強制疎開のため壊された)



M-38 中西帰国前後の電報 (左から中野局印10月14日、10月24日、10月27日、10月31日、11月1日、11月2日)



M-39① 1932年第19回日本水彩画会展 中西の滞欧作特別陳列(1)



M-39② 1932年第19回日本水彩画会展 中西の滞欧作特別陳列(2)

中西利雄滞欧書簡リスト

- ・本リストは、中西利雄が滞欧中、家族および友人に出した書簡のうち、筆者が調査したものをまとめたものである。
- ・表の各項目について
 - ① No.(識別番号)については、家族宛絵はがき：P-1からP-238、家族宛手紙：L-1からL-120、友人の野口健司宛絵はがき：PN-1からPN-7 と付した。本書本文、図版、年譜にもこれらの番号を記し、照合できるようにした。
 - ② 日付については、書簡および封筒裏面に書かれている日付、もしくは日付は書かれていなくても前後関係から明確な場合はそれを日付とした。なお、消印が読み取れる場合に限り、日付未記載のもの、および日付と消印が異なるものについて、消印の日付を記した。
 - ③ このリストにおける宛名は、はがきおよび封筒に書かれているものをそのまま記した。したがってたとえば、母宛のものが「和歌」「ワカ」「M^{me} Nakanishi」等、異なって記されている場合がある。なお、宛名が日本語と欧文と併記されているものは日本語を記した。
 - ④ 書簡の到着日については、記載があるもののみを記した。
- ・絵はがきには、中西が切手を貼って差出したものと、封書で(場合によっては複数枚まとめて)差出したものがあり、後者については明記した。なお、封書で送付の場合、個別の絵はがきに宛名のない場合が多い。
- ・リストに「*」を付したものは、中西が「Via Siberia(シベリア経由)」を書き忘れたもの(但し航海中に出したものと封書で送付した絵はがきを除く)で、日本への到着までの日数が、通常より余計にかかっているものが多い。
- ・その他の註記(1)～(43)は、本リストの末尾に記した。

(編：山口和子)

家族宛絵はがき

No.	日付(消印)	宛名	場所	到着日	
P-1	1928年5月25日消印	理吉・母上	門司		
P-2	1928年5月28日	ワカ	上海		
P-3	1928年5月31日	幸三郎	南シナ海上	1928年6月8日	
P-4	1928年5月31日	理吉	南シナ海上	1928年6月8日	(1)
P-5	1928年6月1日	理吉	香港	1928年6月8日	
P-6	1928年6月1日	幸三郎	香港	1928年6月8日	
P-7	1928年6月7日	理吉・母上	シンガポール	1928年6月25日	
P-8	1928年6月7日	幸三郎	シンガポール	1928年6月29日	
P-9	1928年6月8日頃	中西様	ペナン	1928年6月29日	(2)
P-10	1928年6月8日頃	(封書で複数送付)	ペナン1		
P-11	1928年6月8日頃	(封書で複数送付)	ペナン2		
P-12	1928年6月8日頃	(封書で複数送付)	ペナン3		
P-13	1928年6月13日	(封書で送付)	コロombo		
P-14	1928年6月22日	(封書で複数送付)	アデン1	1928年7月20日	
P-15	1928年6月22日	(封書で複数送付)	アデン2	1928年7月20日	
P-16	1928年6月22日	(封書で複数送付)	アデン3	1928年7月20日	
P-17	1928年6月22日	(封書で複数送付)	アデン4	1928年7月20日	
P-18	1928年6月28日	(封書で送付)	地中海(エジプトの絵はがき)	1928年7月20日	
P-19	1928年6月28日頃	(封書で送付)	地中海(エジプトの絵はがき)	1928年7月20日	(3)
P-20	1928年6月28日頃	幸三郎(封書で送付)	(エジプトの絵はがき)	1928年7月20日	(3)
P-21	1928年6月30日	理吉	ナポリ	1928年7月20日	
P-22	1928年7月2日	理吉	マルセイユ	1928年7月21日	
P-23	1928年7月3日	和歌	マルセイユ発パリへ	1928年7月24日	*
P-24	1928年7月5日	幸三郎	パリ	1928年7月27日	
P-25	1928年7月16日消印	理吉	パリ	1928年8月2日	

No.	日付(消印)	宛名	場所	到着日	
P-26	1928年7月20日	理吉	パリ	1928年8月7日	
P-27	1928年7月23日頃	和歌	パリ	1928年8月10日	(4)
P-28	1928年7月27日	(封書で送付)	パリ	1928年8月17日	
P-29	1928年8月9日	理吉	パリ	1928年8月28日	
P-30	1928年8月17日消印	理吉	パリ	1928年9月4日	
P-31	1928年9月3日	理吉	クラマール		
P-32	1928年9月25日頃	(封書で送付)	クラマール	1928年10月12日	(5)
P-33	1928年10月	幸三郎		1928年11月9日	(6)
P-34	1928年11月6日	理吉	モレ=シュル=ロワン	1928年11月25日	
P-35	1928年11月8日	理吉・幸三郎	モレ=シュル=ロワン	1928年11月27日	
P-36	1928年11月	(封書で送付)	モレ=シュル=ロワンの絵はがき		
P-37	1928年11月	(封書で送付)	モレ=シュル=ロワンの絵はがき	1928年12月2日	
P-38	1928年12月11日	理吉	ミラノ	1929年1月2日	(7)
P-39	1928年12月13日消印	理吉	バドヴァ	1928年12月30日	
P-40	1928年12月14日	理吉	ヴェネツィア	1929年1月2日	
P-41	1928年12月15日	幸三郎	ヴェネツィア	1929年1月15日	
P-42	1928年12月28日	幸三郎	アッシジ	1929年1月15日	
P-43	1928年12月28日	理吉	アッシジ	1929年1月16日	
P-44	1928年12月29日	和歌	アッシジ(フィレンツェの絵はがき)	1929年1月15日	
P-45	1928年12月29日	和歌	ローマ(ヴェネツィアの絵はがき)	1929年1月18日	
P-46	1928年12月30日	和歌	ローマ	1929年1月18日	
P-47	1928年12月30日	幸三郎	ローマ	1929年1月18日	*
P-48	1929年1月1日	理吉	ローマ	1929年1月26日	
P-49	1929年1月2日	理吉	ナポリ	1929年1月23日	
P-50	1929年1月4日	理吉	アマルフィ(ボンペイの絵はがき)	1929年1月26日	
P-51	1929年1月5日	理吉	アマルフィ	1929年1月26日	
P-52	1929年1月6日	幸三郎	アマルフィ	1929年1月26日	

No.	日付(消印)	宛名	場所	到着日	
P-53	1929年1月10日 消印	理吉	ローマ		(8)
P-54	1929年1月10日	幸三郎	ローマ		
P-55	1929年1月12日	理吉	カーニュ=シュル =メール	1929年2月3日	*
P-56	1929年1月13日 /1月16日消印	和歌	カーニュ=シュル =メール(ニース の絵はがき)		*
P-57	1929年1月18日	理吉	カーニュ=シュル =メール	1929年2月9日	
P-58	1929年1月21日	理吉	カーニュ=シュル =メール	1929年2月11日	
P-59	1929年1月25日	理吉	ヴァンス		*
P-60	1929年2月3日	理吉	ヴァンス		*
P-61	1929年2月7日	和歌	グラス	1929年3月17日	*
P-62	1929年2月9日	和歌	グラス	1929年3月18日	*
P-63	1929年2月10日	理吉	グラス	1929年3月17日	*
P-64	1929年2月15日	理吉	グラス(カヌ の絵はがき)	1929年3月30日	*
P-65	1929年2月18日	理吉	グラスからパリ /クラマールへ	1929年3月30日	*
P-66	1929年3月18日	理吉	パリ(コルベイユ の絵はがき)	1929年4月12日	*
P-67	1929年4月19日	中西甚兵衛 (妹婿)	マドリード		
P-68	1929年4月19日	幸三郎	マドリード	1929年5月12日	
P-69	1929年4月21日	理吉	マドリード	1929年5月12日	*
P-70	1929年4月23日	理吉	マドリード(トレド の絵はがき)	1929年5月14日	
P-71	1929年5月4日	理吉	パリ/ クラマール	1929年6月7日	
P-72	1929年5月24日	理吉	ロンドン	1929年6月14日	
P-73	1929年5月25日	和歌	ロンドン	1929年6月14日	
P-74	1929年5月25日	幸三郎	ロンドン	1929年6月14日	
P-75	1929年5月26日	幸三郎	ロンドン	1929年6月14日	
P-76	1929年5月26日	和歌	ロンドン	1929年6月14日	
P-77	1929年5月28日	和歌	ロンドン	1929年6月16日	
P-78	1929年5月29日	和歌	ロンドン	1929年6月16日	
P-79	1929年5月29日	理吉	ロンドン	1929年6月16日	
P-80	1929年7月6日	理吉	ル・アーヴル		
P-81	1929年7月7日	幸三郎	ル・アーヴル		*
P-82	1929年7月8日	理吉	トゥルーヴィル		*(9)
P-83	1929年7月8日	理吉	トゥルーヴィル		*(9)
P-84	1929年7月10日	理吉	トゥルーヴィル		*(10)
P-85	1929年7月頃	ワカ(封書 で送付)	ノルマンディー の絵はがき		
P-86	1929年8月2日	理吉	サン=ブリユー		
P-87	1929年8月3日	理吉	サン=ブリユー からトレギエへ	1929年9月7日	*
P-88	1929年8月6日	理吉	トレギエ	1929年9月7日	*

No.	日付(消印)	宛名	場所	到着日	
P-89	1929年8月9日	理吉	プレスト	1929年9月7日	*
P-90	1929年8月11日	理吉・ 甚兵衛	ル・コンケ	1929年9月7日	*
P-91	1929年8月12日	理吉	プレスト→ル・フ レ→モルガ→ドゥ アルヌネ(モルガ の絵はがき)		*
P-92	1929年8月12日	幸三郎	ドゥアルヌネ		*
P-93	1929年8月17日	理吉	ドゥアルヌネ		*
P-94	1929年8月26日 消印	理吉	パリ/クラマール (ブルターニュの 絵はがき)		*
P-95	1929年8月31日	理吉	ハーグ		
P-96	1929年9月1日	理吉	ハーグ		
P-97	1929年9月2日	理吉	アムステルダム		
P-98	1929年9月2日	和歌	アムステルダム		
P-99	1929年9月3日	和歌	アムステルダム (マルケン島の 絵はがき)		
P-100	1929年9月3日	理吉	アムステルダム (マルケン島の 絵はがき)		
P-101	1929年9月4日	和歌	アムステルダム からベルギーへ		
P-102	1929年9月4日	理吉	アントワープ		
P-103	1929年9月5日	和歌	ヘント		
P-104	1929年9月6日	理吉	ブリュージュ		
P-105	1929年10月1日	理吉	パリ/ クラマール		
P-106	1929年10月23日	和歌	クレルモン=フェ ラン	1929年11月17日	
P-107	1929年10月24日	和歌	クレルモン=フェ ラン	1929年11月17日	
P-108	1929年10月25日	理吉	ヴィシー	1929年11月12日	
P-109	1929年10月25日	幸三郎	リヨンへ向う車 中	1929年11月17日	
P-110	1929年10月25日	和歌	ヴィシーからリ オンへ	1929年11月17日	(11)
P-111	1929年10月26日	和歌	リヨン	1929年11月17日	
P-112	1929年10月27日	理吉	マルセイユ	1929年11月17日	
P-113	1929年10月30日	理吉	マルセイユ		
P-114	1929年11月2日	(封書で 送付)	マルセイユ		
P-115	1929年11月2日	和歌	マルセイユ		
P-116	1929年11月3日	和歌	マルセイユ		(12)
P-117	1929年12月11日	理吉	パリ/ クラマール		*
P-118	1929年12月17日	理吉	パリ/ クラマール		*
P-119	1929年12月25日 消印	中西様御 一同様	パリ/ クラマール		*
P-120	1930年1月1日	(封書で 送付)	パリ		(13)
P-121	1930年3月31日	理吉	ディエップ		*

No.	日付(消印)	宛名	場所	到着日	
P-122	1930年4月1日	美香子(姪) (封書で複数送付)	ディエップ		
P-123	1930年4月1日	母上 (封書で複数送付)	ディエップ		
P-124	1930年4月1日	幸三郎 (封書で複数送付)	ディエップ		
P-125	1930年5月3日	(封書で送付)	パリ(ラ・ヴァレンヌ=サン=ティレルの絵はがき)	1930年5月20日	
P-126	1930年5月3日	(封書で送付)	パリ(ラ・ヴァレンヌ=サン=ティレルの絵はがき)	1930年5月20日	
P-127	1930年5月4日	(封書で送付)	ヴィリエ=シュル=モラン	1930年5月20日	
P-128	1930年5月11日	理吉	パリ(ラ・ヴァレンヌ=サン=ティレルの絵はがき)		
P-129	1930年5月-6月	(封書で送付)	パリ		(14)
P-130	1930年6月4日	(封書で送付)	パリ		
P-131	1930年6月	(封書で送付)	パリ		(15)
P-132	1930年6月12日	(封書で3枚送付)	フォントネー=オー=ローズ1		
P-133	1930年6月12日	(封書で3枚送付)	フォントネー=オー=ローズ2		
P-134	1930年6月12日	(封書で3枚送付)	フォントネー=オー=ローズ3		
P-135	1930年7月15日	和歌	パリ(ムランの絵はがき)		
P-136	1930年8月17日	(封書で5枚送付)	パリ=マント[マント=ラ=ジョリー]1 (マントの絵はがき)		
P-137	1930年8月17日	(封書で5枚送付)	パリ=マント[マント=ラ=ジョリー]2 (マントの絵はがき)		
P-138	1930年8月17日	(封書で5枚送付)	パリ=マント[マント=ラ=ジョリー]3 (マントの絵はがき)		
P-139	1930年8月17日	(封書で5枚送付)	パリ=マント[マント=ラ=ジョリー]4 (マントの絵はがき)		
P-140	1930年8月17日	(封書で5枚送付)	パリ=マント[マント=ラ=ジョリー]5 (マントの絵はがき)		
P-141	1930年9月6日-20日	(封書で送付)	トリエール=シュル=セーヌ		
P-142	1930年9月6日-20日	(封書で送付)	トリエール=シュル=セーヌ		
P-143	1930年9月6日-20日	(封書で送付)	トリエール=シュル=セーヌ		
P-144	1930年9月6日-20日	(封書で送付)	トリエール=シュル=セーヌ		
P-145	1930年9月6日-20日	(封書で送付)	トリエール=シュル=セーヌ		
P-146	1930年9月15日	(封書で送付)	トリエール=シュル=セーヌ	1930年10月30日	

No.	日付(消印)	宛名	場所	到着日	
P-147	1930年9月17日	(封書で送付)	トリエール=シュル=セーヌ(ポワシーの絵はがき)		
P-148	1930年9月17日	(封書で送付)	トリエール=シュル=セーヌ(ポワシーの絵はがき)		
P-149	1930年9月17日	(封書で送付)	トリエール=シュル=セーヌ(ポワシーの絵はがき)		
P-150	1930年9月19日 日付手紙に同封と思われる	(封書で送付)	トリエール=シュル=セーヌ(ムラン[ムラン=アン=イヴリーヌ]の絵はがき)		
P-151	1930年9月19日 日付手紙に同封と思われる	(封書で送付)	トリエール=シュル=セーヌ(ムラン[ムラン=アン=イヴリーヌ]の絵はがき)		
P-152	1930年10月2日	理吉	アムステルダム1	1930年10月20日	(16)
P-153	1930年10月2日	理吉	アムステルダム2	1930年10月20日	(16)
P-154	1930年10月4日	ワカ	アムステルダム	1930年11月1日	
P-155	1930年10月4日	ワカ	アムステルダム	1930年10月20日	
P-156	1930年10月13日	幸三郎	パリ(アントワープの絵はがき)		
	1930年10月26日 付P-157~P-160の 包み紙	(封書で送付)		1930年11月中旬	(17)
P-157	1930年10月26日	(封書で4枚送付)	パレゾーの絵はがき		
P-158	1930年10月26日	(封書で4枚送付)	パレゾーの絵はがき		
P-159	1930年10月26日	(封書で4枚送付)	パレゾーの絵はがき		
P-160	1930年10月26日	(封書で4枚送付)	パレゾーの絵はがき		
P-161	1931年1月20日	(封書で3枚送付)	ヴィルフランシュ=シュル=メール		(18)
P-162	1931年1月20日	(封書で3枚送付)	ヴィルフランシュ=シュル=メール		(18)
P-163	1931年1月20日	(封書で3枚送付)	ヴィルフランシュ=シュル=メール		(18)
P-164	1931年1月-2月	(封書で送付)	ヴィルフランシュ=シュル=メール		(19)
P-165	1931年1月-2月	幸三郎 (封書で送付)	ヴィルフランシュ=シュル=メール (モンテカルロの絵はがき)		(19)
P-166	1931年1月-2月	(封書で送付)	ヴィルフランシュ=シュル=メール (モンテカルロの絵はがき)		(19)
P-167	1931年1月-2月	(封書で送付)	ヴィルフランシュ=シュル=メール (マントンの絵はがき)		(19)
P-168	1931年2月20日	(封書で送付)	サン=トロペ		
P-169	1931年4月5日	和歌	ディジョン		
P-170	1931年5月12日	ワカ	モダージュ		

No.	日付(消印)	宛名	場所	到着日	
P-171	1931年5月13日	和歌	ピサ		(20)
P-172	1931年5月13日	和歌	フィレンツェ1		(21)
P-173	1931年5月13日	ワカ	フィレンツェ2		(21)
P-174	1931年5月14日	和歌	フィエーゾレ	1931年6月3日	
P-175	1931年5月15日	理吉	セッティニャーノ	1931年6月3日	
P-176	1931年5月20日	ワカ 幸三郎	アッジジ	1931年6月8日	
P-177	1931年5月24日	和歌	アッジジ	1931年6月12日	
P-178	1931年5月25日	理吉	フィレンツェ	1931年6月12日	
P-179	1931年6月2日	ワカ	フィレンツェ		
P-180	1931年6月6日	和歌	フィレンツェ	1931年6月24日	(22)
P-181	1931年6月7日 消印	理吉	コモ	1931年6月24日	
P-182	1931年6月7日	幸三郎	コモ	1931年6月24日	
P-183	1931年6月7日	ワカ	コモ	1931年6月24日	
P-184	1931年6月7日/ 6月8日消印	幸三郎	ルツェルン1		(23)
P-185	1931年6月7日/ 6月8日消印	幸三郎	ルツェルン2		(23)
P-186	1931年6月7日/ 6月8日消印	理吉	ルツェルン1		(24)
P-187	1931年6月7日/ 6月8日消印	理吉	ルツェルン2		(24)
P-188	1931年6月7日/ 6月8日消印	和歌	ルツェルン3		(24)
P-189	1931年6月7日/ 6月8日消印	和歌	ルツェルン4		(24)
P-190	1931年6月8日	幸三郎	ルツェルン		
P-191	1931年6月8日	M ^{me.} Nakanishi	ルツェルン		
P-192	1931年6月8日	幸三郎	ルツェルン(サン =ゴットアルドの絵 はがき)		
P-193	1931年6月8日	M ^{me.} Nakanishi	ルツェルン		
P-194	1931年6月8日	幸三郎	インターラーケン への途上(ルツェ ルンの絵はがき)		
P-195	1931年6月8日	Madame Nakanishi	インターラーケン への途上(ブリ ュールニグ駅の 絵はがき)		
P-196	1931年6月8日	M ^{me.} Nakanishi	インターラーケン への途上(ウイ リアム・テル像の 絵はがき)		
P-197	1931年6月8日	ワカ	インターラーケン		
P-198	1931年6月8日	和歌	ベルン(ユングフ ラウの絵はがき)		
P-199	1931年6月8日/ 6月9日消印	和歌	ベルン		
P-200	1931年6月8日/ 6月9日消印	理吉	ベルン		
P-201	1931年6月8日/ 6月9日消印	幸三郎	ベルン		

No.	日付(消印)	宛名	場所	到着日	
P-202	1931年6月8日/ 6月9日消印	和歌	ベルン		
P-203	1931年6月8日/ 6月9日消印	幸三郎	ベルン		
P-204	1931年6月9日	中西様 M.R. Nakanishi	ベルン		
P-205	1931年6月9日	幸三郎	ベルン		(25)
P-206	1931年6月9日/ 6月10日消印	和歌	ベルン~パリへ の車中(ベルン の絵はがき)		(25)
P-207	1931年6月9日/ 6月10日消印	幸三郎	ベルン~パリへ の車中(シュタウ プバッハの滝の 絵はがき)		(25)
P-208	1931年6月9日/ 6月10日消印	ワカ	ベルン~パリへ の車中(シーニ ゲ・プラッテの 絵はがき)		(25)
P-209	1931年6月9日/ 6月10日消印	幸三郎	バーゼル~パリ の車中(ベルン の絵はがき)		(25)
P-210	1931年6月9日/ 6月10日消印	和歌	バーゼル~パリ の車中(スイス の絵はがき)		(25)
P-211	1931年6月9日/ 6月10日消印	幸三郎	バーゼル~パリ の車中(ベルン の絵はがき)		(25)
P-212	1931年6月9日/ 6月10日消印	幸三郎	バーゼル~パリ の車中(ベルン の絵はがき)		(25)
P-213	1931年6月9日/ 6月10日消印	ワカ	パリ(ライヒェン バッハの滝の絵 はがき)		(26)
P-214	1931年6月9日/ 6月10日消印	ワカ	パリ(ルツェルン の絵はがき)		(26)
P-215	1931年6月12日 /6月15日消印	ワカ	パリ(ベルンの 絵はがき)		
P-216	1931年6月24日	和歌	モー	1931年7月10日	
P-217	1931年8月17日	(封書で 送付)	ルーアン1		(27)
P-218	1931年8月17日	(封書で 送付)	ルーアン2		(27)
P-219	1931年8月17日	(封書で 送付)	ルーアン3		(27)
P-220	1931年8月17日	(封書で 送付)	ルーアン4		(27)
P-221	1931年8月19日	(封書で 送付)	フェカン		(27)
P-222	1931年9月11日 /9月12日消印	和歌	ロンドン		
P-223	1931年9月11日 /9月12日消印	和歌	ロンドン		
P-224	1931年9月12日 /9月14日消印	和歌	ロンドン		
P-225	1931年9月12日 /9月14日消印	ワカ	ロンドン		
P-226	1931年9月13日 /9月14日消印	幸三郎	ロンドン		

No.	日付(消印)	宛名	場所	到着日	
P-227	1931年9月14日 ／9月15日消印	和歌	ロンドン	1931年10月4日	
P-228	1931年9月22日 ／9月23日消印	ワカ	パリ		(28)
P-229	1931年9月22日 ／9月23日消印	ワカ	パリ		(28)
P-230	1931年9月23日 ／9月24日消印	ワカ	フィスプ		
P-231	1931年9月23日 ／9月24日消印	ワカ	ツェルマツ		
P-232	1931年9月24日 ／9月25日消印	ワカ	ツェルマツ		(29)
P-233	1931年9月24日 ／9月25日消印	ワカ	ツェルマツ(ゴルナーグラートの絵はがき)		(29)
P-234	1931年9月29日	(封書で 3枚送付)	マルセイユ		(30)
P-235	1931年9月29日	(封書で 3枚送付)	マルセイユ		(30)
P-236	1931年9月29日	(封書で 3枚送付)	マルセイユ		(30)
P-237	日付不明 1930年か?	(封書で 送付)	パリ		
P-238	日付不明	(封書で 送付)	パリ		

* このほか、通信文のない滞欧中の絵はがきとして、トゥルーヴィル：1枚、ルーヴル：1枚、アムステルダム：1枚、シャンティイー：2枚、アントワープ：1枚、ブリュージュ：1枚、パリ：6枚がある。

家族宛手紙

No.	日付(消印)	宛名	場所	到着日	
L-1	1928年10月30日	(封筒なし)	クラマール		(31)
L-2	1930年1月8日	(封筒なし)	パリのアトリエのイラスト		
L-3	1930年2月18日 ／2月19日消印	理吉	パリ	1930年4月1日	*
L-4	1930年2月24日 ／2月25日消印	理吉	パリ	1930年4月1日	*
L-5	1930年3月7日 (封筒記載は3月8日)	和歌	パリ	1930年4月18日	*
L-6	1930年3月7日 (封筒記載は3月8日)	幸三郎	パリ	1930年4月18日	*
L-7	1930年3月17日 (封筒記載は3月18日)	和歌(手紙は両親宛)	パリ	1930年4月19日	*
L-8	1930年3月25日 消印	理吉(手紙は両親宛)	パリ	1930年4月29日	*
L-9	1930年4月1日 消印	和歌(封筒のみ)	パリ	1930年6月20日	
L-10	1930年4月1日 消印	幸三郎(封筒のみ)	(ディエップの消印)	1930年[?]月15日	*
L-11	1930年4月3日	和歌	パリ	1930年5月3日	*
L-12	1930年4月7日	和歌	パリ	1930年5月3日	*
L-13	1930年4月15日	(封筒なし)	パリ		
L-14	1930年4月21日 ／4月22日消印	和歌	パリ	1930年5月20日	*

No.	日付(消印)	宛名	場所	到着日	
L-15	1930年4月23日	和歌	パリ	1930年5月10日	
L-16	1930年4月27日 ／4月28日消印	和歌	パリ	1930年5月14日	
L-17	1930年5月2日	和歌(封筒のみ)	パリ	1930年5月21日	
L-18	1930年5月3日	和歌(封筒のみ)	パリ	1930年5月21日	
L-19	1930年5月5日	和歌	パリ	1930年6月21日	
L-20	1930年5月6日 ／5月8日消印	和歌	パリ	1930年5月25日	
L-21	1930年5月7日	和歌	パリ	1930年5月25日	
L-22	1930年5月11日 ／5月13日消印	和歌	パリ	1930年5月30日	
L-23	1930年5月17日	和歌	パリ	1930年6月6日	
L-24	1930年5月18日 ／5月19日消印	和歌	パリ	1930年6月6日	
L-25	1930年5月20日 ／5月21日消印	理吉(母宛同封)	パリ	1930年6月6日	
L-26	1930年5月26日 ／5月30日消印	幸三郎	パリ	1930年6月15日	
L-27	1930年5月26日 ／5月30日消印	和歌	パリ	1930年6月15日	
L-28	1930年5月31日	(封筒なし)	パリ		
L-29	1930年6月11日 ／6月12日消印	和歌	パリ	1930年6月29日	
L-30	1930年6月12日 ／6月13日消印	和歌(封筒のみ)	フロントネー＝オー＝ローズ	1930年7月1日	
L-31	1930年6月19日	和歌	パリ	1930年7月10日	(32)
L-32	1930年6月26日	和歌	フロントネー＝オー＝ローズ	1930年7月13日	
L-33	1930年6月29日 ／7月1日消印	和歌	フロントネー＝オー＝ローズ	1930年7月18日	
L-34	1930年7月1日	和歌	パリ	1930年7月18日	
L-35	1930年7月8日 ／7月10日消印	和歌	パリ	1930年7月27日	
L-36	1930年7月9日 ／7月10日消印	幸三郎(母宛同封)	パリ	1930年7月27日	
L-37	1930年7月11日	和歌	パリ	1930年7月27日	
L-38	1930年7月14日 ／7月15日消印	和歌	パリ	1930年8月1日	
L-39	1930年7月16日 ／7月17日消印	和歌	パリ	1930年8月3日	
L-40	1930年7月24日 ／7月26日消印	和歌	パリ	1930年8月12日	
L-41	1930年7月29日 ／7月30日消印	和歌	パリ	1930年8月15日	
L-42	1930年7月31日 ／8月1日消印	和歌	パリ	1930年8月17日	
L-43	1930年8月2日 ／8月3日消印	和歌	パリ	1930年8月19日	
L-44	1930年8月5日 ／8月6日消印	和歌	パリ	1930年8月22日	
L-45	1930年8月12日 ／8月13日消印	理吉	パリ	1930年8月29日	
L-46	1930年8月13日 ／8月14日消印	幸三郎	パリ	1930年8月30日	

No.	日付(消印)	宛名	場所	到着日	
L-47	1930年8月14日	和歌	パリ	1930年9月2日	
L-48	1930年8月16日 ／8月17日消印	和歌	パリ	1930年9月2日	
L-49	1930年8月18日 消印	和歌 (封筒のみ)	パリ		
L-50	1930年8月19日	和歌	パリ	1930年9月5日	
L-51	1930年8月23日 ／8月24日消印	和歌	パリ	1930年9月9日	
L-52	1930年8月26日 ／8月27日消印	和歌	パリ	1930年9月12日	
L-53	1930年9月2日 ／9月3日消印	和歌	パリ	1930年9月19日	
L-54	1930年9月5日	和歌	トリエール=シュ ル=セーヌ	1930年9月21日	(33)
L-55	1930年9月9日	和歌	トリエール=シュ ル=セーヌ	1930年9月28日	
L-56	1930年9月15日 ／9月17日消印	和歌(幸三 郎宛同封)	トリエール=シュ ル=セーヌ	1930年10月3日	
L-57	1930年9月16日	和歌	トリエール=シュ ル=セーヌ	1930年10月3日	
L-58	1930年9月17日	理吉	トリエール=シュ ル=セーヌ	1930年10月5日	
L-59	1930年9月18日	和歌	トリエール=シュ ル=セーヌ	1930年10月5日	
L-60	1930年9月19日	和歌	トリエール=シュ ル=セーヌ	1930年10月7日	
L-61	1930年9月21日 (封筒記載は9月 22日)／9月24日 消印	和歌	パリ	1930年10月10日	
L-62	1930年9月25日 消印	和歌	パリ	1930年10月13日	
L-63	1930年10月9日 ／10月10日消印	和歌	パリ	1930年10月26日	
L-64	1930年10月10日 ／10月11日消印	理吉・ ワカ	パリ	1930年10月29日	
L-65	1930年11月11日 ／11月12日消印	ワカ (親展)	パリ	1930年11月27日	
L-66	1930年11月13日	和歌	パリ	1930年11月30日	
L-67	1930年11月16日	和歌	パリ	1930年12月5日	
L-68	1930年11月17日	ワカ	パリ	1930年12月5日	
L-69	1930年11月18日	和歌	パリ	1930年12月5日	
L-70	1930年11月24日 (11月25日朝)	ワカ	パリ	1930年12月13日	
L-71	1930年11月26日 ／11月27日消印	和歌	パリ	1930年12月13日	
L-72	1930年11月27日 ／11月29日消印	理吉 (親展)	パリ	1930年12月17日	
L-73	1930年11月29日 消印	和歌	パリ	1930年12月17日	
L-74	1930年12月3日	和歌	パリ	1930年12月22日	
L-75	1930年12月6日	和歌	パリ	1930年12月24日	(34)
L-76	1930年12月16日 ／12月17日消印	ワカ	パリ	1931年1月4日	
L-77	1930年12月21日 ／12月23日消印	和歌(幸三 郎宛同封)	パリ	1931年1月11日	

No.	日付(消印)	宛名	場所	到着日	
L-78	1930年12月23日 ／12月24日消印	和歌	パリ	1931年1月11日	
L-79	1930年12月28日 ／12月29日消印	和歌	パリ	1931年1月18日	
L-80	1931年2月11日	和歌	ヴィルフランシュ =シュル=メール	1931年3月2日	
L-81	1931年2月15日	和歌	ヴィルフランシュ =シュル=メール	1931年3月7日	
L-82	1931年2月21日	和歌	ヴィルフランシュ =シュル=メール	1931年3月23日	
L-83	1931年3月1日 ／3月2日消印	和歌	パリ	1931年3月22日	
L-84	1931年3月3日 ／3月4日消印	和歌	パリ	1931年3月22日	
L-85	1931年3月5日 ／3月6日消印	理吉 (母宛同封)	パリ	1931年3月24日	
L-86	1931年3月7日 ／3月8日消印	和歌	パリ	1931年3月25日	
L-87	1931年3月13日	和歌	パリ	1931年4月1日	
L-88	1931年3月17日 (封筒記載は3月 18日)／3月18日 消印	和歌	パリ	1931年4月3日	
L-89	1931年3月18日 ／3月19日消印	和歌 (親展)	パリ	1931年4月3日	
L-90	1931年4月18日	和歌	パリ	1931年5月11日	
L-91	1931年4月26日	和歌	パリ	1931年5月15日	
L-92	1931年4月30日 (5月1日朝)／5月 2日消印	和歌	パリ	1931年5月19日	
L-93	1931年5月7日	和歌	パリ	1931年5月24日	
L-94	1931年5月10日 ／5月11日消印	和歌	パリ	1931年5月29日	
L-95	1931年5月16日	理吉	フィレンツェ	1931年6月3日	(35)
L-96	1931年5月27日	理吉	フィレンツェ	1931年6月15日	(36)
L-97	1931年6月7日	(封筒なし)	ルツェルン		(37)
L-98	1931年6月10日	和歌	パリ	1931年6月26日	
L-99	1931年6月11日	理吉	パリ	1931年6月28日	
L-100	1931年6月14日	和歌	パリ	1931年6月30日	
L-101	1931年6月16日 ／6月18日消印	理吉	パリ	1931年7月5日	
L-102	1931年6月19日	和歌	パリ	1931年7月7日	
L-103	1931年6月21日 (封筒記載は6月 22日)／6月22日 消印	和歌	パリ	1931年7月10日	
L-104	1931年6月23日	理吉・ 和歌	パリ	1931年7月10日	
L-105	1931年6月24日	和歌	パリ		(38)
L-106	1931年6月25日 ／6月26日消印	和歌	パリ	1931年7月13日	
L-107	1931年6月28日 ／6月29日消印	和歌 (親展)	パリ	1931年7月19日	
L-108	1931年6月30日 ／7月2日消印	理吉・ 和歌	パリ	1931年7月17日	

No.	日付(消印)	宛名	場所	到着日
L-109	1931年7月1日／ 7月2日消印	幸三郎	パリ	1931年7月19日
L-110	1931年7月7日	和歌	パリ	1931年7月24日
L-111	1931年7月9日／ 7月10日消印	和歌 (親展)	パリ	1931年7月26日 (39)
L-112	1931年7月15日	理吉	パリ	1931年7月31日
L-113	1931年7月20日 ／7月21日消印	和歌	パリ	1931年8月7日
L-114	1931年7月23日	和歌 (親展)	パリ	1931年8月12日
L-115	1931年8月9日／ 8月11日消印	和歌	パリ	1931年8月24日
L-116	1931年8月24日	和歌	パリ	1931年9月12日
L-117	1931年8月31日 ／9月1日消印	和歌	パリ	1931年9月14日
L-118	1931年10月1日 ／10月2日消印	和歌	マルセイユ	1931年10月20日 (40)
L-119	1931年10月1日		地中海	(41)
L-120	1931年10月2日 ／10月3日消印 (ナポリ)	ワカ	地中海	1931年10月21日 (42)

野口健司宛絵はがき

No.	日付(消印)	宛名	場所	到着日
PN-1	1928年5月31日	野口健司	南シナ海上	
PN-2	1928年7月-8月	野口健司	パリ	(43)
PN-3	1928年12月21日 消印	野口健司	ヴェネツィア	
PN-4	1929年8月26日	野口健司	パリ/クラマール (絵はがきは モルガのもの)	*
PN-5	1929年11月4日 消印	野口健司	マルセイユ	
PN-6	1929年12月31日 消印	野口健司	クラマール	*
PN-7	1930年8月22日 消印	野口健司	パリ	

註

- (1) 写真面に木村毅直筆の俳句
- (2) 文面から1928年6月8日頃と推定。日付は読み取れないがペナンの消印
- (3) 日付は未記載だが、エジプトの絵はがきを封書で送付しているため、P-18と同じ1928年6月28日頃と推定
- (4) 本文 註4参照
- (5) 日付は未記載だが、日本到着が1928年10月12日なので、日本到着までの日数を17～18日前後と、鑑みると、差出日は1928年9月25日頃と推定
- (6) 日付は未記載で、消印からは、1928年か29年の10月であることが分かる。また文面は、L-1に同じ内容の記述があることから、1928年10月と特定

- (7) 本文 註13参照
- (8) はがきの文面と前後関係から執筆は1月9日
- (9) 2枚続きの内容
- (10) 中西自身が写っている
- (11) 同行した鈴木重成の添え書きあり
- (12) 荻野暎彦の添え書きあり
- (13) 年賀状として送付
- (14) 日付未記載だが、記載内容から1930年5～6月と判断
- (15) 日付未記載だが、記載内容から1930年6月と特定
- (16) 2枚続きの内容
- (17) P-157～P-160の包み紙。日付と説明文の記載あり。なお、絵はがきには通信文等未記載
- (18) 3枚続きの内容
- (19) 日付未記載だが、滞在時期から1931年1～2月と特定。P-164は通信文も未記載
- (20) ピサの斜塔を背に中西自身が写っている
- (21) 2枚続きの内容
- (22) フィレンツェで欧州女子競技会を見た中西が写っている
- (23) 2枚続きの内容
- (24) P-186～P-189は4枚続きの内容。P-187とP-189に同行者、加治木中佐の和歌一首添え書き
- (25) いずれもフランスの切手、1931年6月10日パリの消印(但しP-205の消印は判読不能)であり、パリへ戻ってから切手を貼って投函したもの
- (26) 2枚続きの内容
- (27) まとめて封書で送付したと思われる。内容から鑑み、同封された絵はがきは他にもあったと思われる
- (28) 2枚続きの内容
- (29) 2枚続きの内容(本来は3枚続きと思われるが1枚目はのこっていない)
- (30) 3枚続きの内容
- (31) 封筒なし、数枚の便せん中ナンバーが、3, 4と記されたもののみ
- (32) カフェレストラン・ド・ヴェルサイユの便箋と封筒
- (33) オテル・デュ・コムルススの便箋
- (34) 日付未記載で消印も読めないが、日本到着日から鑑み、また「今日の土曜日」という記述があることから、12月6日付の手紙であると特定
- (35) ホテル・ポルタ・ロッサの便箋・封筒
- (36) ペンシヨーネ・クロツィーニの便箋・封筒
- (37) ホテル・ダイアナの便箋
- (38) アンソニア・オテルの便箋・封筒。切手を貼って投函した形跡なし。何かに入れて送付したか、出さなかった可能性もある。
- (39) 便箋の枚数足りない
- (40) 日本郵船の便箋・封筒
- (41) 靖国丸のメニューに書いた手紙
- (42) 日本郵船の便箋・封筒
- (43) 日付未記載だが、オテル・ビュファローの住所記載があることから1928年7月～8月と特定

中西利雄滞欧年譜

・各事項に続き、その事項の根拠となる資料名を()で記した。資料のうち、中西利雄の書簡については、「中西利雄滞欧書簡リスト」(pp.65-71)におけるNo.(識別番号)のみを記してある。なお、固有名詞に欧文が併記されているものは、中西自身が記しているか、名称が絵はがきや便せんに印刷されているものである。(編：山口和子)

1928(昭和3)年

- 4月 28-29日、蒼原会、中西利雄渡仏送別記念登山会を開催。28日夜11時新宿駅発、猿橋駅下車。瀬戸村～麻生山～大寺山・小寺山～権現山～扇山～鳥沢駅から帰京(29日)。(『美術界』『みづゑ』280、1928年6月、p.259/『美術界消息』『アトリエ』5-5、1928年5月、p.155)
- 5月 12日、蒼原会中西利雄渡仏送別会を京橋いづみやにて開催。(『美術界』『みづゑ』280、1928年6月、p.259)
- 5月 21日、渡仏のため、中野区桃園の家を出発、夜、東京駅にて蒼原会会員らに見送られる。(小山良修「蒼原会略史」『蒼原』1、1935年10月、p.65/『美術界消息』『アトリエ』5-5、1928年5月、p.155ほか)
- 5月 22日を京都で、23日を奈良で過ごし、夜は京都の新京極で、父たちと4人でピリヤードを楽しむ。(L-25(当時の回想))
- 5月 24日、日本郵船「白山丸」で渡仏。東京美術学校同窓の藤岡一も同船していた。中西の船室は、二等四号室、四人部屋で、医学博士の野村、広島高等工業学校教授の中江大部、そして画家の鈴木良三が同室であった。また演劇研究のため渡仏する生嶋、小説家で文学評論家の木村毅とも親しくなる。後にこの船に乗船していたメンバーで「白山会」を作り、渡仏後、定期的に集う機会を持つこととなる。(『水繪技法と随想』p.299/中西利雄「懐かしき船室」『蒼原』2、蒼原会、1940年11月、pp.15-16)
- 5月 25日、門司入港。汽車で箱崎八幡宮を詣で、航海の無事を祈る。(P-1)
- 5月 28日、上海入港。上海見物をし、本場の中華料理を楽しむ。(P-2、P-3)
- 6月 1日、香港入港。島巡りや、ピークへも登るなど、香港を観光する。(P-5)
- 6月 7日、シンガポール着。博物館、貯水池、マホメットの寺院、植物園等を観光し、日本人町の会席料理店「新喜楽」で日本料理を食べる。また猛烈な暑さにも驚く。(P-7)
- 6月 8日頃、ペナン着。スネークテンプルを見、並木道や道路の立派さに驚く。(P-10～P-12)
- 6月 13日、コロボン入港。(P-13)
- 6月 21日、アデン入港。樹木のない赤黒い岩山や、オアシス、水売りなど、日本では考えられない光景に驚く。(P-14～P-17)
- 6月 26日頃、ポートサイド(エジプト)入港。スフィンクスやピラミッドを見る。(P-18～P-20)
- 6月 30日、ナポリ入港。博物館などを訪れ、ティツィアーノの作品等を見る。(P-21)
- 7月 2日、マルセイユ到着。日本から到着していた手紙11通に喜ぶ。巖窟王で有名なシャトー・ディフなどマルセイユ観光後、Hôtel Louvre & Paix(Le Grand Hôtel du Louvre

et de la Paix)(中西は以後このホテルを「グランドホテル」と記す)に宿泊。(P-22、P-23)

- 7月 3日、9時40分マルセイユ発の急行でパリへ向かう(パリ到着予定時刻は夜10時5分)。パリのリヨン駅で、山口長男、荻須高德の出迎えを受ける。当時、小磯良平も滞っていた、パリ14区のトンプ＝イソワール通り138番地、オテル・ビュファロー(Hôtel Buffalo, 138 rue de la Tombe-Issoire)に身を落ち着ける。(P-23、P-27、L-33(当時の回想))
 - 7月 以後パリにてルーヴルをはじめ様々な美術館や画廊に通って名画の鑑賞・研究に努める。(P-25) オテル・ビュファロー滞在中、近くのモンソーリ公園へ毎朝散歩に行き、雀にパンをやったり、手紙を書いたりすることが日課となる。(P-27) また、郊外ピヤンクール、ムードンの丘、クラマルの森等、パリ近郊にも足を伸ばし絵を描き始める。(PN-2)
 - 8月 9日、パリ南西のクラマルヘアトリエを見にいき、翌9月よりこの地に移ることとする。(P-29)
 - 9月 はじめは、41 rue de Fontenay(フォントネー通り41番地)の画室であったが、10 allée de Meudon(ムードン小路10番地)のアパートに変わる。(P-30、P-31、P-32他)
 - 11月 近所の家庭、4 rue Duffaut(デュフォー通り4番地)のベルジェ家に移り、下宿する。ベルジェ家とは、中西がパリに移った後も、交際を続ける。(L-1他)
 - 11月 6-8日、白山会の11月例会で、鈴木良三らとモレ＝シュル＝ロワンに遊ぶ。この時バルビゾンにも寄り、ミレーの画室も訪ねている。(P-34、P-35)
 - 12月 10日夜、美校同窓の小磯良平、小磯の中学(兵庫県立第二神戸中学校)の先輩である古家新の3人でパリを発ちイタリア旅行。11日、12日とミラノ、メトロポール・ホテルに宿泊。(P-38)
 - 12月 13日、ミラノを発ってパドヴァへ。スクロヴェーニ礼拝堂に描かれたジョットのフレスコ画等を見る。アルベルゴ・スタンシオーネ(スタツィオーネ Stazioneか?)に投宿。(P-39)
 - 12月 14日、ベネツィアに移る。アルベルゴ・フォンタナに宿泊。(P-40)
 - 12月 15日、パラッツォ・ドゥカーレ、サンタ・マリア・マッジョレ教会等を見る。(P-41)
 - 12月 以後、スクオーラ・グランデ・ディ・サン・ロッコ(サン・ロッコ大同信組合)や、ティツィアーノの作品等を見る。(PN-3)
 - 12月 22日、ヴェネツィアを発ち、フィレンツェに入る。Pensione Crocini(ペンシオーネ・クロツィーニ)に宿泊。中西は風邪をひいて体調を崩す。(PN-3、P-44)
 - 12月 25日、フィレンツェを発ち、アッシジに入る。(P-42)
 - 12月 29日、午後4時、アッシジを発ち、ローマに入る。ホテル・アレクサンドラに宿泊。(P-45)
 - 12月 30日、ローマ国立博物館等を見る。(P-46)
- ## 1929(昭和4)年
- 1月 1日、日本料理「日本館」で正月のおせち料理を食べる(3人で20円)。(P-48)

- 1月 2日、ローマを去り、ナポリに移る。ホテル・ベルトリーニに宿泊。(P-49)
- 1月 4日、日本人専門の案内人アントニオにガイドを依頼し、ポンペイを見学。その後アマルフィに入る。ルナ・ホテル(現在も四ツ星ホテルとして営業を続けるホテル・ルナ・コンヴェント)に宿泊。7日まで滞在し、写生等をする。(P-50, P-51, P-53)
- 1月 8日、ナポリ経由でローマに戻る。以前と同じホテル・アレクサンドラに宿泊。(おそらく)翌9日、午前、ヴァチカンのシスティーナ礼拝堂を見学し、午後はアリナリ写真店で、写真を求める。(P-53)
- 1月 10日、ローマの廃墟(Palazzo dei Cesari)を訪れる。イタリア旅行で撮影したパテベビーのフィルムは16巻に上った。(P-54)
- 1月 11日、午後9時45分、ローマを発ち、翌12日午後2時頃、ニース着、タクシーでカーニュ=シュル=メールに入り、オテル・コロニーに投宿。以後しばらく同地に滞在し、制作する。(P-55)
- 1月 13日、車でニースに足を伸ばす。(P-56)
- 1月 22日、カーニュからヴァンスに移り、以後滞在。(P-58)
- 1月 25日、ヴァンスに雪が降り、古家新とともに雪景色を写生する。(P-59)
- 2月 3日、車でグラスへ行き、気に入ったため、ホテルを定めてヴァンスへ戻る。(P-60)
- 2月 7日、ヴァンスよりグラスへ移り、オテル・ベル・ヴュー(Belle Vue)に滞在。カンヌにも足を伸ばす。(P-61)
- 2月 16日、ニースへ花合戦を見に行く。(P-64)
- 2月 17日、グラスからカンヌに出て、午後4時の列車に乗り、翌18日午前11時、パリ、リヨン駅に到着。2ヶ月を超えるイタリア～南フランスの旅を終える。(P-65)
- 3月 18日、パリから列車で1時間ほどのコルベイク(Corbeil)へ、一人でスケッチに行く。(P-66)
- 4月 薩摩治郎八の援助で開催された、仏蘭西日本美術家協会の第1回パリ展(4月8日～20日、パリ、ルネサンス画廊)に作品1点を出品。(同展出品目録：本文註15)
- 4月 17日、午後10時、パリを発ち、小磯良平、竹中郁と、ベラスケス、エル・グレコ、ゴヤを見に、スペイン旅行。19日、午前7時、マドリッド着。ホテル・マジスティックに宿泊。(P-68/『水繪 技法と随想』p.304ほか)
- 4月 21日、闘牛を見物し、6巻のパテベビーに撮影。翌22日はエル・エスコリアルへ。(P-69)
- 4月 23日、トレドを訪ね、エル・グレコの足跡を辿る。24日、スペインを発ち、(おそらく25日か26日)パリ着。(P-70)
- 5月 4日、日本へ帰る川口軌外一家を、パリの北駅で見送る。(P-71)
- 5月 24日、小磯良平と、ロンドン旅行。午後7時半にロンドン、ヴィクトリア駅に到着し、日本のホテル、常盤に宿泊。日本料理も楽しんだ。(P-72)
- 5月 25日、ナショナルギャラリー、26日、大英博物館、ロンドンブリッジ、タワーブリッジ等を巡る。(P-73, P-75)
- 5月 28日、白山会の多田氏の案内でキューガーデンとハンプトンコートを見る。(P-77)
- 5月 29日、午前、ソーホー・スクエアにあるニューマンの店に行き、永らくの希望だったニューマンの水彩絵の具を購入。午後はウォレス・コレクションを見学、その後タワーブリッジに行き、パテベビーで撮影する。(P-79)
- 5月 30日、午前9時ロンドン発の汽車でパリに戻る。(P-79)
- 7月 6日、パリを発って、ル・アーヴルへ。6日間、ノルマンディー地方を一人で旅行する。(P-80)
- 7月 8日、ル・アーヴルを発ってトゥルーヴィルへ。気に入った構図を見つけ、翌日から制作。(P-82)
- 7月 10日、トゥルーヴィルで過ごした後、午後オンフルールへ行き制作。翌11日、パリへ戻る。(P-84)
- 8月 2日、ブルターニュ地方への一人旅。午後1時10分パリを発ってサン=プリューへ。オテル・ド・フランスに宿泊。(P-86)
- 8月 3日、サン=プリューを発ってトレギエへ。オテル・セントラル(Hôtel Central)に宿泊、近藤七郎一家も滞在していた。(P-87)
- 8月 6日、同宿のフランス人ドクターに誘われ、近藤七郎一家とともにトレギエ近郊のポンパルヘドライブする。(P-88)
- 8月 9日、近藤一家と別れ、トレギエからブレストへ移る。オテル・コンチネンタル(Hôtel Continental)に宿泊。(P-89)
- 8月 11日、ブレストからル・コンケの漁村を訪ね、ブレストへ戻る。(P-90)
- 8月 12日、ブレストを発ち、汽船でル・フレへ、そこからモルガへ。午後4時半にモルガを発ち、6時ドゥアルヌネに入り、17日まで滞在(オテル・デュ・コメルス Hôtel du Commerceに宿泊)。滞在中、各国(英・仏・独・米・ハンガリー)から訪れている画家たちと交流。おそらく18日、パリへ戻る。(P-91, P-93)
- 8月 25日、式場隆三郎、近藤七郎とともに、オーヴェール=シュール=オワーズに赴く。ゴッホ兄弟の墓とガシェ家を訪ねる。(ガシェ家芳名録：本文註22/PN-4)
- 8月 26日、9月に開催される第4回蒼原会展に出品するため、水彩画3点を日本へ送る。(P-94)
- 8月 31日、ゴッホの展覧会を見るために、オランダ、ハーグを訪れる。ホテル・テルミヌス(Hotel Terminus)に宿泊。(P-95)
- 9月 1日、クレラー=ミュラー本社で開催されているゴッホ展を訪れ、午後はマウリッツ・ハイス王立美術館でレンブラント等の作品を見る。(P-96)
- 9月 2日、クレラー=ミュラー・コレクションによるゴッホ展を再訪した後、ハーグ発12時27分の列車でアムステルダムへ移り、ホテル・ハウデン・ホーフト(Hotel Het Gouden Hoofd)に投宿、昼食後アムステルダム国立美術館でレンブラント等の傑作を見る。(P-97, P-98)
- 9月 3日、汽船に乗ってマルケン島とフォーレングダムを回遊。(P-100)

- 9月 4日、アムステルダム国立美術館を再訪し、昼食後、アムステルダム市立美術館を見た後、ベルギーへ。アントワープ到着後、計画していたホテルが閉店しており、飛び込みで入ったホテルで、ひどい目に遭う。(P-101, P-102, P-103)
- 9月 5日、ヘントへ移り、ホテル・デリッセに宿泊、6日、ブリュージュに移りHôtel du Singe D'or(オテル・デュ・サンジュ・ドール)に一泊し、7日、パリへ戻る。(P-104)
- 9月 第4回蒼原会水彩画展(日本橋丸善:9月21日-9月26日)開催、滞欧中の中西利雄が送った3点の作品は好評を博した。(周(小山周次)「太鼓を叩く」『みづゑ』297、1929年11月、p.539 / 小山良修「蒼原会略史」『蒼原』1、1935年10月、p.65)
- 10月 23日、東京美術学校の後輩、鈴木重成とともに、榛名丸で渡仏してくる美校の同級生荻野暎彦を迎えにマルセイユへ。1日目、12時15分にパリのリヨン駅を発ち、午後7時、クレルモン=フェラン着、グランド・オテル・ド・ラ・ポストに投宿。(P-106)
- 10月 24日、クレルモン=フェラン近郊の火山、ピュイ・ド・ドームへ登る。(P-107)
- 10月 25日、クレルモン=フェランを発ち、途中ヴィシーに寄り、午後10時半、リヨン着。オテル・ロワイヤル(オテル・ル・ロワイヤル・リヨン、現在も5つ星ホテルとして営業中)に宿泊。(P-108, P-110)
- 10月 26日、リヨン美術館を見学。ピエール・ピュヴィス・ド・シャヴァンヌの壁画やマネ、クールベの作品を見る。昼食を経て午後も同館で過ごす。(P-111)
- 10月 27日、リヨンを発ち、アヴィニオン見学後、マルセイユへ。旧港前のオテル・メヂテランネー(メヂテラネ Méditerranéeか?)に宿泊。写生しつつ榛名丸の到着を待つ。(P-111, P-112)
- 10月 29日、旧港前のオテル・ノーチックに移る。(P-115)
- 10月 30日、エクサン・プロヴァンスを訪問。(P-113)
- 11月 1日、レスタックに行く。(P-115)
- 11月 2日、再度ホテルを変え、「グランド・ホテル」(Le Grand Hôtel du Louvre et de la Paix)に移る。このホテルは中西がマルセイユ上陸時に泊ったホテルである。午後、アルルへ行く。(P-115)
- 11月 3日、榛名丸で渡仏してきた荻野暎彦を出迎える。荻野とは以後しばしば行動を共にすることになる。翌4日、パリへ向かう。(P-116)
- 11月 第22回サロン・ドートンヌ(グラン・パレ、パリ:11月3日-12月22日)に《Trouville, bateaux(トゥルーヴィル、船)》と《Meudon, la Maison blanche et le Chemin(ムードン、白い家と道)》(現在は《ムードンの丘》というタイトルで知られている)の2点が入選、蒼原会でその報を知り、バンザイが叫ばれる。(本文註28/小山良修「蒼原会略史」『蒼原』1、1935年10月、p.65)
- 12月 8日、上社会在パリ会員で、パリ滞在中の東京美術学校助教授和田季雄夫妻を囲む会を開催。中西、荻野暎彦、荻須高德、山口長男、小堀四郎、高野三三男、藤岡一、小磯良平、小磯の友人の竹中郁らが参加。(本文註36)
- 12月 20日、小磯良平が使用していたパリ14区、エルネスト・

クレッソン通り18番地のアトリエを借用する権利を正式に引き継ぐ。この建物は外国人画家向けアパート形式の貸アトリエで、中西が小磯から引き継いだ部屋は、正宗得三郎、大久保作次郎、伊原宇三郎、小磯良平と、代々日本人画家によって受け継がれた。中西の後は森芳雄に引き継がれることになる。(P-118/中西利雄「壁紙を怖れる」『水彩散策Ⅲ』『みづゑ』345、1933年11月、pp.315-316)

1930(昭和5年)

- 1月 (前年末か1月8日までに)パリ14区、エルネスト・クレッソン通り18番地のアトリエに引っ越す。モデルを雇って研究を続ける等、この冬はこのアトリエで過ごす。(L-2, L-3)
- 2月 15日、当時荻野暎彦が住んでいた日本人学生会館でBal(舞踏会)があり、荻野や鈴木良三と参加。ダンスを楽しみ、ベルギー人一家と楽しく過ごす。(L-3)
- 2月 プール=ラ=レーヌの近藤七郎宅の雑煮の会に招かれ、月遅れの正月気分を満喫する。(L-4)
- 3月 17日、荻野暎彦と二人でサル・プレイエルで開催された、ピアニストのアルフレッド・コルトー、ヴァイオリニストのジャック・ティボー、チェリストのパブロ・カザルスによる三重奏を聴きに行く。(L-7)
- 3月 24日、サル・プレイエルで開催された、ブルーノ・ワルター指揮によるベートーヴェンの二つの交響曲のコンサートを聴きに行く。(L-8)
- 3月 31日、5ヶ月ぶりにパリを離れ、ノルマンディー地方のディエップを訪れる。オテル・アグアード(Hôtel AGUADO)に宿泊。(P-121, L-11)
- 4月 3日、午前、パリに戻る。日本から送ってもらった、中西がかつて制作した一連の水彩画の包みを受け取り、思いを新たにする。翌週7日の月曜日から、再びアトリエで、モデルを雇っての研究を始める。以後、平日はアトリエでモデルでの人物研究、週末は郊外へスケッチ等に出かける日々が続く。また油彩で制作することが多くなる。(L-11, L-12)
- 4月 6日、荻野暎彦とパリ郊外、クラマールからムードン方面へ写生に出かける。またムードンの藤岡一の家を訪問。(L-12)
- 4月 13日、荻野暎彦、山内(荻野と同船で渡仏してきた人物)とともに、サン=ジェルマン=アン=レーに行く。(L-14)
- 4月 21日、白山会の中江大部(広島高等工業学校教授)とロンシャンの競馬を見に行き、日本料理店の常盤で夕食をとにする。(L-14)
- 4月 26日、鈴木良三のアトリエで白山会の解散会。二年続いた白山会も帰朝者が相次ぎ、ひとまず解散して、またあらためて日本で集まることにする。(L-16)
- 4月 27日、荻野暎彦と二人で、ファン・ドワーズ(コンフラン=サントノリーヌ)へ写生に出かける。(L-16)
- 5月 3日、午前中アトリエでモデルを描き、午後、ラ=ヴァレンヌ=サン=ティレールに一人でスケッチに出かける。(P-125)
- 5月 4日、荻野暎彦とヴィリエ=シュル=モランに写生に出かける。(P-127)
- 5月 6日、荻野と二人、オランピア劇場に活動写真を見に行く。(L-20)

- 5月 10日、荻野と二人で、シャンゼリゼ劇場へ、アンナ・パヴロワの舞踊を見に行く。(L-22)
- 5月 11日、荻野、山内と3人で、ラ・ヴァレンヌ=サン=ティエールに清遊する。(L-22)
- 5月 13日、15日、両日も荻野暎彦とともに、パリ・オペラ座で開催の、フルトヴェングラーが指揮するベルリン国立オペラのオーケストラの演奏会に行く。(L-23)
- 5月 18日、スケッチの予定が天候悪く、荻野と二人でセーヌ河の川下り等を楽しむ。(L-24)
- 5月 31日、荻野と二人、サル・プレイエルで開催されたシャリアピンのコンサートに行く。(L-28)
- 5-6月 四谷塩町の地所にあった中西のアトリエを、中野へ移転することになり、パリから手紙で、いろいろと注文をする。アトリエは中西の滞仏中、蒼原会の集まりに利用して貰うことにする。(L-26~L-28)
- 6月 11日、荻野暎彦とフォントネー=オー=ローズへ出かける。田舎の景色を描くためにホテルに部屋を定め、翌日から3週間ほど滞在。滞在中もしばしばパリへ戻り、用足しや食事をする。(L-29~L-33)
- 6月 25日、外国人の身分証明書の書き換えに行った所、中西の勘違いにより書き換えの時期が遅れていたため、罰金220フランを支払う。(L-32)
- 6-7月 ルーヴル美術館のウジェーヌ・ドラクロワ展(*Exposition Eugène Delacroix : peintures, aquarelles, pastels, dessins, gravures, documents : Musée du Louvre, juin-juillet 1930*)、ベルネーム画廊の「ジェリコーより今日までのフランス水彩画展」(*Les Aquarellistes français de Géricault à nos jours : Galerie Georges Bernheim, du 18 juin au 3 juillet 1930*)から啓発を受け、これら二つの展覧会に何度となく足を運ぶ。〔水繪 技法と随想〕、pp.312-317)
- 7-8月 パリのアトリエに籠もって制作を続ける。この頃から、水彩にグアッシュを併用した色彩研究を始める。(L-40ほか)
- 7月 歯痛に苦しみ、歯医者に通う。幸い大事に至らずに済んだ。(L-37, P-135)
- 7月 19日、上社会パリ在住会員主催で、岡田三郎助夫妻の歓迎会を、万花酒樓で開き出席。岡田三郎助夫妻のほか、上社会メンバー7名(中西、荻野暎彦、荻須高德、山口長男、小堀四郎、高野三三男、加山四郎、(藤岡一は欠席))、当時パリにいた美校の和田季雄夫妻や、荻須高德の友人である大橋了介、横手貞美等も参加していた。終了後、高野三三男のアトリエに場所を移し、夜明かしをして楽しく過ごす。(L-40)
- 7月 26日、東京美術学校出身者による岡田三郎助夫妻歓迎会が日本人倶楽部で開催されることになり、出席を予定する。(L-40)
- 8月 14日、中西のアトリエの上の階が空き、荻野暎彦が転居してくることが決定する。引っ越しの完了日は9月1日。(L-47, L-50, L-53)
- 8月 17日、マント(マント=ラ=ジョリー)へスケッチに出かける。パリへ戻って夕食後、カフェのテラスで藤田嗣治に会う。(P-136~P-140)
- 8月 22日、パリに来た織田幹雄ら、日本学生体育連盟代表選手への歓迎会が日本人倶楽部で開催され、出席する。24日、日本人会はバス2台を借りて、日本対フランスの陸上競技の応援に行くが、日本は敗退。(L-51, L-52)
- 9月 4日、トリエール=シュル=セーヌに出かける。景色も美しく、描けそうな場所のため、オテル・デュ・コムルス(Hôtel du Commerce)に部屋を定めて翌5日から滞在することにする。5日にこのホテルに来てあらためて見るとあまりに部屋が汚いので、6日、レストラン・パスカル(Restaurant Pascal)に宿を変え、以後二週間ほど滞在(9月20日まで)。滞在中、レストランの親爺と釣りを楽しみ(15日)、夜は近くのたばこ屋へ、ラジオで流れるクラシック音楽を聴きに行くことが習慣となる。時折パリに戻り(14日)、またトリエール周辺の町々を訪ねてスケッチを重ねる。アンドレジーおよびボン・エッフェル(コンフラン=サントノリーヌ)(16日)、ポワシーおよびヴィレンヌ=シュル=セーヌ(17日)、他にヴェルヌイユ=シュル=セーヌ、ムラン=アン=イヴリーヌ(19日)など。(L-54~L-60, P-141~P-151)
- 9月 21日、和田季雄夫妻とともに、人見絹枝ら日本の女子代表選手とパリの代表選手との競技会の応援に行く。日本は敗退。(L-61)
- 10月 2日、アムステルダム市立美術館で開催のゴッホ展(9月6日-11月2日)を見るため、荻野暎彦と二人でオランダを訪れる。昨年と同じホテル・ハウデン・ホーフト(Hotel Het Gouden Hoofd)に宿泊(6日まで)。展覧会ではゴッホの作品366点が展示され、「もうこんな素晴らしい展覧会は一寸ありますまい」とはがきに記す。(P-152, P-154)
- 10月 7日、アムステルダムを立ち、ハーグを経てアントワープへ。アントワープで2泊し、開催中のベルギー独立100周年を記念する「アントワープ植民及海洋万国博覧会」を見て、9日、パリに戻る。(L-152, P-156)
- 10月 26日、パリ近郊、パレゾーへ写生に行く。(P-157~P-160)
- 11月 第23回サロン・ドートンヌ(グラン・パレ、パリ：11月1日-12月14日)に《Triel-sur-Seine(トリエール・シュル・セーヌ)》、《Paysage à Meudon(ムードン風景)》(現在は《ロダンの家に見える風景(木立)》というタイトルで知られている)の2点が入選。8日の『ル・タン(Le Temp)』紙のサロン評で、中西の作品についても言及される。(本文 註32, 33)
- 11月 12日、帰国する鈴木良三を、パリのリヨン駅まで見送る。(L-66)
- 11月 15日、珍しく出会った二科の海老原喜之助、吉井淳二とともに、シルク・ディヴェールに行き、終了後はカフェ・クーポールで夜通し語り合う。(L-67)
- 11月 20日、マルセイユ発の日本郵船香取丸で11月28日に日本へ帰る近藤七郎一家と別れの宴を兼ね、以前から約束していたトゥール・ダルジャンで夕食をともにすることとなる。(L-69)
- 11月 23日、近藤七郎の子供達と、ルナ・パークで遊ぶ。翌24日、近藤がパリにいる最後の日、カフェ・クーポールで深夜2時まで話し込む。(L-70)
- 11-12月 アトリエでの制作に、自分なりの成果や手応えを感じ始める。グワッシュを多く手がけるようになる。(L-67, L-73, L-79)

- 12月 16日、松岡銀六(東京美術学校図画師範科出身)と、ガスタン・ウォルムズ(ブラジル人画家)と3人で夕食をとった後、ウォルムズ車で音楽会へ行く。(L-76)
- 12月 22日、松岡銀六の紹介で知り合ったポーランド人の男女が中西のアトリエを訪問。レコードを聴いたり、パテベピーのフィルムを見たりして楽しく過ごす。(L-78)
- 12月 24日、近所のカフェ、ピュファローで、荻野とともにクリスマスのレバイヨン(夜明しの宴)を楽しむ。(L-79)
- 12月 28日、松岡銀六、ガスタン・ウォルムズと3人で、パリ近郊をドライブ。トリエール=シュル=セヌまで足を伸ばし、9月に滞在したレストラン・パスカルにも寄る。(L-79)

1931(昭和6年)

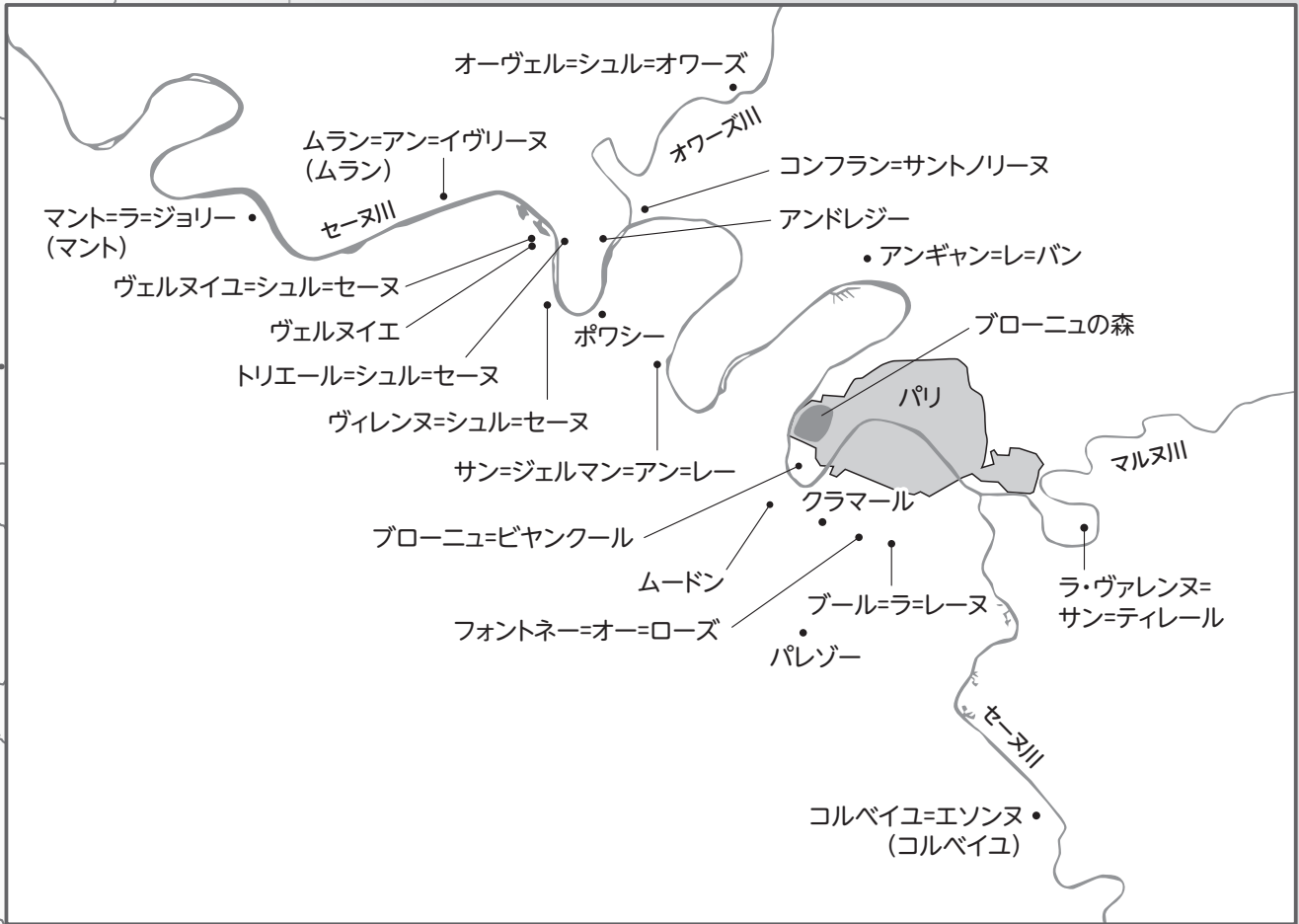
- 1月 15日夜(か16日)、パリを出て南仏へ。はじめニースに滞在。19日、マントン滞在中の荻野暎彦がニースへ来て泊まり、翌20日、二人でヴィルフランシュ=シュル=メールを訪れる。中西は20日にニースの宿を引き払ってヴィルフランシュ=シュル=メールに移り、パンション・ケルマリアに投宿。日本人の画家たちも5~6人来ていた。(P-161~P-163)
- 2月 11日、この頃までに、宿をパンション・ヌーヴェルに替える。ヴィルフランシュ滞在中、同宿や近くの宿に宿泊していた若い日本人画家達と楽しく過ごす。その中には東京美術学校3年後輩の山口薫、矢橋六郎、清水啓三らもいた。中西はヴィルフランシュ滞在中、マントン(この折少なくとも山口薫は同行している)や、モンテカルロにも訪れた。(L-80, L-81, P-165)
- 2月 20日、同宿の日本人画家たち7人で、サン=トロペへの清遊を楽しむ。(P-168)
- 2月 21日、2年前に3週間ほど滞在したヴァンスに行き、当時滞在中のオテル・レジナへも訪れる。ホテルの主人夫妻は中西をおぼえていて歓待された。(L-82)
- 2月 25日、パリに戻る。(L-83)
- 3月 南仏で制作した作品をもとに、グワッシュを試みたり、モデルを使ってグワッシュの人物像を描くことを続ける。制作に手応えを感じるようになる。(L-83, L-85, L-88)
- 3月 8日の国勢調査の用紙が、中西のところにも届く。(L-86)
- 3月 16日、荻野暎彦、山内、ガスタン・ウォルムズ、中西のアトリエでレコードを聴き、楽しく過ごす。(L-88)
- 4月 4日、復活祭の休みに山内と二人でブルゴーニュ地方へ。4日はディジョンに泊まり(オテル・ラ・クロシュ La CROCHE)、5日、12時の汽車でスミュール=アン=ノーソワへ行き、6日夜パリへ戻る(予定)。(P-169)
- 4月 12日、島崎鶏二(島崎藤村の次男、画家)と島崎のモデル、ピアニストの高木東六とともにムードンへ遊びに行く。(L-90)
- 4月 26日、高木東六が二人のフランス人女性とともに、中西のアトリエへ遊びに来る。レコードを聴いたり、ダンスをしたり、夕飯にはすき焼きのまねごとをして御馳走し、楽しく過ごす。(L-91)
- 4月 30日、帰国船(9月17日マルセイユ出港の日本郵船靖国丸)の予約をする。また同日夜7時から、帰国する和田季雄の

- 送別会を兼ね、日本人倶楽部でパリ上社会を開催、10名程が集まる。会終了後、モンマルトルの藤岡一のアパルトマンで、夜明かしをして過ごす。(L-92)
- 5月 10日、帰国間近の和田季雄夫妻を囲む集まりが上海亭で開かれる。その後中西のアトリエで、中西が撮影したフィルムを見せることになり、和田夫妻、藤岡一家、荻須高德、吉井淳二が訪れる。偶然訪ねてきた海軍中佐加治木も加わり、楽しく過ごす。(L-94)
- 5月 11日夜、かねてより希望していたイタリア旅行に出発(夜10時50分、パリ、リヨン駅発)。12日、国境を越えイタリアに入る。(L-94, P-170)
- 5月 13日、ピサを見て、午後、フィレンツェに入り、ホテル・ポルタ・ロッサ(Hotel Porta Rossa)に投宿。ここを拠点に、フィレンツェ近郊の小都市へ写生に出かける。フィエゾレ(14日)、セッティニャーノ(15日)等。日曜日(17日)は仕事を休み、ウフィッツィ美術館やピッティ宮等を見る。(P-171, P-172, P-174, P-175, L-95)
- 5月 18日、フィレンツェを発ってアッシジに入る。24日まで滞在し、制作を行う。(L-95, P-177)
- 5月 25日午後、アッシジを発って、再度フィレンツェに入る。2年前、小磯良平、古家新と泊まった、ペンシオーネ・クロツィーニ(Pensione Crocini)に投宿。フィレンツェ市内(ミケランジェロ広場:27日)や、近郊の町(ピストイア:6月3日)を描くことを続ける。(L-96, P-179)
- 5月 31日、フィレンツェで開催された欧州女子競技(日本からは人見絹枝も参加)を見る。(P-180)
- 6月 6日、午後4時フィレンツェを立ち、午後11時20分コモ着、湖畔のホテル・ポルタに投宿。(親しくしている加治木中佐がフィレンツェから同行)。(P-181)
- 6月 7日、午後1時23分コモ発、スイスに入り、車窓の美しい風景等(キアツツ、ルガーノ、サン=ゴットアルドのトンネル等)を見ながら午後6時半、ルツェルン着、ホテル・ディアナ(Hôtel Diana)に投宿。(P-186)
- 6月 8日、ルツェルンを立ち、インターラーケンを経て、午後7時半ベルン着、ホテル・ヴィルデン・マン(Hotel Wilden Mann)に投宿。(P-199)
- 6月 9日、午後1時半、ベルンを立ち、途中の駅オルテンで加治木と別れ、バーゼルを経て、午後11時25分、パリ、東駅に到着。夜遅いため、駅近くのホテルに泊まり、翌10日、アトリエに戻る。(P-210, P-213, L-98)
- 6月 11日以後、アトリエで人物画を描き、戸外でスケッチする日々を続ける。フランスでの残された時間を制作に打ち込み、グワッシュと水彩でいく決意を新たにす。(L-99, L-100)
- 6月 23日、日本郵船の事情で、帰国船の靖国丸と箱根丸との日程が入れ替わり、中西が予定している靖国丸は、10月1日マルセイユ出港となる連絡が入る。中西は船の変更はせず、靖国丸で帰国することにする。(L-104)
- 6月 24日、帰国することになった加治木とパリ近郊のモーに遊び、夜は加治木が滞在中のホテルに宿泊して、語り合う。翌25日、アメリカ経由で帰る加治木をパリの北駅まで送る。(P-216, L-105, L-106)

- 6月 27日、日本水彩画会が来年(1932年)、中西のために特別室を設け滞欧作の特集陳列を計画しているという、不破章からの手紙を受け取る。相前後して、上社会も特別陳列を計画しているという手紙が来る。(L-107, L-111)
- 6月 29日、高木東六のピアノ演奏会に行く。(L-107)
- 7月 7日、1年がかりで探していたゴッホの画集(Jacob Baart de la Faille, *L'Œuvre de Vincent van Gogh, Catalogue raisonné*, 4 Volumes, Paris et Bruxelles, 1928)を、1350フランで手に入れる。(L-110)
- 7月 9日、フランス人の友人の結婚のお祝いに招かれる。親しい友人だけ7人で食事やダンスをし、楽しい時を過ごす。また14日のパリ祭には、このメンバーで踊って愉快に過ごした。(L-111, L-113)
- 7月 20日、久しぶりにセーヌ河岸へ写生に出かける。パリ市庁舎を中心としたセーヌの景色を1枚仕上げて戻る。(L-113)
- 7月 23日、3年間の滞欧生活の成果が凝縮されたような、一つの自信に満ちた思いを母に書き送る。「でも一つの慰めは、画とはどんなものかと云ふことが、判ったことです。三年の間パリは勿論、ヨーロッパ中をめぐる、数多くの名作を見ました。之からは無駄なまよひ方はしないと思っております」。(L-114)
- 8月 9日、友人達12, 3人でブローニュの森で野球を楽しみ、夜は日本人倶楽部で夕食を共にする。(L-115)
- 8月 17日から6日間、ノルマンディー地方を旅行する。1日目ルーアン滞在、オテル・ド・ラ・ポスト(Hôtel de la Poste)に宿泊。3日目フェカン、オテル・デ・バン(Hôtel des Bains)に宿泊(他の訪問地は不明)。22日にパリへ戻る。(P-217~P-221, L-116)
- 8月 31日、アトリエの後継者が、森芳雄に決まったことを手紙で家族に報告。(L-117)
- 9月 8日~9日、アトリエの荷物の荷造りをし、9日(もしくは10日)荷物を運送屋に渡す。(P-228~P-229)
- 9月 11日、ロンドンへ。前回と同じ、常盤に投宿。12日、午前ナショナル・ギャラリーへ行き、午後ヴィクトリア&アルバート美術館で水彩画の時代巡陳列を見る。13日、14日とテート・ギャラリー等を見、15日の夜ロンドンを発って、16日午前5時パリに帰る。(P-222~P-228)
- 9月 16日、クラマールで下宿していたベルジェ家から、お別れの食事に招かれる。(P-228, P-234)
- 9月 17日、上社会の送別会が開かれる。18日、遊び仲間との送別会がクーポールで開かれる。(P-228, P-234)
- 9月 19日、アトリエの取引が完了する。(P-228)
- 9月 22日夜、マッターホルンを見るためにスイスへ。23日、24日とツェルマットのPension Greven(ペンション・グレーフェン)に滞在、24日は、電車でゴルナーグラートまで登る。25日、パリへ戻る。(P-231, P-232, P-235)
- 9月 (おそらく28日)パリを発ち、29日、マルセイユに到着。「グランド・ホテル」(Le Grand Hôtel du Louvre et de la Paix)に滞在し、乗船の時を待つ。(P-234)
- 10月 1日、日本郵船「靖国丸」に乗船、マルセイユ港を午後5時30分出航、フランスを離れる。(L-119)
- 11月 1日、神戸に帰着、弟幸三郎が神戸で兄を出迎えた。2日、二人で神戸から、夜9時20分東京駅着の特急燕に乗車、帰宅の途につく。(電報：中野局印10月27日、10月31日、11月1日、11月2日)

関連地図

・書簡に登場する地名および書簡には登場しないが作品名等に登場する地名



茨城県近代美術館

研究紀要 **14**

発行年 - 2022年3月

編集発行 - 茨城県近代美術館

水戸市千波町東久保666-1

電話029-243-5111 Fax029-243-9992

印刷所 - 株式会社 光和印刷